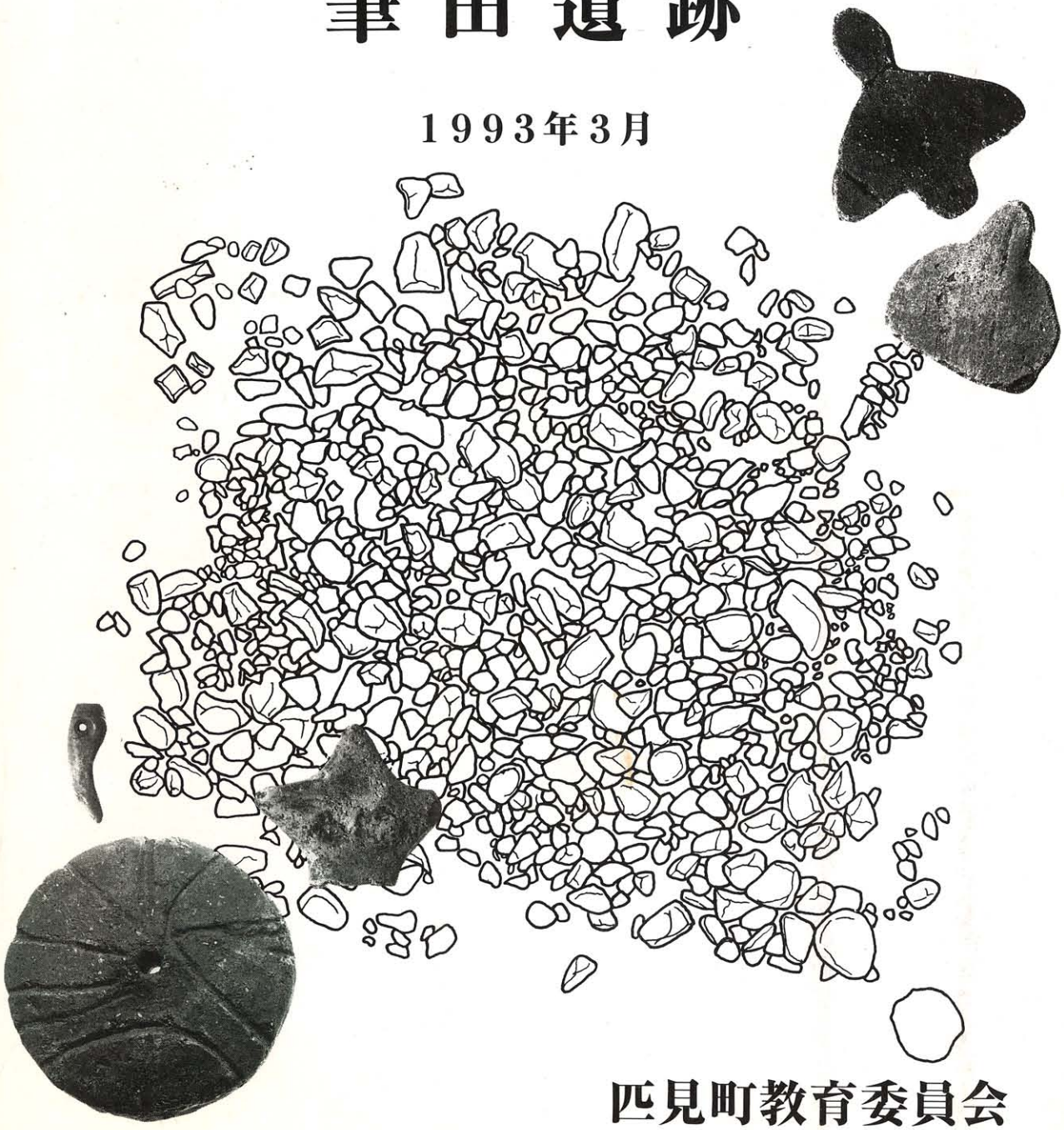
ヨレ遺跡
イセ遺跡
筆田遺跡

1993年3月



匹見町教育委員会

ヨレ遺跡
八也遺跡
華田遺跡

1993年3月

匹見町教育委員会

匹見町教育委員会教育長
揮毫　斉　藤　惟　人

目　　次

第１部　ヨ レ 遺 跡 ---------- （渡辺友千代） ---------- 1
第１章　遺跡の位置と立地 ---------- 7
１．位　置 ---------- 7
２．立　地 ---------- 7
第２章　発掘調査に至る経緯と経過 ---------- 9
１．経　緯 ---------- 9
２．経　過 ---------- 9
第３章　発掘調査の概要 ---------- 10
１．はじめに ---------- 10
２．土　層 ---------- 13
３．上位層での検出遺構 ---------- 14
４．下層面での検出遺構 ---------- 16
第４章　出 土 遺 物 ---------- 27
１．はじめに ---------- 27
２．実測土器 ---------- 27
３．その他の土製遺物 ---------- 42
４．実測石器 ---------- 45
第５章　匹見町ヨレ遺跡出土の植物遺体 ---------- （渡辺　　誠） ---------- 47
１．サンプルの状態 ---------- 47
２．検討のプロセス ---------- 47
第６章　小　　結 ---------- 48

第２部　イ セ 遺 跡 ---------- （矢野　健一） ---------- 73
第１章　遺跡の位置と環境 ---------- 79
第２章　調査の概要 ---------- 80
１．調査の経緯と調査区の設定 ---------- 80
２．整理作業 ---------- 80

第３章　層　　位 ---------- 82
第４章　遺　　構 ---------- 84
１．概　要 ---------- 84
２．第6a層上面検出遺構 ---------- 85
３．第6b層上面検出遺構 ---------- 89
４．第6c層上面検出遺構 ---------- 91
５．第7a層上面検出遺構 ---------- 93
６．第7b層上面検出遺構 ---------- 97
７．第８層上面検出遺構 ---------- 101
第５章　遺　　物 ---------- 102
１．縄文時代後期の土器 ---------- 102
２．縄文時代晩期と弥生時代前期の土器 ---------- 113
３．土製品 ---------- 115
４．石器・石製品 ---------- 116
第６章　ま　と　め ---------- 117

第３部　筆 田 遺 跡 ---------- （渡辺友千代） ------- 127
第１章　調査の概要 ---------- 133
１．はじめに ---------- 133
２．基本層序と文化層 ---------- 135
３．遺　構 ---------- 136
第２章　出 土 遺 物 ---------- 143
１．概　要 ---------- 143
２．土器実測遺物 ---------- 143
３．磁器実測遺物 ---------- 148
４．石器実測遺物 ---------- 148
第３章　小　　結 ---------- 151

第４部　ヨレ遺跡と配石遺跡研究 ---------- （中村　友博） ------- 163

第1部　ヨ　レ　遺　跡

鳥形土製品出土状況

例　　言

1．本書は島根県益田農林事務所の委託を受けて，匹見町教育委員会が平成3年に行った匹見地区県営圃場整備事業に伴う，ヨレ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化課	
	島根大学法文学部教授	田中　義昭
	広島大学文学部助教授	河瀬　正利
	山口大学人文学部助教授	中村　友博
事務局	匹見町教育委員会教育長	斉藤　惟人
	匹見町教育委員会教育次長	渡辺　　隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	佐々木厚造
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	籾田悦子，大谷文子，藤村妙子，大賀幸恵	
調査参加者	栗田　定，三嶋忠俊，森　　清，森脇雅夫，沼田吉雄，斉藤実夫	
	原田禎二，落田政人，渡辺　照，斉藤直行，山崎リマヨ，森脇一枝	
	斉藤百合子，長谷川時子，溝田久子，斎藤君子	

3．発掘調査に再しては，益田農林事務所の水　壮・平岡昭博氏をはじめ，土地所有者，地元の方々に終始多大な協力をいただいた。また，名古屋大学文学部の渡辺　誠教授には炭化物の分析，山口大学人文学部の中村友博助教授には本章に関連する論考を第4部でご報告いただき，遺物整理にあたっては立命館大学文学部の家根祥多助教授，島根県教育委員会文化課の松本岩雄・京都大学院生の矢野健一氏らのご指導を得た。ここに合せて感謝の意を表したい。

4．今回の調査では，柱穴状遺構－P，特殊遺構－SX，土坑－SK，建物遺構－SBと略号した。

5．紙数に伴って，図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は，渡辺友千代・大賀幸恵・大谷百合子が各分担し，執筆・編集は調査員渡辺が，熱田貴保主事の指導のもとで行った。

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 7
第２図　発掘地点配置図 …… 8
第３図　調査区南北土層図とＣ区の列石 …… 11～12
第４図　土層図Ⅱ（ABトレンチ東半） …… 13
第５図　中世基実測図 …… 14
第６図　配石（Ｄ調査区） …… 15
第７図　土坑断面図 …… 19
第８図　線刻石の実測図 …… 19
第９図　配石断面・立体図 …… 20
第10図　層序・貯蔵穴断面図 …… 21
第11図　鳥形土製品出土状況図 …… 22
第12図　Ａ・Ｂ調査区遺構図(1) …… 23～24
〃　〃　(2) …… 25～26
第13図　土器実測図(1) …… 28
第14図　土器実測図(2) …… 29
第15図　土器実測図(3) …… 31
第16図　土器実測図(4) …… 32
第17図　土器実測図(5) …… 33
第18図　土器実測図(6) …… 35
第19図　土器実測図(7) …… 36
第20図　土器実測図(8) …… 38
第21図　土器実測図(9) …… 39
第22図　土器実測図(10) …… 40
第23図　復元土器実測図 …… 40
第24図　その他の土製品 …… 41
第25図　石器実測図(1) …… 43

第26図　石器実測図(2) …… 44
第27図　石器実測図(3) …… 45
第28図　その他の石器実測図 …… 46

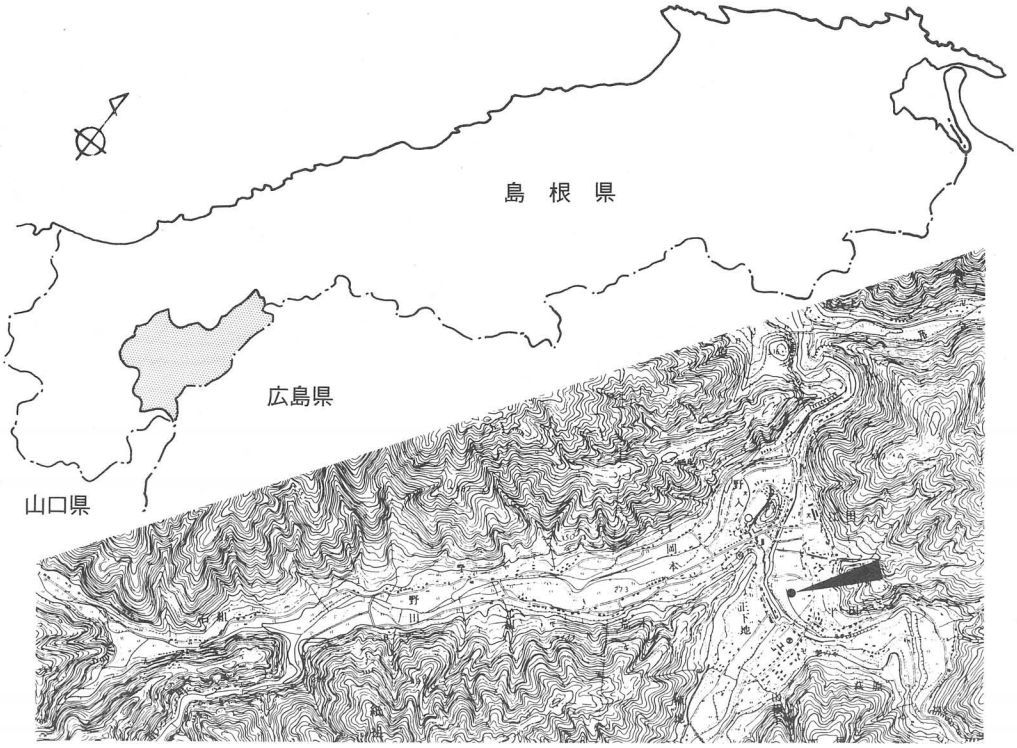
図　版　目　次

図版１　１．遺跡地点鳥瞰
図版２　１．発掘風景　２．中世墓検出状況
図版３　１．列石出土状況（南東から）　２．列石中の方形状に突出した部分
図版４　１．銭貨出土状況（中世墓壙内）　２．骨片出土状況
３．土偶出土状況　４．黒色磨研土器出土状況
５．石鏃出土状況　６．円盤形線刻土製品出土状況
図版５　１．３層上面に出土した配石（Ｄ区）　２．Ａ区に出土した配石群
図版６　１．配石に出土した線刻の石体　２．立石を伴う配石（SK97）
図版７　１．Ａ地点土坑内状況　２．Ａ区東側の基底面状況（北西から）
図版８　１．土坑内の組石状況（P50）　２．トチの実を検出した土坑状況（SK55）
図版９　１．Ａ区の発掘状況（南から）　２．Ｂ区の発掘状況（北から）
図版10　１．Ａ区・Ｂ区の発掘状況　２．南から見た発掘区
図版11　１．土器(1)　２．土器(2)
図版12　１．土器(3)　２．土器(4)
図版13　１．土器(5)　２．土器(6)
図版14　１．土器(7)　２．土器(8)
図版15　１．土器(9)　２．土器(10)
図版16　１．その他の土製品　２．復元土器
図版17　１．石器(1)　２．石器(2)
図版18　１．石器(3)　２．その他の石器
図版19　１．種皮無しの種子　２．種皮付きの種子
３．発芽孔のある種皮片

第１章　遺跡の位置と立地

１．位　　置

遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字イ251に所在する。匹見町は県の西端部，広島・山口の両県に接した中国山地の山間部に位置し，町域は300.88㎢を測る。町界には海抜1,000ｍ内外の山々が４周し，流域に沿った河岸段丘に僅かに平地が形成されているにすぎない。谷平地を流下する河川は，数条からなる北東－南西に走る断層谷に沿い，その各支流を集めた本流（匹見川）は，北西流して



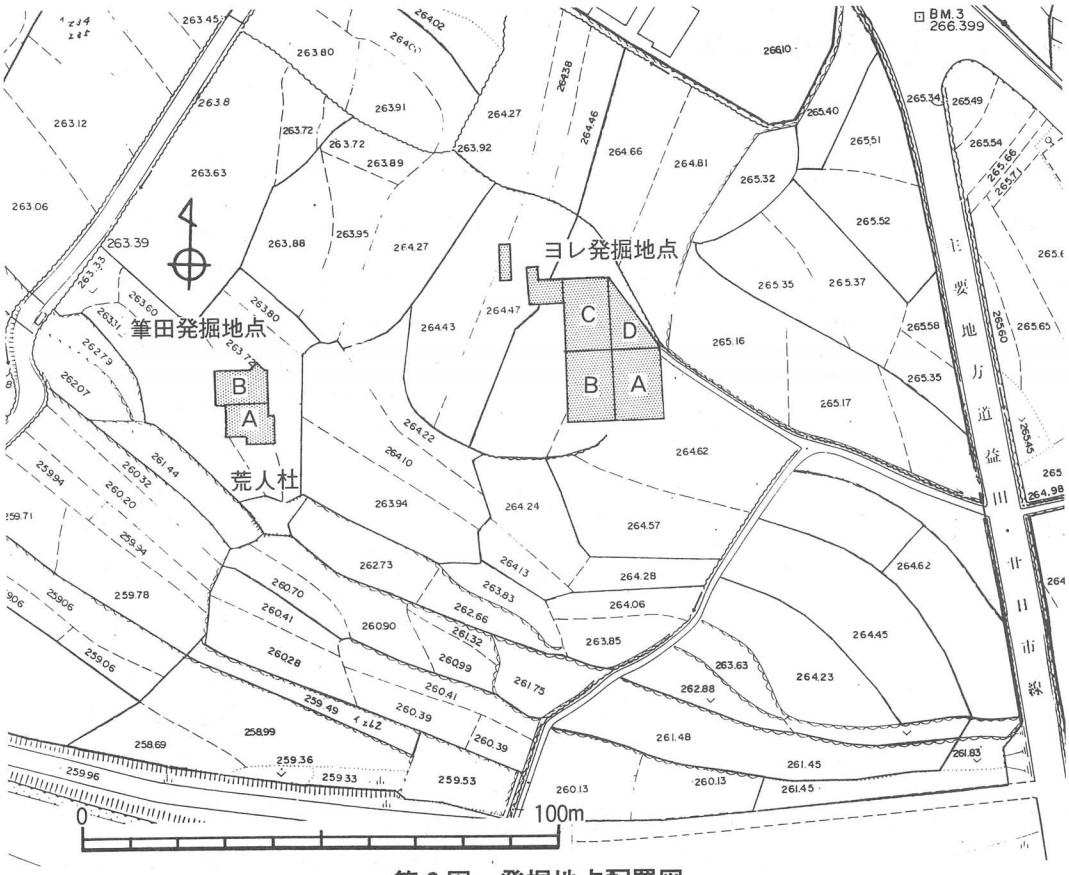
第１図　遺 跡 位 置 図

益田市内で高津川へ流れ込んでいる。それらの支流が相会する中央部にヨレ遺跡がある（第１図・図版１）。

２．立　　地

本遺跡は，南西流してきた本流が北西流へと転じて周流し，河岸段丘を形成する左岸に立地している。また対岸には北流した広見川が相会しており，該地は２川の合流地でもあり，狭小ながら谷平地が広がる肥沃地でもある。

調査区は，匹見川から比高差約２ｍを測った河岸のさらに２ｍ上った２段から成る段丘上にあっ



第２図　発掘地点配置図

て，その現地標高は264.57ｍを測る。このなだらかに広がる段丘上には現在水田地が拓かれている（第２図・図版１）。また北面300ｍの山裾側には人家が点在し，その間を県道益田甘日市線が抜け，一方北東からは県道匹見波佐線が交叉しており，交通の要衝でもある。

段丘のこうした立地的好地から遺跡も指呼には多く点在し，東からイセ遺跡・ヨレ遺跡・筆田遺跡とならんでいるし（図版１），本遺跡の北東400ｍにも奈良・平安時代の八祖遺跡や辰美屋遺跡といった古代遺跡が存在している。一方，縄文時代のものでは宅地造成中に発見された門田遺跡はイセ遺跡に隣接し，弥生時代のものでは北西側の後背となっている標高約543ｍを測る総山裾の台地に江田平遺跡があって，その中腹の斜面には江田古墳群が該地区を見下すよう分布しているのである。

また本遺跡の300ｍ北面には標高約398ｍを測る上ノ山があって，その裾部には須恵器や土師器が散布する木和田畑遺跡があり，その山上は中世の山城であった。この山城は天正年間（1573－91年）大谷権守通光が住居したといわれ[(1)]，その首塚が筆田遺跡の南側５ｍにある荒人杜（第２図）であるという口承もある。また本遺跡に隣接する「垣添」という地名などは，まさしく中世期における屋

敷地割の遺称と考えられ，本報告する中世墓の検出は，それらの伝承を実証するものであったといえるであろう。

（渡辺友千代）

参考文献

(1)　岡本正司著　『石見諸家系図録』　昭和43年

第２章　発掘調査に至る経緯と経過

１．経　　緯

水田地が広がる本地区では，以前から畦畔・水路で石器剝片などが採集されていた。とくに昭和61年６月には斉藤博章氏により，縄文土器片などの数点のほか，１点の勾玉が採集されたことによって注目され，同年には周知の遺跡として認定されるに至ったのである。

その後，同地区が県営圃場整備事業の対象地とされたため，平成２年度には国庫補助を受けて事前に分布調査を行なった。その折の調査地点名は，字名から「ヨレ」と呼称するものと，隣接する「太鼓胴」と呼称する２地点を調査した。ヨレ地点では２ｍの方形区を４箇所，また太鼓胴地点では同じく２ｍの方形区を４箇所，合せて32㎡を試掘した。その結果，上位面を中心に土師器・弥生土器，下位面には縄文土器片とともに多くの石器類，また遺構などが検出されたことにより，良好な遺跡であることが判明した。(2)

２．経　　過

本地域の圃場整備事業が始められる平成３年度，分布調査の結果に基づいて，４月８日から本格調査を実施することにした。調査にあたって，まず事業側から当年度に施工したい，との旨から同年８月末をもって現地調査が終了するよう計画した。しかし調査の段階で，縄文晩期に相当すると想定される多くの配石群が検出されたため，調査は難渋をきわめた。が，配石群という重要性から事業側と教育委員会とでの会合をもった結果，盛土工法で保存しようという結論に至った。したがって４分割した調査区の北半、Ｃ・Ｄ区を最初の遺構検出面で掘り下げを止め，南半のＡ・Ｂ２区を堀下げることにした。このため大部分の配石における下層面，あるいは部分的に掘削していないところも生じ，全貌は明かになっていないのが現状である。しかし保存という成果とともに，調査期間としては，同年９月９日という短時間で終了することができた。

（渡辺友千代）

参考文献

(2)　『匹見町内遺跡詳細分布調査報告諸』Ⅳ　匹見教育委員会

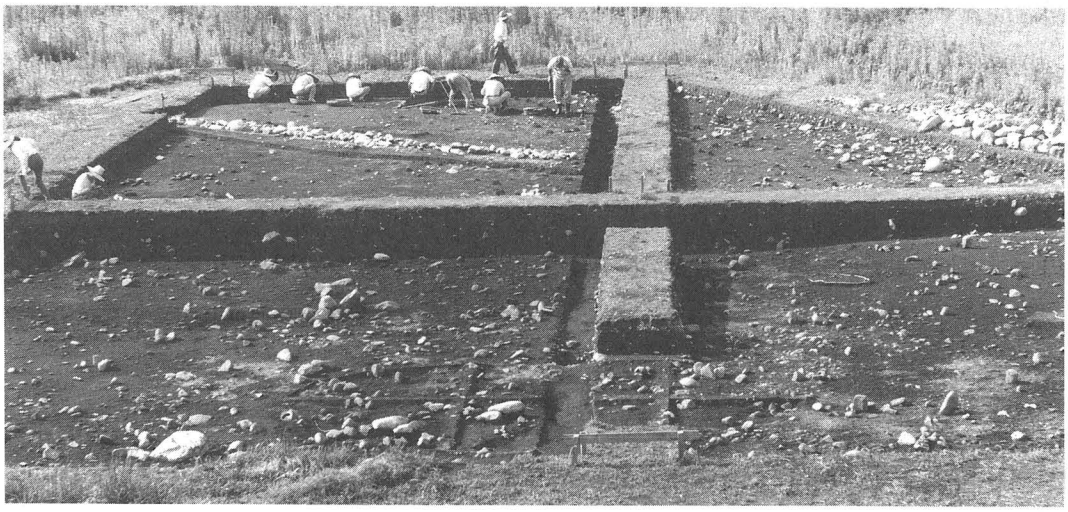
第３章　発掘調査の概要

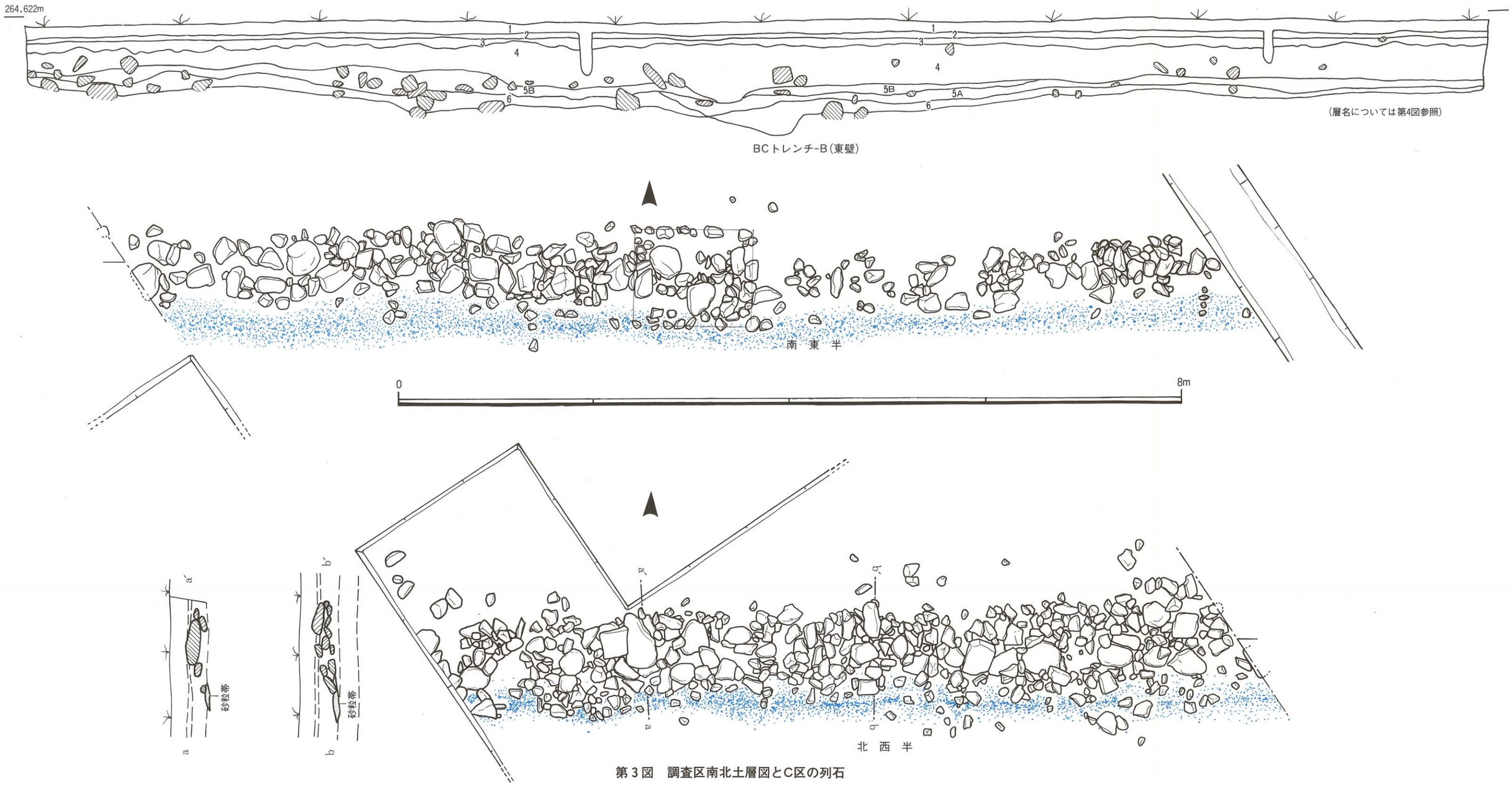
１．はじめに

調査地点の選定　本遺跡は，字名「太鼓胴」と呼称されている地点（匹見イ251番地）を中心に調査したものであるが，とくに隣接する南東面もヨレ（匹見イ270～275番地）と称する包蔵地であり，地区民の間では後者の名称で一帯を通称しているので，「ヨレ遺跡」と命名した。また，包蔵地であるヨレ地点に一部入るものの事業側の計画書によると，掘削されないので北西面の当該を対象地に選定したものである。

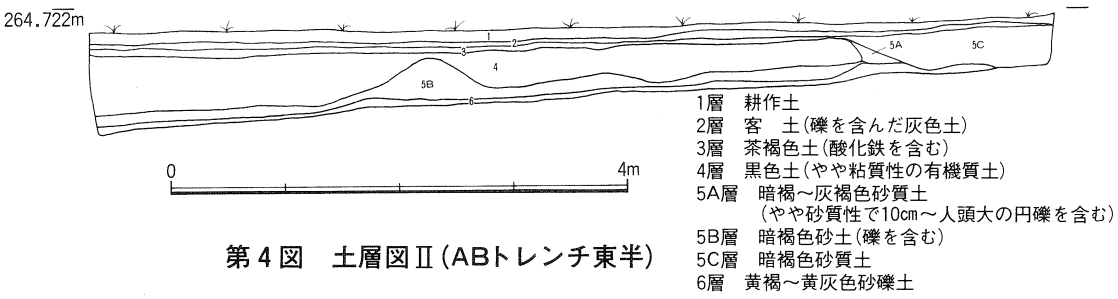
調査地区の設定　調査区の設定にあたっては，分布調査で凡その範囲が把握されていたので基準となる基点杭は，それらを鑑み字名「太鼓胴」と「ヨレ」と称する字名の境界線上の北端にまず設けることにした。そして南に15ｍ測った地点へ南西杭を設けた。つぎに南東杭は，南西杭から東に20ｍ測り，さらに北西杭は南西杭から磁北に向って30ｍ測った地点に設けた。ただし北側は，北東面側に段差約60㎝測って一段高い石垣が設けられていたので，これを発掘区から除外した。つまり，北面杭から東側に11ｍ測り，その地点からは斜行する石垣に添って基点杭と結び付ける，という変則的な計り方をしている（第２図）。

521.25㎡という調査地区を設定した後，まず磁北に向って十文字に幅70㎝のトレンチを設けることとし，その４分割された地区を時計廻りにＡ～Ｄのアルファベットを冠して地区名とした。またトレンチは，磁北方向のものをBCトレンチ，東西に対向するものをABトレンチと呼称することにした。なおトレンチ掘削の後は，両トレンチに添って幅１ｍのセクションベルトとして設けた（第12図・図版10）。





第３図　調査区南北土層図とC区の列石

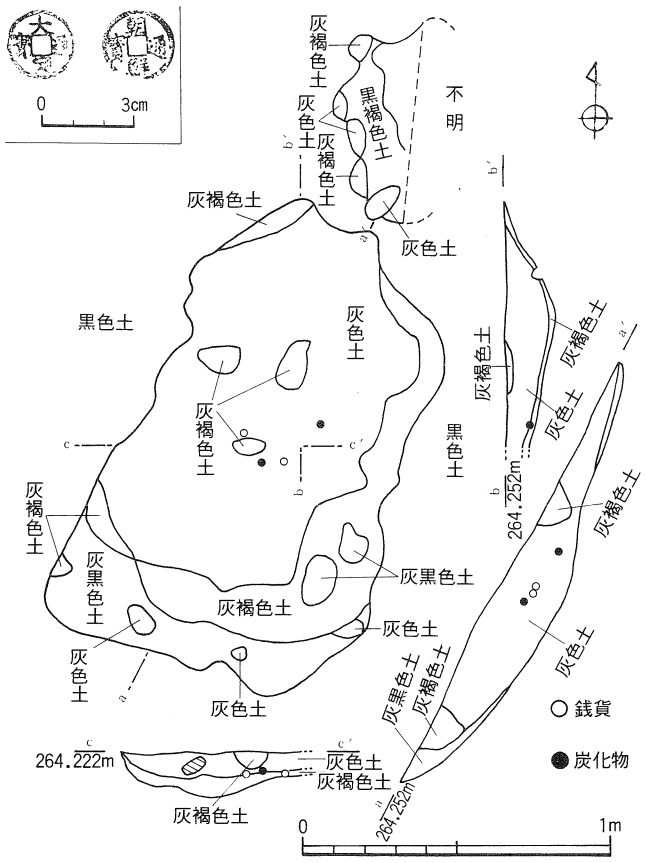


第４図　土層図Ⅱ(ABトレンチ東半)

２．土　　層

層序　基本的層序は上から，水田耕作土である表土，２層の客土（灰色土），３層茶褐色土，４層黒色土，５層暗褐色砂質土，６層黄褐色砂礫層の順である（第３図・第４図)。しかし，地区内でも層厚差がある。殊に南東面のように深度が浅い部分においては，必ずしも同様な層序順を示しているとはいえない。これは基盤層が次第に上昇していっていることから，また４層黒色土，５層暗褐色土の尖滅あるいは欠落状況からみて，営田あるいは開墾時に平坦を得るため，堆積土を削平したものと推察される。一方，北面側には逆に基盤層は下がっていっているとともに，層位は厚くなっているが，とくに下位の暗褐色土層において層状から分層すべきものが偏狭にみられ，層序が北西面でも一様でないことを物語っている。この現象は，南東から北西に向っての流路が確認されることから，局地的なものと想定される。これは恐らく匹見川からの溢流と考えられ，上下層の出土遺物から換算して後期前半ごろの嵌入層として捉えることができる。また第４図にみられるように，東端面に撹乱層が認められるが，そのような局地的偏狭を別にすると，基本的には上述のような層序とみても大過はないと考えられる。

層位　上位層からみていくと，まず１層は，灰褐色した水田耕作土で，層厚７～18cmを測り，南東面は薄い。出土遺物には陶磁器類や若干の弥生土器・土師器などが出土した。２層は，水田耕作としての客土。１～２cm大の礫を含んだ灰色土で，層厚３～５cmを測り，石器剥片などを包含する。３層は，酸化鉄が沈在する茶褐色土で，やや乾燥気味であるが，土質的には下位の４層に似る。出土遺物として土師器・弥生土器が多出するが，若干の縄文土器とともに，北西面に少量の須恵器が出土している。主体とする縄文土器は黒川式，僅少の突帯文土器が出土し，また遺構は上位面から嵌入する稲架跡，また中世墓（第５図）のほか，下位面を掘削していないＣ・Ｄの両調査区では列石（第３図)・配石（第６図）が検出された。４層は，有機質性の黒色土で，やや粘質を帯びる。層厚は20～50cmを測り，下面に若干の10～20cm大の円礫を含む。傾向として上中面に縄文晩期後半の土器片とともに多量の石器類，下面には縄文後期末から晩期前半の遺物が出土し，遺物の共伴あるいは層位からみて配石群は該期の遺構群と想定される。



第５図　中世墓実測図

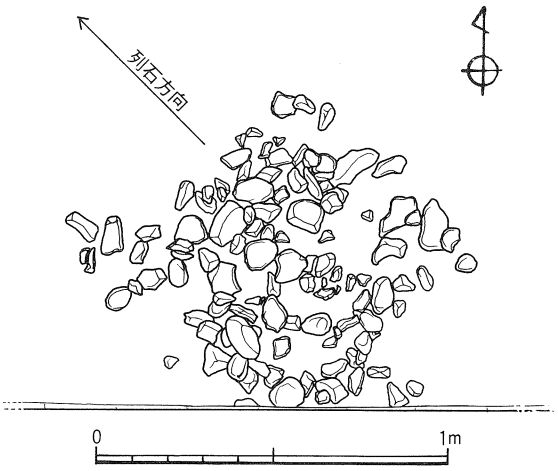
５層は暗褐～灰褐色土で，偏狭的に円礫を含んだ砂土や砂質土か確認されていることから，匹見川からの数次におけるオーバーフローがあったものと考えられる。そうした現象は，層厚の厚い部分で35cmも測るのに対して局部的に尖滅する，といった層状からも頷けられ，また面的には南東から北西への流路が確認されていることからも理解される。本層からは後期後半の土器片とともに，中津式土器や，１片であるが阿高式土器が出土しており，配石関連以外の遺構は同時期のものと想定される。６層は，基盤層と考えられる河床礫で，遺物・遺構とも上位層からの嵌入坑以外は検出されていない。

３．上位層での検出遺構

中世墓　Ａ調査区の南西側に中世墓と想定される２壙が検出された（第５図・図版２－２）。そのうちの１壙は，東半が不明瞭であるが，一方の土壙はやや長方形を呈し，皿状に掘り込まれていることが確認された。土壙は３層直下から４層上面にかけて掘り込まれており，壙内にはやや粘質性を帯びた灰色土が陥入しており，その質状は表土と酷似する。したがって，表土から掘り込まれたものであるとともに，前者の土壙東半部分にもみられるように，上位面は営田時に削平された可能性が強いと考えられる。後者の検出面は，長軸（南西－北東）に向って約1.5m，短軸（北西－南東）約0.9m，深さ約0.2mを測り，壙内にはブロック状に灰褐色土や灰黒色土が嵌入する。とくに南東面に認められ，土壙は北西側から南東に向って掘り込まれた様子が看取できる。

出土物としては，中央下位面から銭貨・板状木片・炭化物が検出されている（第５図）。そのうち銭貨は「大定通宝」（1161～78），「永楽通宝」（1408年），「朝鮮通宝」（1423年）の３枚は判読で

きるものの，他のものについては朽壊あるいは腐蝕し，枚数，印形ともはっきりしない。またこれらの銭貨は長さ約７㎝，幅約４㎝・最大厚0.7㎝の板状木片に付着して出土しており，その木片は柩の遺留と考えられる。そのほか２点の炭化物が確認されたが，遺構に関連するような石礫などはなかった。



第６図　配　石(D調査区)

列石（Ｃ調査区）　調査過程（６月）で盛土にて保存，という決定がなされたため，Ｃ・Ｄの両調査区の掘削は一部を除いて３層（該地点では茶褐色土がみられないために実質的には黒色土の４層に対層する）上位面までとした。そのＣ調査区では，一部２層（客土）に露頭するものがあるものの，３層中位面に至る層高上に列石が検出された（第３図・図版10－２）。

その列石は10～60㎝大の円礫を中心に集積されたものが，Ｃ調査区の北面を北西－南西に幅１～1.5ｍ測って列走する。これらの河原から持ち込まれた円礫で構成された石体は，立体的なものが使われ，集石状に間隙（南東半の列石は，下位面を掘削していないため疎間であるが）なく，北東側に向って直列するが，南西端は該調査区内で間断している。水路が埋設されるという北西半については，列石の深層および構築状況を把握するため掘削を試みると，その断面高は18～32㎝を測り，上面の比較的平坦を成しているのに比べて下面側は厚薄差から不揃いである。また把握しきれなかったが，平面的には列走するように捉らえられる該列石も，下面には部分的に方形状（南東半にも，それと捉らえられるものが表出している）とも受けとられる３～４グループの集石する土坑が疎隔的存在することが認められた。つまり，これらの各集石を配石で一連的に繋ぎ，列石状に構築しているように捉らえられたのである。恣意的ではあるが後述するＤ調査区の配石も，列石による連続性は確認していないものの，列石の南東端に３ｍの間隔をもって一線上に位置していることから，関連性をもった表出部かも知れない，と窺えた。また列石の南東袖部には幅30～60㎝，最深部高約６㎝を測る溝状に，３～５㎜大の砂粒が嵌入する土坑が帯状に連なる（第３図・図版３）。この列石に沿う砂粒帯は，列石高の約3/1どころを走り，北西側に向って希薄となっている。

列石に伴う遺物には，数片の土師器とともに弥生土器・縄文土器・石器剝片が出土している。そのうち土師器については，列石が２層（客土）に露頭した地点から出土しているため，水田開墾時による嵌入遺物として捉らえられ，列石の時期を示標しているものではないと考えられる。また列

石自体が黒色土中位面から層上にあって，その構築範囲には上位層からのブロック上の嵌入土などがみられないこと等から，本層には縄文晩期（黒川併行期）が伴出しているものの，他の共伴遺物の上限からみれば弥生文化層に構築されたものと想定される。

配石（D調査区）　南西側（ABセクションベルト寄り）の配石（第6図・図版5－1）は，3層直下に検出されたものである。下位面を掘削していないので性格等については判然としなかったが，7～30cm大の円礫河原石を疎間的に比較的平坦に配置し，一辺約1.5mを測り，ほぼ正方形。辺は北西－南東・北東－南西方向に配されており，それは前途の列石遺構と同位層に検出されているとともに，方向また3m測って一直線上にあることなどが一致する。また検出面（3層直下）には土坑が確認されていないことから，列石と同様，その遺構面は下層の3層中位面より構築されているものと考えられ，列石との関連性がある，と想定している。

遺物には弥生土器とともに若干の縄文土器（黒川式に併行するもの）・石器剥片などが出土している。これらの共伴遺物から上限法則に測ってみるならば，その構築は弥生中期末（第14図21～24・図版11－2・図版12－1）から後期にかけてのものとみられるが，ただし構築面が黒色土中位面という層位的観点に立つならば，縄文晩期の遺構，とも考えられ断言することはできない。いずれにしても下位面を調査していない現段階では，詳細については判らなかった。

4．下層面での検出遺構

はじめに　第12図・第1表に掲載しているものは，調査区南半の5層の暗褐色砂質土に検出されたものを実測したものである。本層は，調査区の北西半を南東から北西に向って流路が確認され，その流路筋の層厚は薄く，局地的に砂土や礫などが嵌入して攪乱を呈している。そのため層序において誤認を生じ，特に北東半では掘削しすぎた嫌いがある。したがって図示している遺構は同時性のものではない，ということを断っておく。

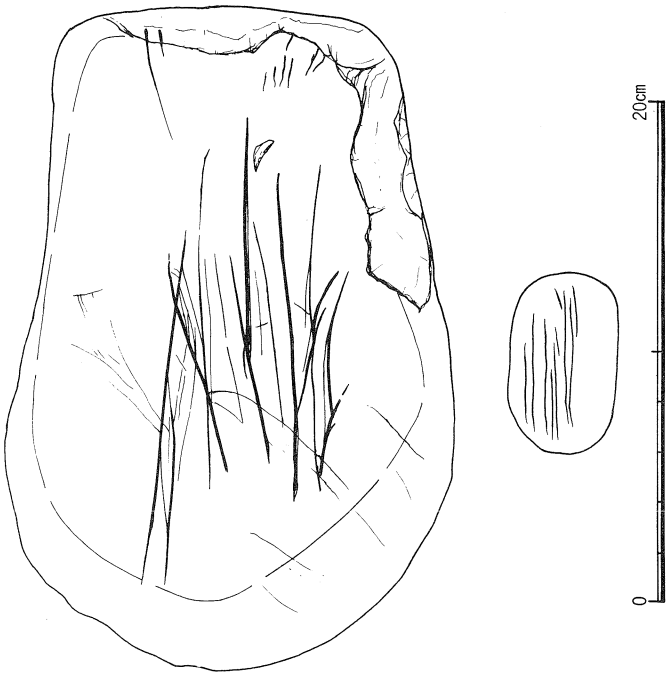
ピット（柱穴）　ピットと呼称しているものは107穴検出された（第12図・第1表）。これらのピットは径20～25cm測るものが最も多く，一部南東面に検出されているものの，大半は配石遺構が疎間である北半，特に匹見川からのオーバーフローによる河道であったと想定される北西半に集中している。これらのピットは，南西半では暗褐色砂質土，北東半河道筋では砂土あるいは小礫層に掘り込まれているという差異があった。

ピットに伴う共伴遺物は僅少で，しかも小片であるため時期の決定はできない。しかし検出面周辺には新（晩期後半）旧（後期前半～後半）が混在しており，また，これらのピットと関連付くと想定される非配石土坑では，縄文後期前半（中津式等）の遺物が共伴している（第1表）ことから，ピット群の中には，当時期のものも存在すると考えられる。殊に北東半における層序の誤認から，掘削しすぎた嫌いもあるかも知れないが，一方では該期における匹見川の貫流が本層を流出攪乱し

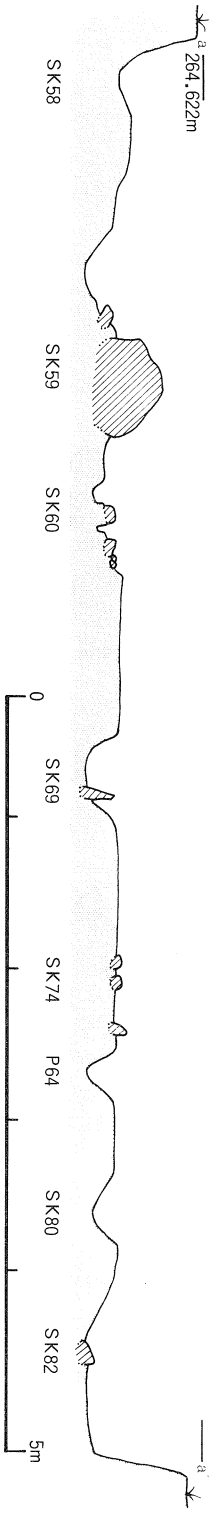
第１表　遺構計画表

遺構	長径	短径	深さ	検出面標高	摘要
P01	28 cm	26 cm	13 cm	263,072 m	
P02	22	22	9	264,072	
P03	28	28	9	264,112	
P04	32	30	9	264,042	土器片（縄文晩期）
P05	28	24	8	264,022	
P06	28	26	6	264,032	
P07	38	28	10	264,032	
P08	36	30	6	264,012	
P09	30	28	8	264,042	
P10	22	20	6	264.012	
P11	36	34	9	264,032	
P12	34	30	7	263,962	配石
P13	24	22	11	264,062	
P14	42	40	19	264,062	石器剝片
P15	48	34	19	264,032	
P16	22	20	29	264,062	
P17	24	20	15	264,032	
P18	24	22	15	263,932	
P19	26	24	13	263,932	
P20	30	26	20	263,972	
P21	32	26	3	263,792	
P22	26	24	17	264,062	
P23	30	24	16	263,932	
P24	38	36	14	263,982	精製土器片（１点）
P25	42	36	16	263,932	
P27	30	22	9	263,842	
P28	30	26	10	263,912	土器片（晩期前半？）
P29	28	26	6	263,842	
P30	40	32	11	263,872	
P31	24	22	16	263,872	
P32	34	28	15	263,822	
P33	28	26	11	263,872	
P34	26	24	7	263,852	
P35	26	22	14	263,912	
P36	32	28	23	263,912	
P37	18	8	13	263,722	
P38	20	10	12	263,722	
P39	26	24	10	263,742	
P40	26	22	4	263,822	
P41	26	22	8	263,822	
P42	26	24	3	263,632	
P43	20	16	22	263,762	
P44	18	18	1	263,732	
P45	36	24	13	263,832	
P46	42	20	7	263,812	
P47	32	26	5	263,812	
P48	40	36	9	263,812	
P49	32	26	14	263,782	
P50	45	37	24	263,812	囲石，土器片（晩期）
P51	40	18	24	263,722	精製土器片
P52	24	22	6	263,742	
P53	34	32	25	263,722	
P54	22	20	5	263,732	
P55	26	24	3	263,732	
P56	26	24	1	263,682	
P57	28	24	5	263,732	
P58	28	22	16	263,652	
P59	24	22	11	263,652	
P60	24	22	12	263,652	骨片，炭化物，土器片
P61	32	30	13	264,032	
P62	28	22	9	264,032	
P63	—	—	9	264,052	
P64	74	36	17	264,002	
P65	36	34	32	264,002	
P66	48	36	14	263,992	
P67	76	36	6	263,982	
P68	34	28	10	263,982	
P69	54	26	10	263,972	
P70	26	22	7	264,002	
P71	36	34	11	264,002	
P72	28	26	7	263,972	
P73	36	30	9	264,012	
P74	32	28	19	264,012	土器片（１点）
P75	20	20	8	263,902	
P76	30	22	8	263,842	
P77	34	26	16	263,742	
P78	32	22	9	263,682	土器片
P79	22	22	8	263,682	
P80	26 cm	24 cm	4 cm	263,682 m	
P81	30	24	9	263,712	
P82	26	22	10	263,802	
P83	24	22	12	263,882	
P84	26	24	7	263,882	
P85	30	28	1	263,712	
P86	34	30	12	263,792	
P87	30	28	23	263,792	
P88	14	12	12	263,712	
P89	24	22	10	263,712	
P90	34	—	36	263,752	
P91	20	20	8	263,652	
P92	26	24	8	263,722	
P93	24	22	18	263,662	
P94	28	24	20	263,662	
P95	28	26	22	263,702	
P96	30	28	16	263,632	
P97	34	28	8	263,762	
P98	26	22	19	263,532	
P99	33	26	17	263,652	
P100	30	26	8	263,752	
P101	24	18	10	263,812	
P102	18	24	22	263,812	
P103	34	22	17	263,812	
P104	40	38	12	263,722	
P105	36	28	3	263,742	
P106	58	50	5	263,752	
P107	30	22	—	—	

遺構	長径	短径	深さ	検出面標高	摘要
SK01	174 cm	68 cm	13 cm	264,022 m	土器片
SK02	92	—	13	214,042	土器片
SK03	—	—	6	264,012	
SK04	82	54	7	264,112	平玉，土器片
SK05	94	60	14	264,087	
SK06	176	60	13	264,022	土器片
SK07	180	46	7	264,022	石核
SK08	56	36	26	264,062	骨片，土器片
SK09	246	126	13	264,082	配石，立石，土器片，石器剝片
SK10	212	114	8	264,112	立石，臼玉，土器片（後期前中葉）
SK11	150	80	—	264,162	配石
SK12	110	50	—	264,090	配石，立石，土器片
SK13	176	100	17	263,942	土器片（中津式），石器剝片
SK14	88	88	—	263,162	
SK15	132	76	—	263,942	配石，土器片
SK16	106	50	13	263,162	土器片
SK17	142	76	—	263,162	
SK18	90	80	—	263,942	配石
SK19	92	68	17	264,142	配石，土器片
SK20	184	—	7	264,032	配石，土器片，石器剝片
SK21	116	58	13	264,032	
SK22	116	70	12	264,032	
SK23	86	60	30	264,002	骨片，土器片（後期後半？）
SK24	66	46	8	263,972	
SK25	150	102	6	263,932	勾玉，土器片
SK26	94	90	15	263,912	
SK27	52	48	25	263,982	土器片，骨片
SK28	84	46	12	263,922	土器片
SK29	150	50	16	263,902	土器片（中津式）
SK30	140	80	10	263,922	土器片
SK31	52	40	11	263,892	土器片（中津式）
SK32	76	74	—	263,962	配石，立石
SK33	76	64	—	263,962	配石
SK34	96	68	10	263,812	配石，土器片
SK35	68	66	—	263,972	配石，立石
SK36	74	60	33	264,022	
SK37	114	72	17	263,882	石鏃（黒曜石），土器片
SK38	370	100	22	263,852	土器片（中津式）
SK39	132	54	3	263,812	打製石斧
SK40	150	30	12	263,722	石器剝片
SK41	108	40	6	263,742	土器片（後期後半？）
SK42	58	54	11	264,032	骨片，精製土器片（後期末～晩期初頭）
SK43	68	54	15	263,892	焼土
SK44	106	56	4	263,732	土器片
SK45	—	38	2	263,682	土器片
SK46	94	32	焼土	263,732	焼土，骨片，線刻石（小）
SK47	120	50	28	263,722	
SK48	70	30	12	263,722	配石
SK49	78 cm	62 cm	33 cm	263,732 m	配石，土器片
SK50	52	42	—	263,732	配石
SK51	68	26	14	263,812	土器片
SK52	54	26	24	263,722	
SK53	70	46	5	263,702	
SK54	50	44	15	263,700	
SK55	150	—	33	263,652	貯蔵穴，積石，トチの炭化物
SK56	—	—	7	263,992	土器片（後期中ごろ）
SK57	188	48	11	264,032	配石，土器片
SK58	—	—	7	263,092	
SK59	240	148	40	263,042	配石，円盤形土製品，４土坑，覆石，骨片
SK60	120	62	26	263,072	配石，立石，骨石，土器片（配石高のみ掘削）
SK61	130	82	—	264,012	配石，立石，土器片
SK62	146	80	49	264,102	配石，土器片（後期後半～晩期）
SK63	84	72	—	264,102	配石，骨片，土器片
SK64	82	62	6	264,132	配石，石器剝片
SK65	146	10	—	264,132	
SK66	—	60	3	264,142	
SK67	—	50	5	264,142	
SK68～1	62	44	15	263,922	配石，立石，骨石，土器片（晩期）
SK68～2	—	—	—	—	配石，立石，土器片，炭化物，石鏃
SK68～3	128	70	20	263,912	配石，土器片，岩田Ⅳ類
SK68～4	40	26	27	263,932	土器片（晩期前半）
SK69	144	58	24	264,052	配石，立石，骨片，土器片
SK70	58	48	15	264,032	
SK71	68	36	—	264,052	配石，骨片，炭化物
SK72	58	40	—	264,072	配石
SK73	90	84	—	264,072	配石，骨片，土器片
SK74	84	50	—	264,002	配石
SK75	140	62	9	264,082	配石
SK76	210	154	26	263,962	円盤形土製品，土器片，打製石斧
SK77	170	50	37	264,002	配石，骨片，土器片，石器剝片
SK78	156	34	43	264,012	土器片，石器剝片
SK79	136	72	14	263,982	
SK80	52	50	13	264,022	
SK81	50	44	13	264,042	
SK82	—	104	16	264,012	配石，立石
SK83	—	—	—	—	配石（土坑不詳）
SK84	212	64	21	264,022	炭化物，土器片（中津式）
SK85	38	36	9	264,972	
SK86	72	56	36	263,262	土器片
SK87	44	28	15	263,962	
SK88	88	42	5	263,932	
SK89	82	66	16	263,942	配石，立石
SK90	44	42	5	263,952	
SK91	70	46	23	263,982	
SK92	62	56	16	263,932	
SK93	48	34	16	263,932	
SK94	80	60	14	263,962	
SK95	—	—	17	263,972	骨片，土器片
SK96	136	70	35	263,842	土器片
SK97	280	90	16	263,762	配石，立石，骨片，土器片，石器剝片，一部未発掘
SK98	144	114	17	263,952	配石，立石，骨片，土器片（配石のみ掘削）
SK99	76	64	16	263,902	土器片（晩期），半載
SK100	84	58	30	263,902	
SK101	132	106	22	263,962	
SK102	150	128	—	263,712	配石，焼石，焼土
SK103	120	94	31	263,632	配石，土器片，打製石斧
SK104	90	50	41	263,752	土器片（晩期）
SK105	40	34	27	264,762	配石
SK106	78	62	23	263,722	配石
SK107	144	70	19	263,702	骨片，土器片
SK108	140	86	40	263,812	配石，土器片
SK109	118	70	26	263,642	土器片
SK110	32	28	19	263,742	
SK111	88	40	20	263,902	土器片
SK112	78	48	21	263,722	
SK113	54	30	22	263,752	
SK114	62	60	19	263,592	管玉，土器片
SK115～1	130	12	71	263,592	トチの炭化物，土器片
SK115～2	76	74	37	263,592	土器片（後期末～晩期初頭），御領式
SK116	64	62	14	263,572	土器片
SK117	—	90	20	263,572	骨片，土器片
SK118	64	56	18	263,582	骨片，土器片
SK119	70	46	29	263,582	土器片
SK120	74	62	40	263,652	
SK121	100	50	28	263,652	
SK122	148	94	21	263,712	骨片



第８図　線刻石の実測図



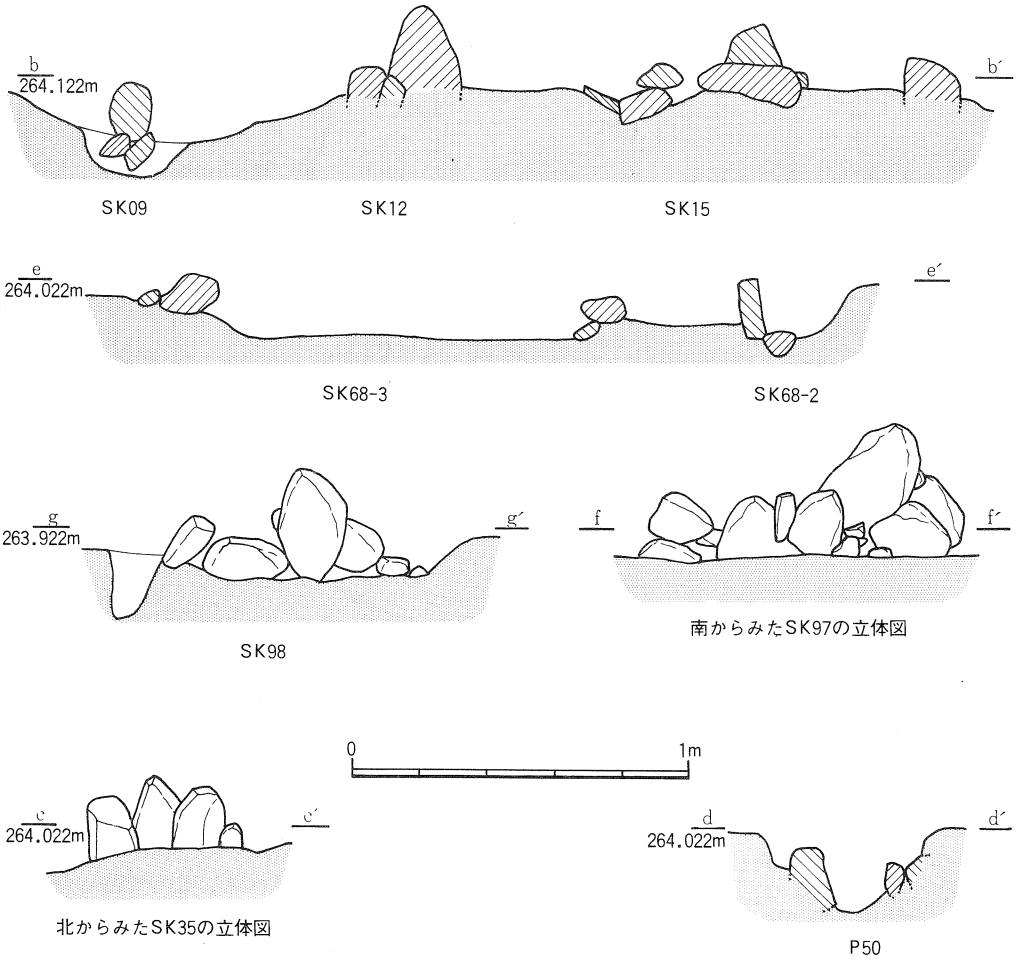
第７図　土坑断面図

た可能性もある。いずれにせよ特に北東半での現象は，下位層の露頭から生じたものである。

土坑（SK）　土坑と呼称するものは122坑が確認され，そのうち配石を伴うものが41坑，残りは伴わないものであった。また，このうちには焼土・焼石等を伴う土坑が３坑，貯蔵穴と想定される１坑も含んでいる（第12図・第１表）。

〈配石土坑〉　配石は河原から持ち込まれた７～30cm大の円礫を坑上に積石状に配されているが，すべて完掘していないので詳細については不明であるものの，中には疎間的なものも認められた。これらの配石には立石を伴うものが1/3あり（SK09・SK12・SK15・SK98など），SK32・SK35・SK68～１のように複数のものもあって，またSK59の１土坑のように，立石というより覆石を思わせる径70cm余りの載石も確認されている。

これらの土坑は長径80～140m，短径40～80cmを測り，１mを越える長径のものは長楕円形を呈し，それ未満のものは円形を呈するという２タイプに仕分けでき，それらは凡そ20cm前後



第９図　配石断面・立体図

の深さをもつ（第１表）。しかし，SK59・SK68のように（第12図・図版７－１）２m以上の土坑径をもつものもあり，その開広の土坑内には，さらに配石を伴って土坑を有する３～４グループが検出されており，集合的配石土坑とでもいえるタイプも存在する（SK59・SK68）。またP50と略称しているもの（第９図・図版８－１）は，径約40cm測る土坑内に７～15cm大の河原石を周縁して組まれている。坑深は約24cm測り，坑内には黒色土が嵌入する。本坑からは晩期前葉（岩田Ⅳ類？）の土器片が検出されており，また石積の精巧さからみて配石時期の所産と考えられる。以上，坑形状からみると「円形型」「長楕円形型」「１坑内集坑型」「土坑内囲石型」というべきタイプに仕分けでできそうである。

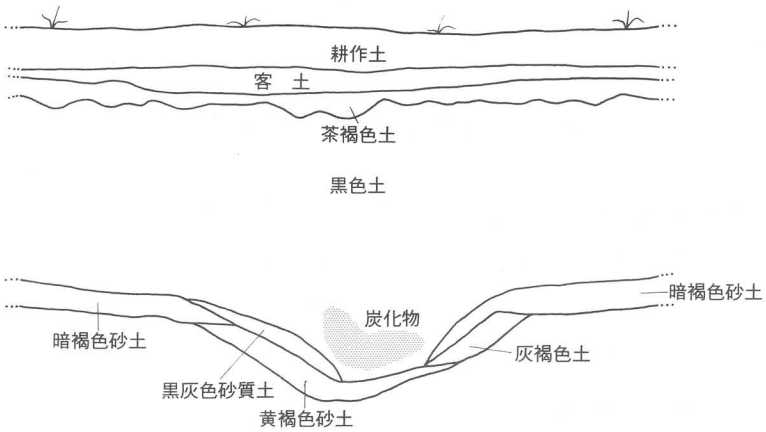
一方，坑上に積石（疎間的もあるが）状に設けられた配石は，坑底部においては希有であるが，SK68－2・SK69のように盤状の石体を起立させた状態のものもみられた（第７図・第９図・図版７－１）。それらは土坑を伴わないものの，線刻石の出土様態に酷似（第12図・図版６－１，対並していたと想定される）しており注意された。これらの配石をもつ土坑には黒色土（４層）が嵌入し，配石上に比べて土器片などの遺物は極めて少なく小片であった。

〈非配石土坑〉　配石を伴わない土坑は80坑余り検出しているが，共伴遺物からみて縄文後期後葉から晩期前半の所産のものと考えられる。しかしSK13・SK29・SK38・SK84のように中津式土器を伴う土坑もあって，複合の可能性が強いと考えられる。またこのような非配石土坑にはSK04・SK25のように玉類，あるいはSK08・SK27・SK95・SK107・SK117・SK118・SK122のように骨片が出土するものもあり，墓地的な非生活遺構ともいえるものが存在している可能性も高い，と想定される。

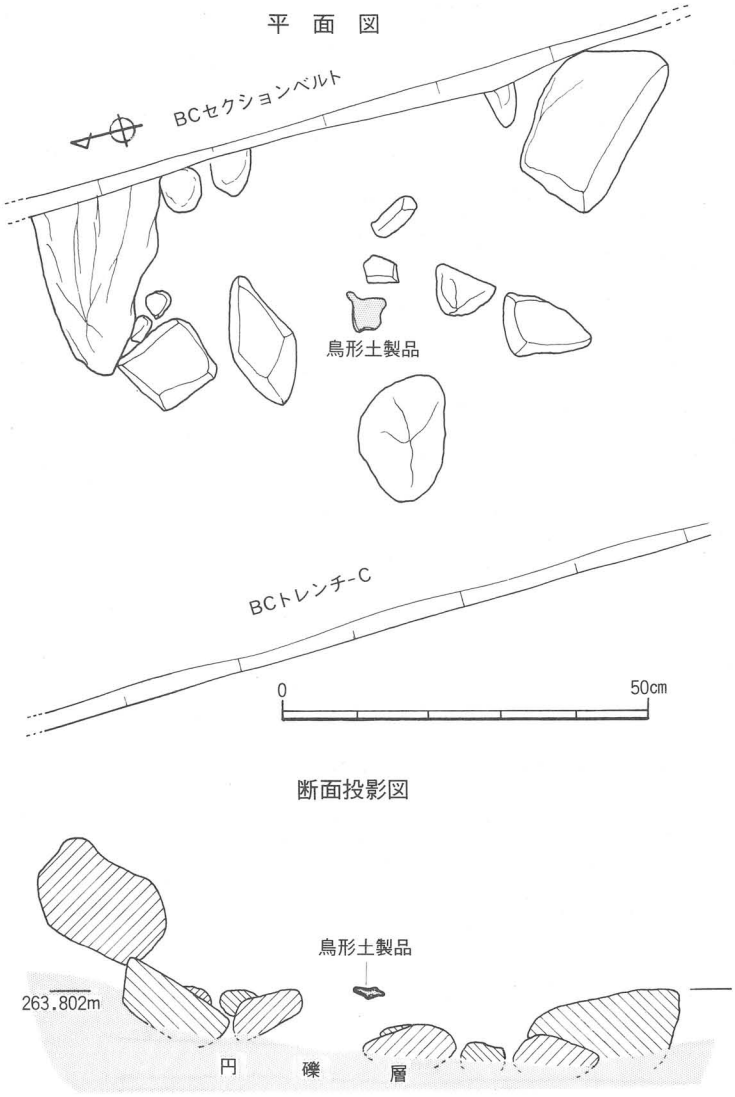
その他の遺構　本遺跡のように複合する，況してや墓地・祭場的な遺構においては，その関連性を把握することは困難であるが，SB－1・SB－2，あるいはSX－1と表示（第12図）する箇所には，意図的と想像されるまとまりがみられる。

〈SB－1〉　Ｂ調査区の北西面には，12～13穴のピットが周円する竪穴土坑が検出されている。そのピットは径20～30㎝，深さ４～16㎝を測り，他のピット群に比べてやや小さめで，ピット間も狭い。また竪穴土坑には，北東面に突出部らしき広がりがみられるが，部内に２坑のピットが確認されることから，その突出部は別土坑の可能性が強い。本土坑の径は約２ｍを測ってほぼ円形。最高部差約15㎝，最浅部差約４㎝を測り，晩期前半の遺物が共伴した。また，１ｍ東側は鳥形土製品（第24図－141）が出土している。

〈SB－2〉　SB－2と略称するピット群は，長方形プランに列穴し，その長軸径約3.4ｍ，短軸径約３ｍを測る。列穴内には竪穴土坑はみられず，５層暗褐色に構築されたものであり，縄文後期後半から晩期前半の遺物が共伴



第10図　層序・貯蔵穴断面図



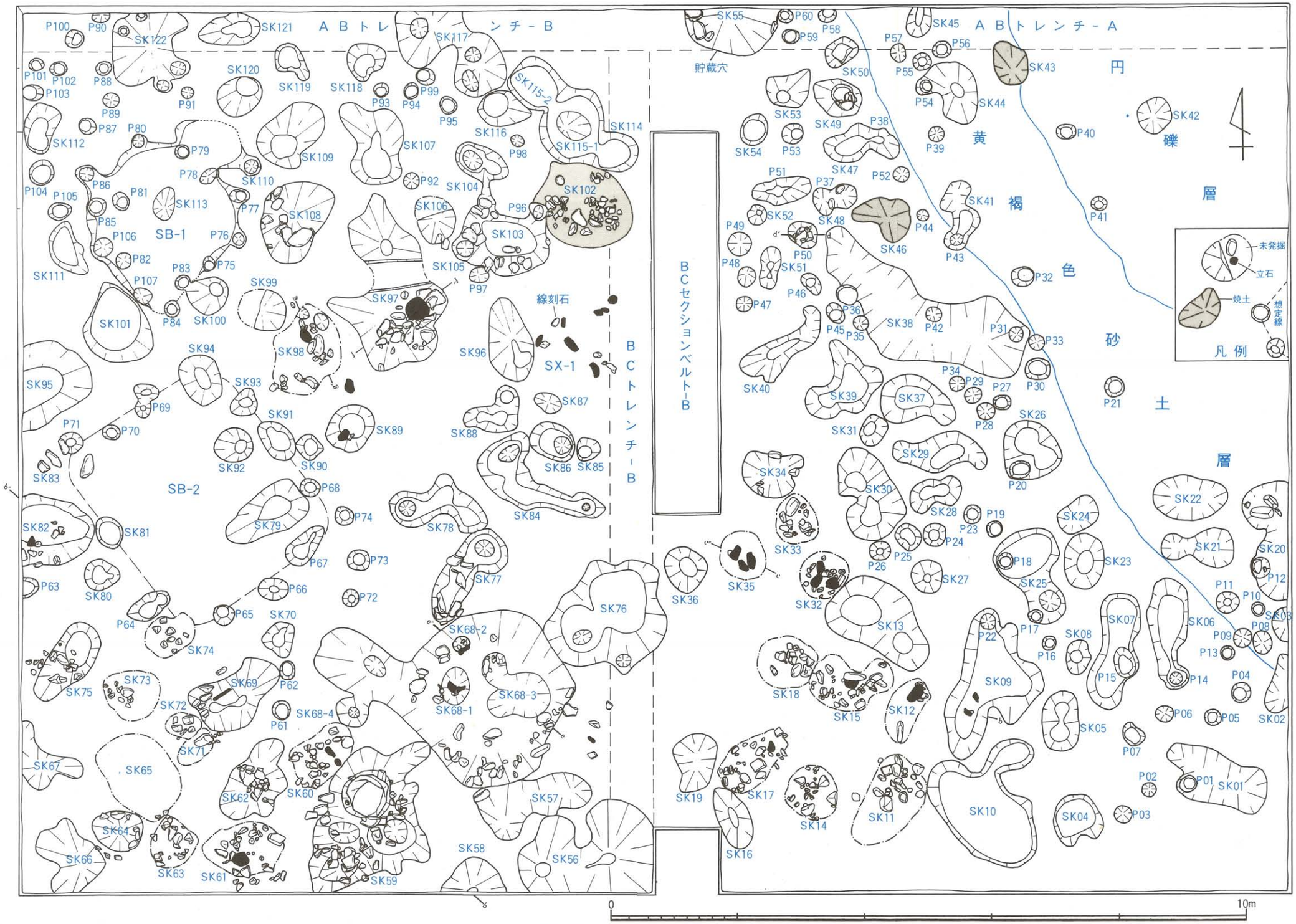
第11図　鳥形土製品出土状況図

した。

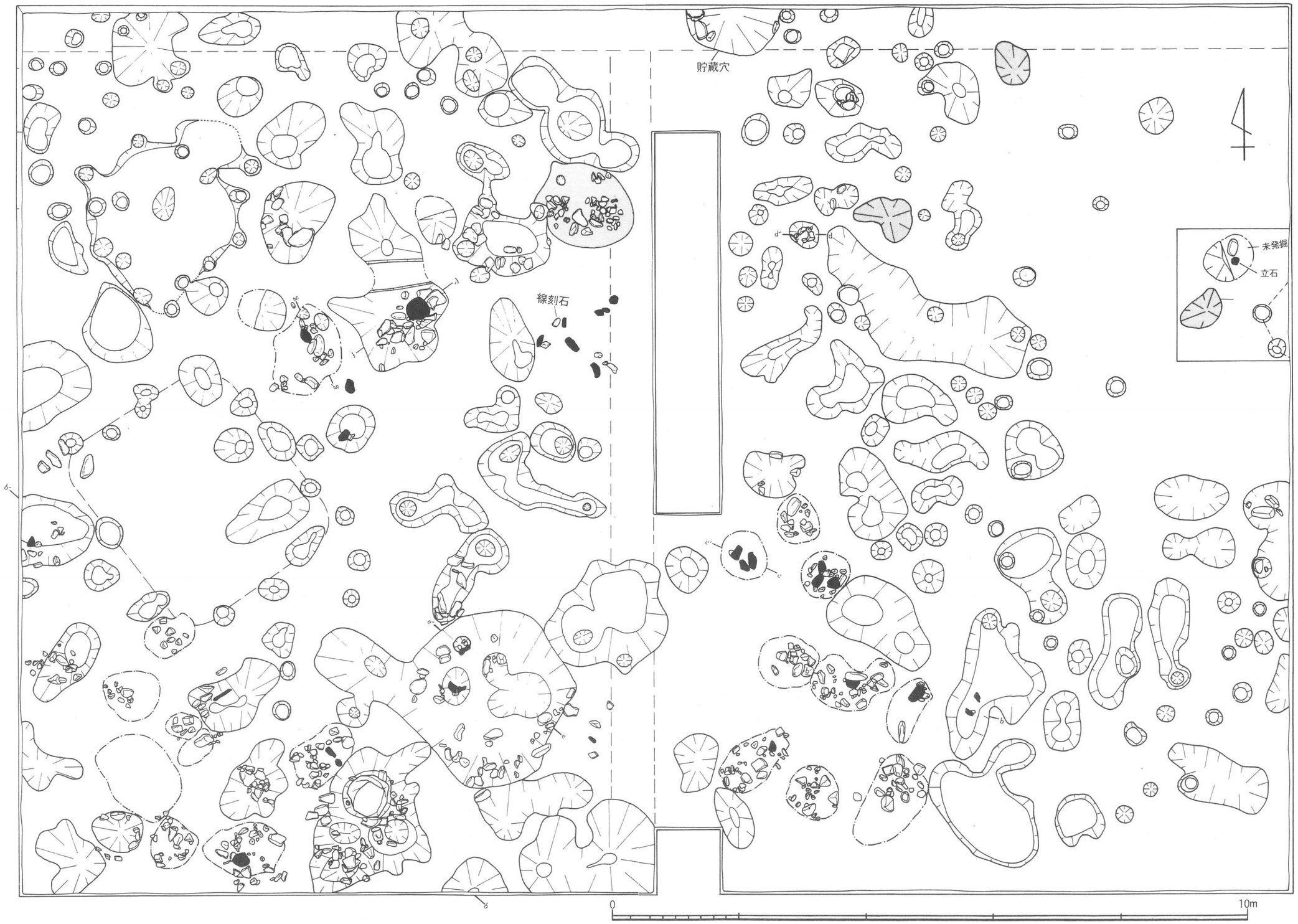
〈SX－1〉　B調査区の北東面には立石及び線刻石が検出された（第12図・図版6）。立石は集中して7基が確認されており，いずれも土坑は立石を立てるためのものであったらしく，幅員はきわめて狭い。また立石の露頭高は，約25cm測るものが最もで，それ以外は石体も人頭大と小さく，目立つものはなかった。しかし，基盤層が下降する該地形にしては，本地点のみ地山標高263,892mを測って孤塁状に高まりを成し，しかも立石の集中は気になる地点であった。

同地点で検出された線刻石（第8図）は，縦26.3cm，横18cm，厚さ5cmを測る盤状のもので，材質は玄武岩。手を成す片面には，縦方向の数条の直線的沈線が施されており，しかもその沈線の溝はV字形を成し鋭い。この線刻石は横倒して検出されているものの（図版6），対面したと想定される一方の石体が起立していることから，並立した可能性が強いと考えられる。なお，第8図で図示する小礫石の線刻石はSK42の焼土中に出土したものである。

焼土坑・貯蔵穴坑　土坑につまった焼土は，SK43・SK46・SK102の3坑で検出されている。そのうちSK43は，短径約54cm，長径約94cm，深さ約10cmを測り，楕円形を呈する。焼土は淡茶色を呈し，底面に向って希薄となり，地山は黄褐色砂土層であった。殊にSK46では焼土が顕著で，淡



第12図　Ａ・Ｂ調査区遺構図（1）



第12図　A・B調査区遺構図(2)

茶赤褐色した坑上には２点の骨片（図版４－２）とスジ状の痕跡のある線刻礫（第９図）が出土した。そのうちの骨片の１点は長さ2.4㎝・径1.3㎝を測り，その骨片を鳥取大学の井上貴央教授は「鹿の指骨にあたる中節骨」と鑑定しておられる。また102では７～30㎝大の河原石が敷きつめたように集石されており，その中の数個には灰茶色を呈し焼石が確認されている。坑形は短径約1.3m・長径約1.6mを測って楕円を呈し，深さは５層暗褐色土に掘り込まれ４㎝と浅かった。

ABトレンチに検出された貯蔵穴と想定されるSK55（第５節・第７図・図版８－２）は，４層黒色土から６層の河床礫層に掘り込まれている。坑内には４層黒色土が陥入し，坑壁には４層及び５層の暗褐色土とが混ざったと思われる黒灰色砂質土が嵌入する。ABセクションベルトを掘削していないのでその坑形は判らないが，おそらく円形もしくは楕円形を呈していると思われ，径は凡そ1.5mを測ってハンモック状を成している。しかし検出された炭化物（トチの実・５章参照）が遺構検出面により上面からはじまっていること，共伴遺物が縄文晩期中葉に位置付けられるものが散見されることなどからみて，本質の遺構面は上位面（４層中位面）から成り立っていたものと想定される。したがって本坑及びSK102は，配石時期以降の生活遺構とみることができよう。

（渡辺友千代）

第４章　出　土　遺　物

１．はじめに

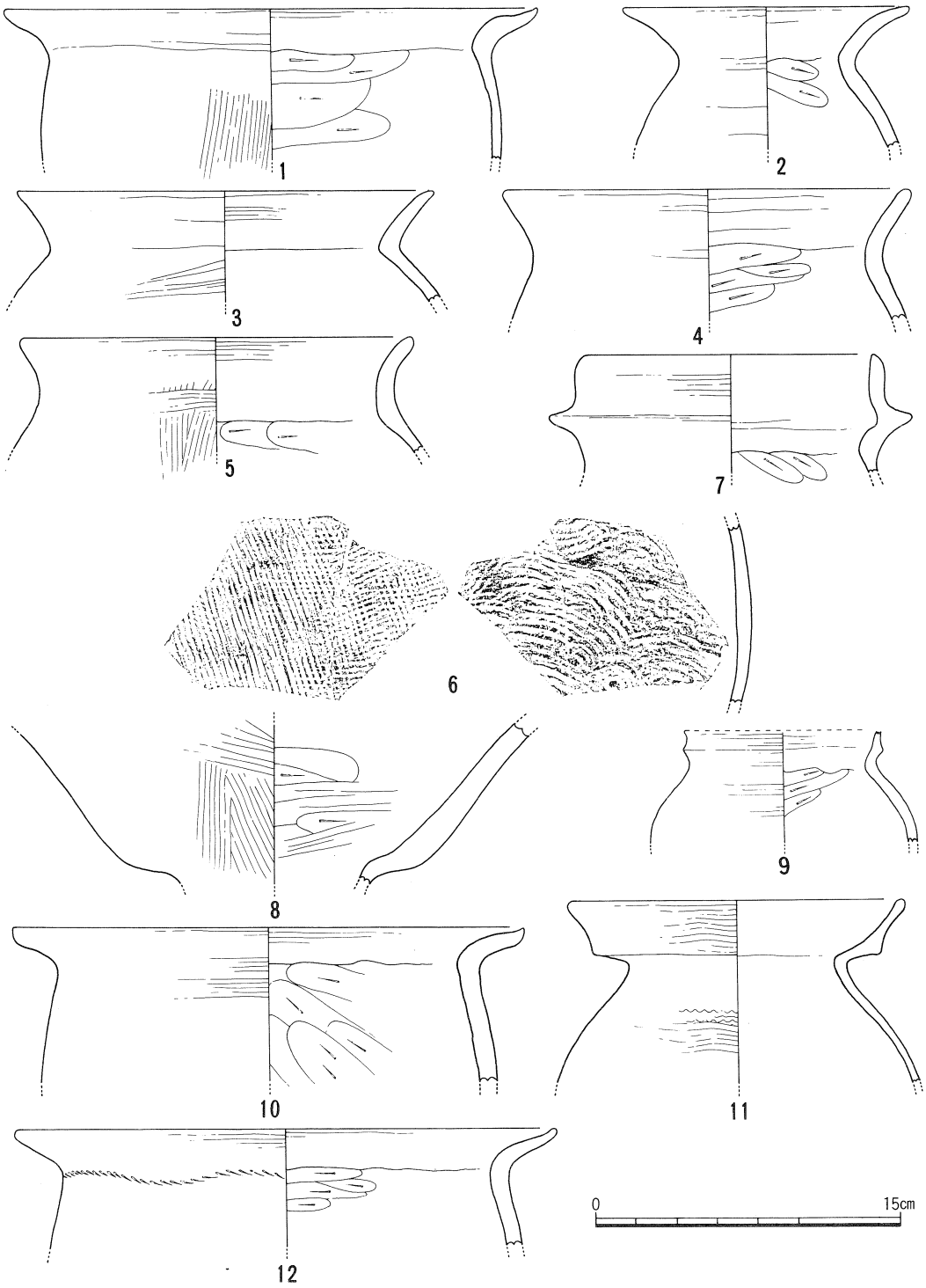
遺物はコンテナー40箱出土した。実測はそのうち標準的なものを中心に，中にはキャラクタリスティク的なものも選び出し掲載している。また調査後，隣接地から採集されたもののうち，遺跡の性格上必要と思われる数点についても図示した。

なお掲載順は発掘過程に従い，上層部から下層部へという方式で行っているので承知願いたい。

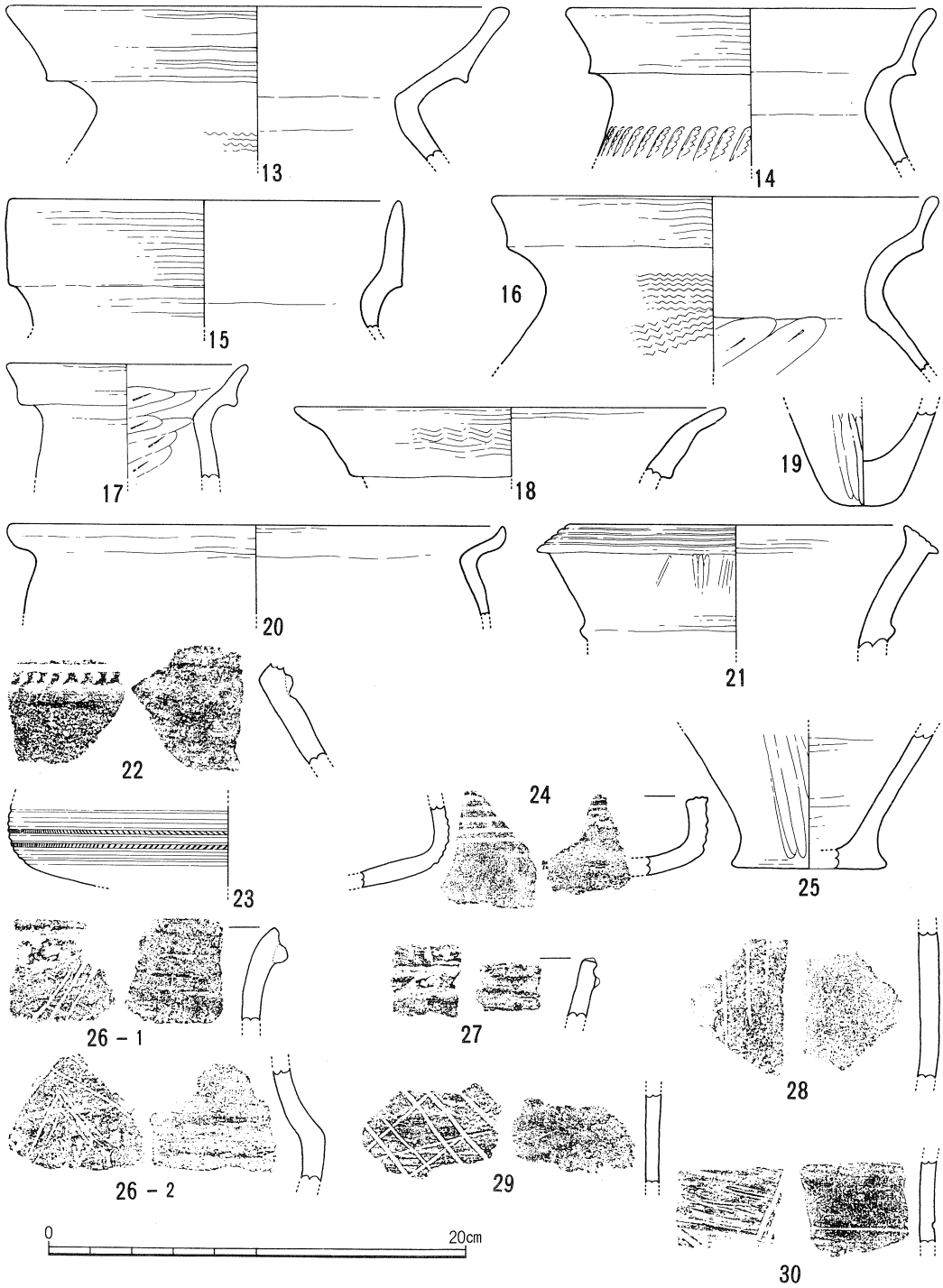
２．実測土器

土師器・須恵器（第13図・図版11）　６の須恵器片を除く１～10は土師器類。いずれも口縁部はヨコナデで，内面頸部以下はヘラケズリである。そのうち１と５は外面頸部以下にハケメを施す。７は口縁部外面に鍔状の突出部がみられ，橙褐色を呈する。おそらく3・10とともに古墳前期のものであろう。６はタタキメを有する須恵器で，内面は同心円文を施している。８は高坏の坏部か。外面にハケメを施し，内面は顕著なケズリがみられるが，僅にナデがみられる。石英を多く含み，茶褐色を呈する。９は，退化気味の複合口縁を有する。

弥生土器（第13図～第14図・図版11～図版12）　10～25は弥生土器で，そのうち10～19は後期の



第13図　土器実測図(1)



第14図　土器実測図(2)

ものである。11・13・16の頸部は板状工具によって波状文，また14には列点文，12には刺突文を施す。18は強く開いた口縁部で，内外面とも朱が施されており，器台の口縁部であろう。

20～25は中期後葉のもの。そのうち21・22は頸部に突帯をもち，後者は刻目を施す壺形。23・24は高坏の坏部。前者は口縁部外面下半に2条の沈線，その斜向文を施文する。後者は内面ナデ，外面はヘラミガキで，口縁端部から外面に数条の凹線を施し，胎土は緻密で堅緻である。

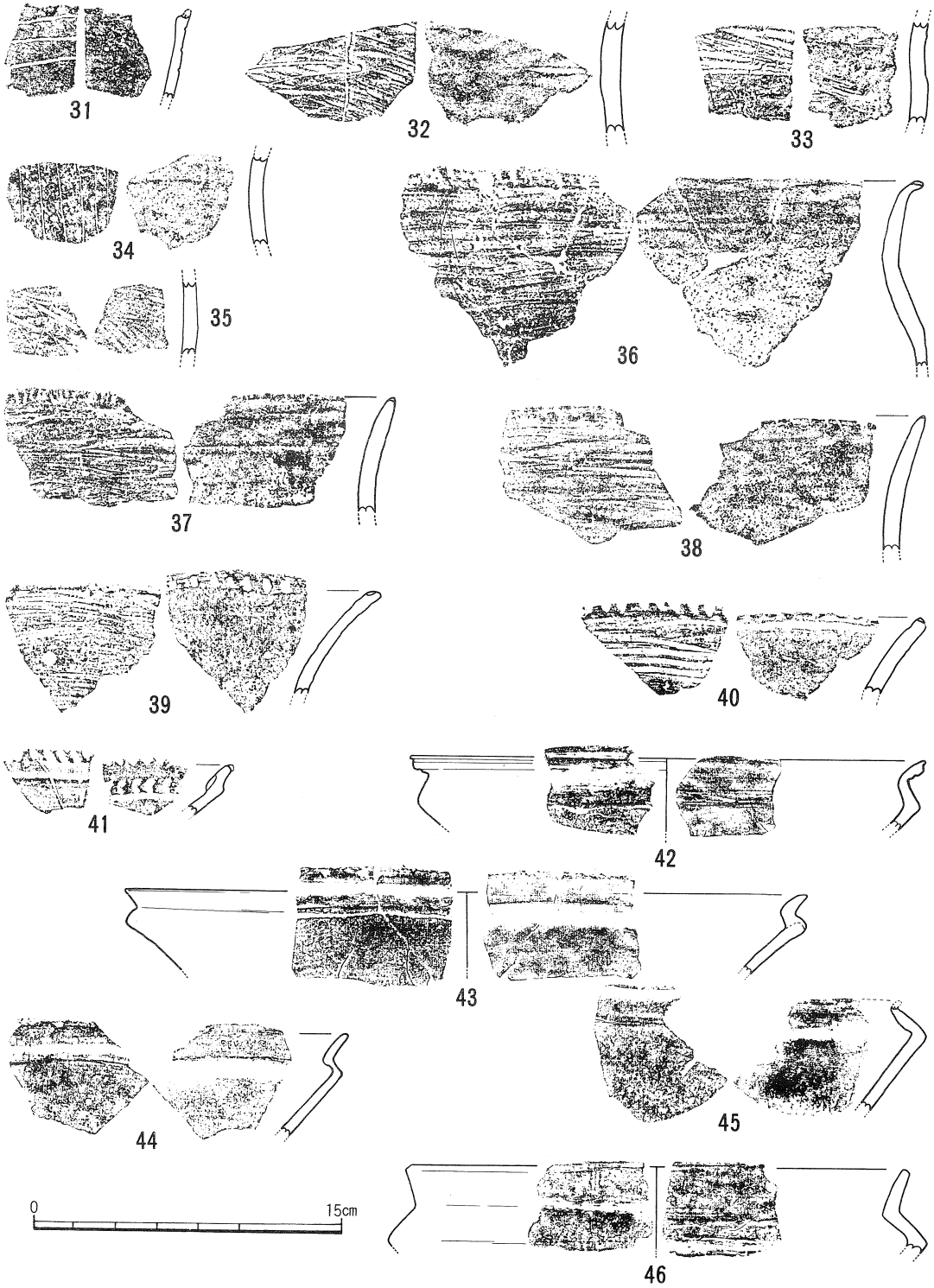
これらの弥生土器は，3層の茶褐色土に出土したもので，中には4層（黒色土）上位面に混在したものも確認されたが，遺構は伴わなかった。

縄文土器（第14図～第22図・図版12～図版15）　26・27は4層黒色土から出土した突帯文土器。前者の器肉はやや厚く，肩が張り，頸部から外反して口縁部に至る。外面はナデ，内面口縁部はヘラ調整か。突帯を刻み，その部下から肩部にかけて数条の鋭い沈線で，山形文様の集線で施文する。調整は粗く，橙褐色を呈する。26は，やや開き気味の口縁部で，突帯および口縁部に刻みを有する。内外面とも条痕状の調整の後ナデを施し，茶褐色を呈する。

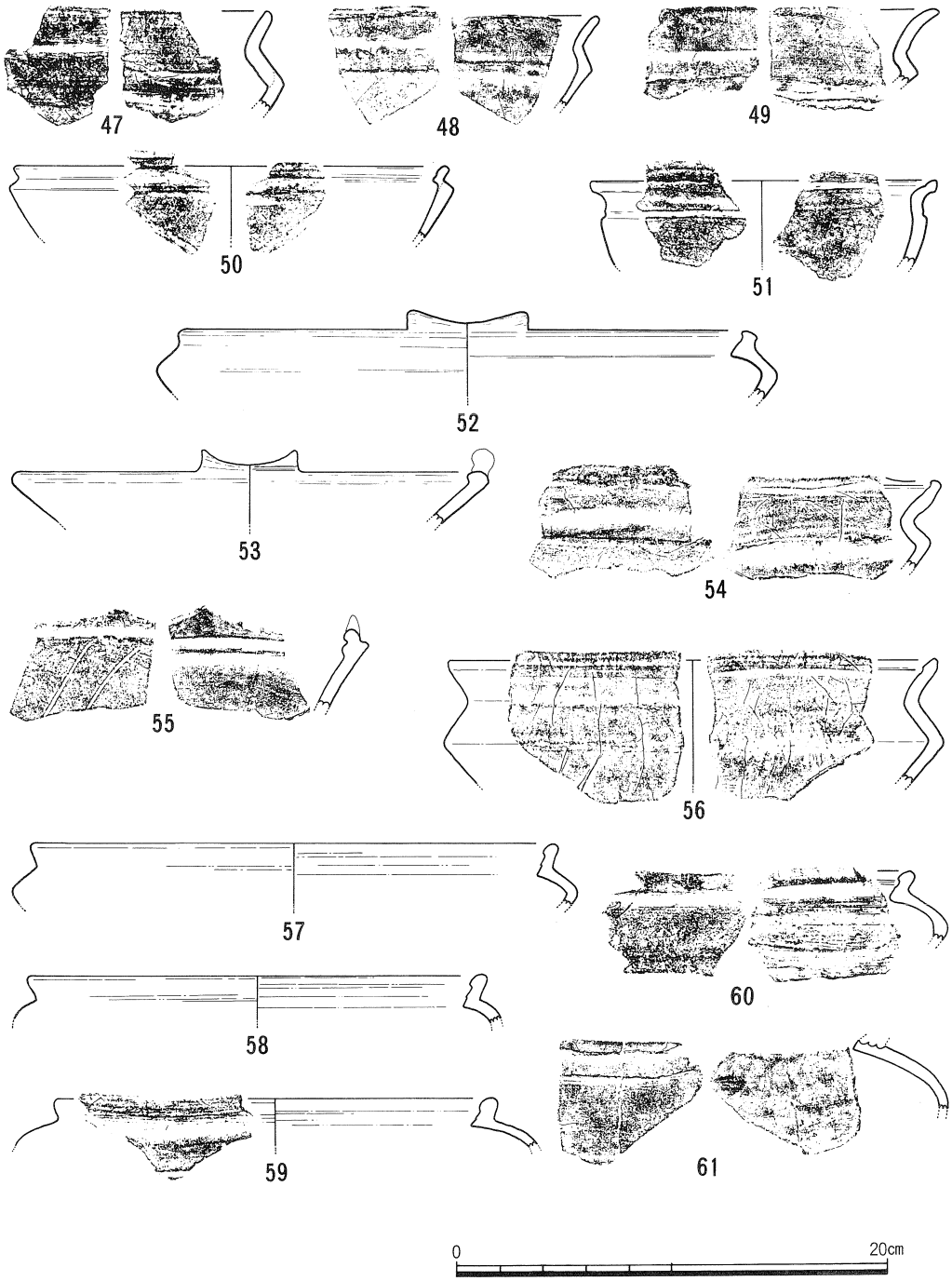
28～35は外面に沈線を有したもの。いずれも4層中位ないし下位から出土したもので，29・30は太めの沈線を施すが，他のものは鋭い細沈線状。色調は，条痕地に施文したものは暗褐色を呈すのに対して，ミガキ風のものは橙褐色を呈するという違いがある。おそらく後者は中山B式か，それに通ずるものであろう。

36～41は口縁端部に刻み目を有するもので，いずれも4層黒色土から出土した。そのうち41はSK68の土坑に出土した半精製浅鉢形のものであるが，その他は粗製深鉢。36・37は内面をナデとし，外面を巻貝をもって横方向に条痕調整する。外反して立ち上がった口縁の端部には，貝頂部による刻み目を連続施文し，前者は頸胴界に稜をもつ。両者とも橙褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。38は，外面を2枚貝による条痕調整の後，ヘラ状工具による粗い磨きを施したもの。39は4層上位面に出土したもので，口縁部は強く外反する。外面は条痕で，内面はナデ調整とし，その口縁部には巻貝による頂部の刺突で施文する。焼成はきわめて堅緻で，浅鉢かもしれない。おそらく突帯文直前の時期であろう。40は，外面を2枚貝で調整したもので，口縁内面に沈線を施す。こうしたクセはよく岩田Ⅳ類でみられる。41は，外面を条痕で調整した後ナデ，内面は磨く。また内面口縁部には，C字状の刻紋を施しており，原下層式と関連するだろう。

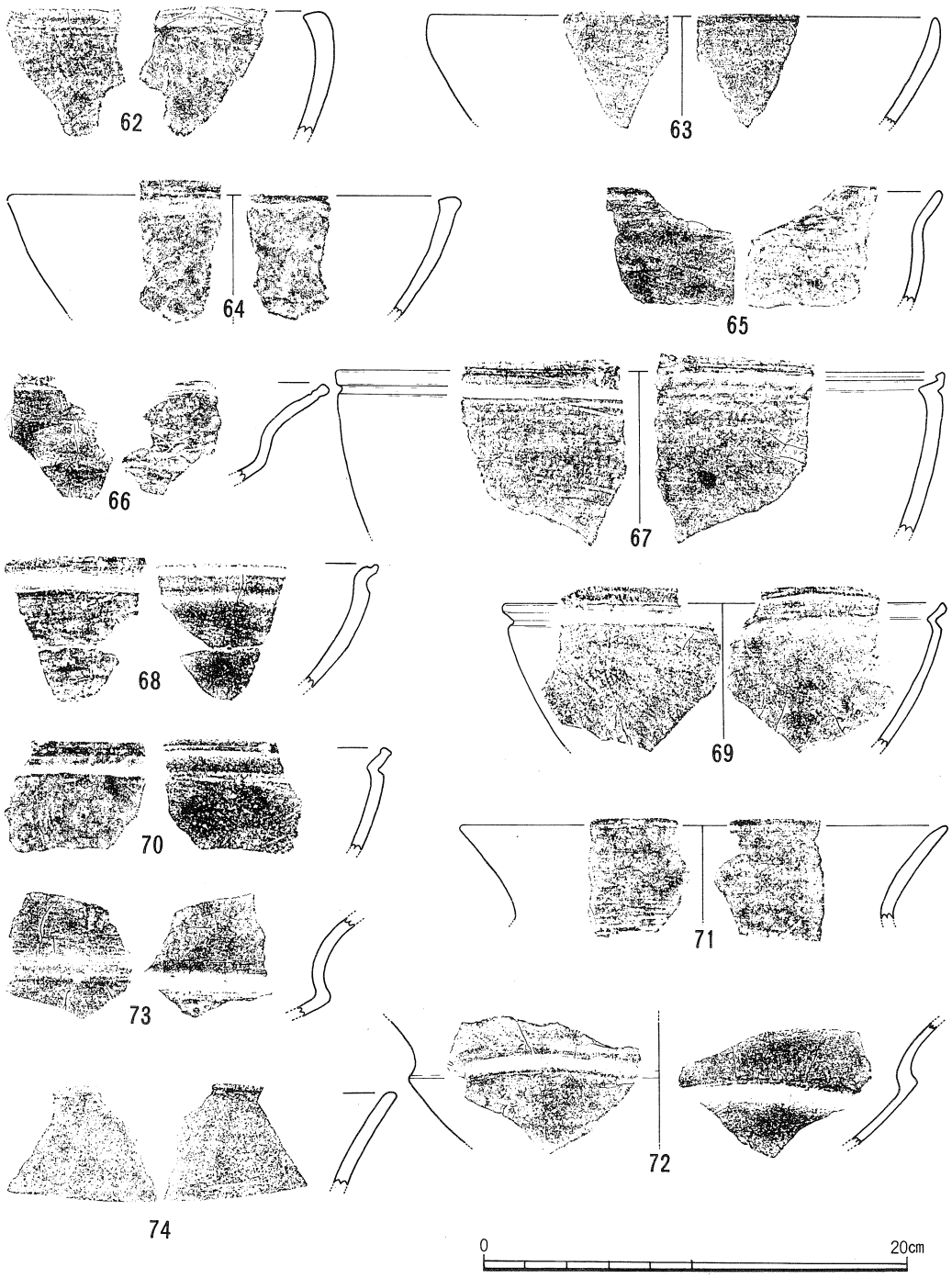
42～61は黒川式ないしそれに関連する精製浅鉢で，概ね4層（黒色土）中位面にかけて出土した。そのうち42～49は鍵状に屈折し，内外面とも精緻にヘラ状工具で磨いたもの。これらのうち42は，口縁端部の外面に1条の沈線がみられ，他のものに比べて器面がやや粗い。また，色調においても暗褐色から黒褐色に対して，橙褐色を呈するという違いがみられる。50～56は，口縁部内面に段状の稜を有するもの。そのうち50は鍵状の口縁部は短く屈折するが，54・56は長く，段状の稜は小さ



第15図　土器実測図(3)



第16図　土器実測図(4)



第17図　土器実測図(5)

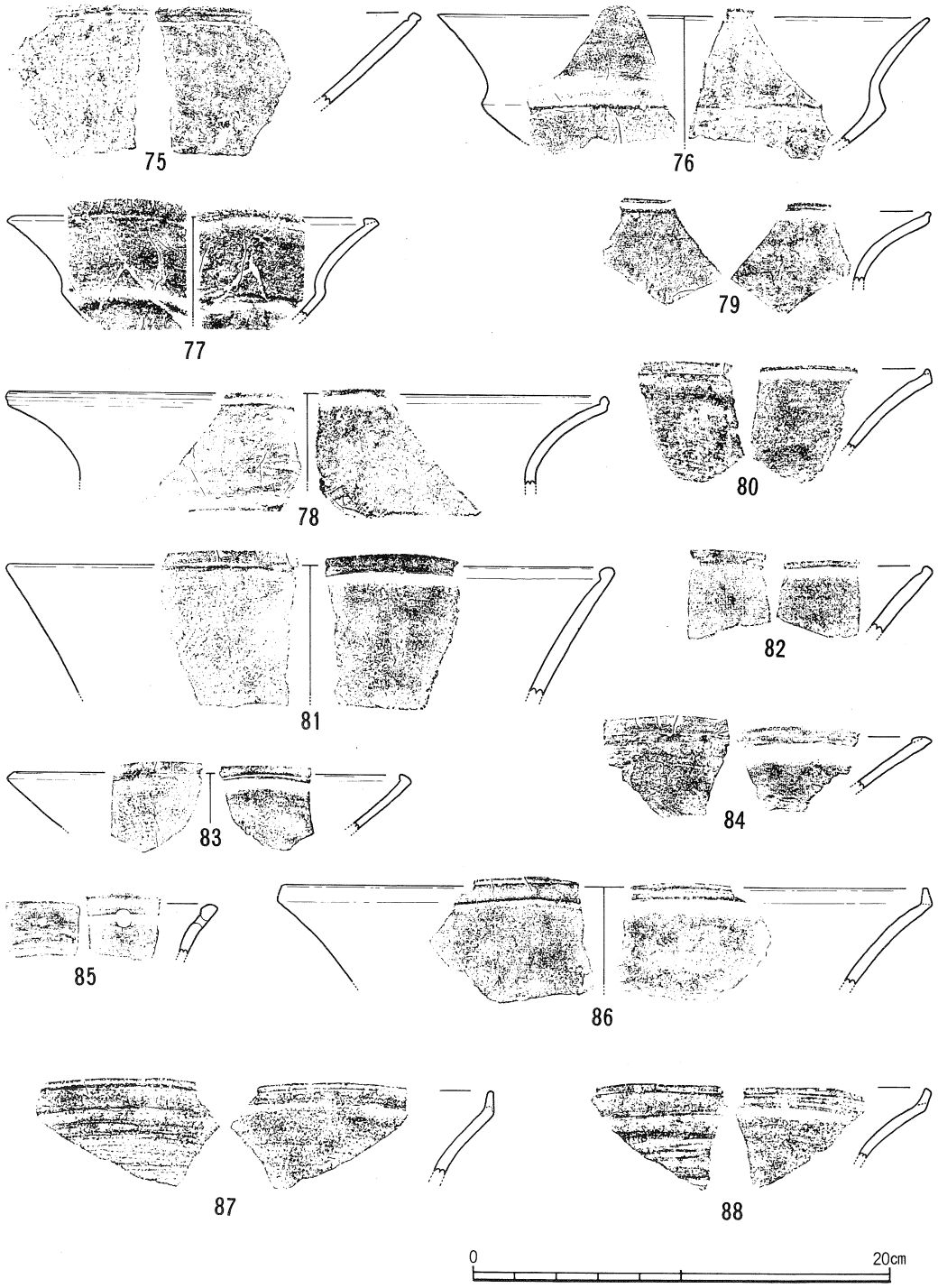
い。また52・53・55は鰭あるいはリボン状の突起をもち，内面の段は沈線状である。57～61は，肩胴部が丸味をもって張り，内面頸部には鋭い稜をもって屈折し，その口縁部はヘラ状工具による１，２段の段を有するもの。いずれも暗褐色～黒褐色を呈し，胎土・焼成とも精緻である。

62～70は岩田Ⅳ類の小型鉢に比定できるもので，概ね４層下位面から５層暗褐色砂質土に出土した精製土器。そのうち62～64は開きながら立ち上がり，口縁部はやや内弯するボール状の浅鉢形土器で，このうち62・64は口縁端部が平らで，肥厚する。また65・66は頸胴がゆるやかに屈曲し，口縁部に向って広く開くタイプで，うち後者は口縁内外面に筋状の沈線がみられるもの。そして67～70は，口縁部が短く屈曲し，その外面に沈線もしくは凹線状を有する，という凡そ３タイプに仕分けできる土器群である。これらのうち62はSK59土坑内，また66はSK68土坑内に出土したものである。精製系ではあるが，全体的に前述の黒川式や後述する御領式併行期の精製土器に比べて調整がやや粗く，色調も茶褐色を呈するという違いがみられる。

71～89は，晩期前半の浅鉢，もしくはその関連品として追求することができるもので，概ね４層下位面から５層暗褐色砂質土に，前記の岩田Ⅳ類の小型鉢と混在して出土した精製土器群である。これらを口縁部の特徴から捉らえると，まず71～74・76のように口縁部に変化がみられないもの。75は，口縁部内外面に僅かな沈線のみでスジ描きしているもの。また77・84・85は，口縁端部が内面側に折返し状となっているもの。81・83は，その端部が内側に向って丸みをおび，もしくは三角形状をなしているもの。78・79は，口縁端部の内，もしくは外面に沈線を施しているため，Ω状に突出するもの。86～88は，屈折部界から直立気味に繰上げているものなどの差異が看取でき，以上６つに分類することができるであろう。

これらの浅鉢系では，御領式の特徴である繰り上がった口縁部外面に凹線・沈線を施文するという手法はみられない。しかし86～88の口縁部には凹線文や沈線文はみられないものの，繰り上がった口縁帯の手法にはその遺風をみることができ，また78・79には沈線の施文などによって系列上にあることを窺い知ることができるのである。これらの精製品は，橙褐色～茶褐色（外面）暗褐色～黒褐色（内面）を呈し，胎土は緻密で，焼成もやや劣る77を除く以外は堅密である。

90～106は粗製および半粗製のものである。そのうち90～96は４層黒色土から出土したもの。90は口頸部の屈曲が小さく，やや厚手のもの。外面は板状工具による調整とするが，粘土紐痕が顕著である。内面はナデで，色調は橙褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。92・95は，薄手で口頸が短く，強く屈曲する。前者は板状工具による条痕調整で，内面は丁寧なナデであるが，後者は内外面とも巻貝を横方向で調整。いずれも橙褐色を呈し，焼成は良好。おそらく94も同型類のもので，外面は板状工具によるケズリである。91・96は，口縁部の屈曲がすくなく，外反する。両者とも２枚貝による条痕調整であるが，内面はナデであるものの顕著でない。93は，内弯気味の椀形のもの。外面



第18図　土器実測図(6)

第19図　土器実測図(7)

はケズリの後，ナデ調整とするが器面は粗い。内面はヘラ調整の後ナデ。色調は橙褐色～暗褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。

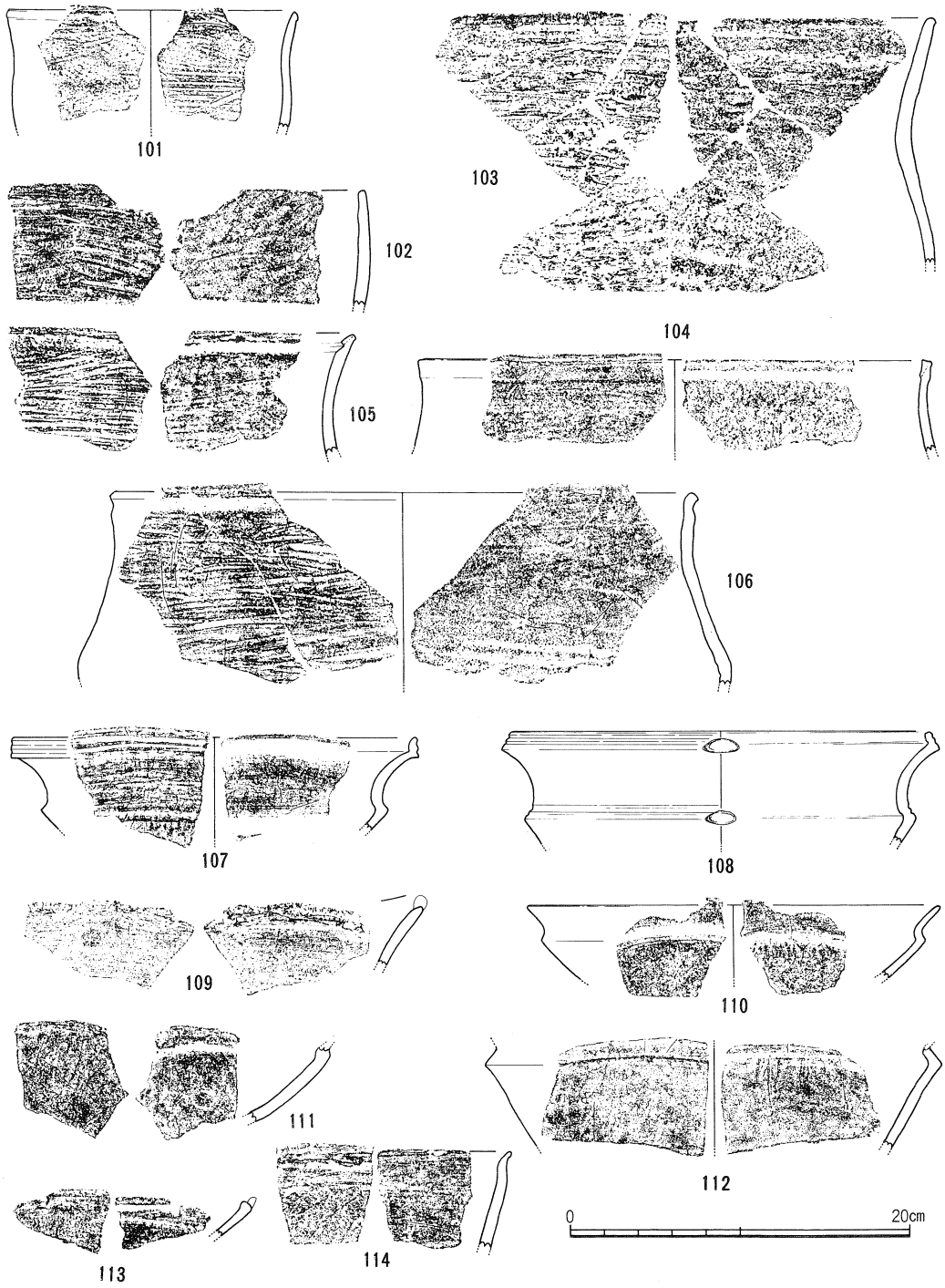
97～102は，５層暗褐色粘質土から出土した粗製および半粗製のもの。97・98は内外面とも板状工具による調整とするが，内面のナデは顕著でない。そのうち前者は口頸部が「く」の字状に屈折し，やや厚手である。後者はなめらかに屈曲し，両者とも暗褐色を呈する。99は，半粗製の碗形土器。内外面ともヘラミガキした後，粘土紐痕が顕著な外面に縦方向の板状工具によるケズリを施す。102は，ゆるやかな内弯気味の口縁部で，外面に巻貝による条痕調整を施し，内面には指ナデが顕著である。103も巻貝条痕と思われるが，器面が粗い。102・103とも橙褐色を呈する。

104～106は，口縁部に段を有するもので，岩田Ⅳ類にみられる粗製深鉢土器。104・105は５層から出土したもので，口縁部内面に折返し状の貼付帯がみられる。貼付部界には抉り（105）がみられ，104は内外面に脹れ口縁端は角ばる。調整は前者が板状工具，後者は巻貝条痕で，内面はナデ調整とするが，前者は特に丁寧で堅緻。106は頸胴部界に稜をなす屈折部があって，頸部は窄み，口縁部でやや外反する。口縁外面には巻貝を横方向に使って凹線を施文する。外面は巻貝による条痕文で，内面は丁寧なナデ。

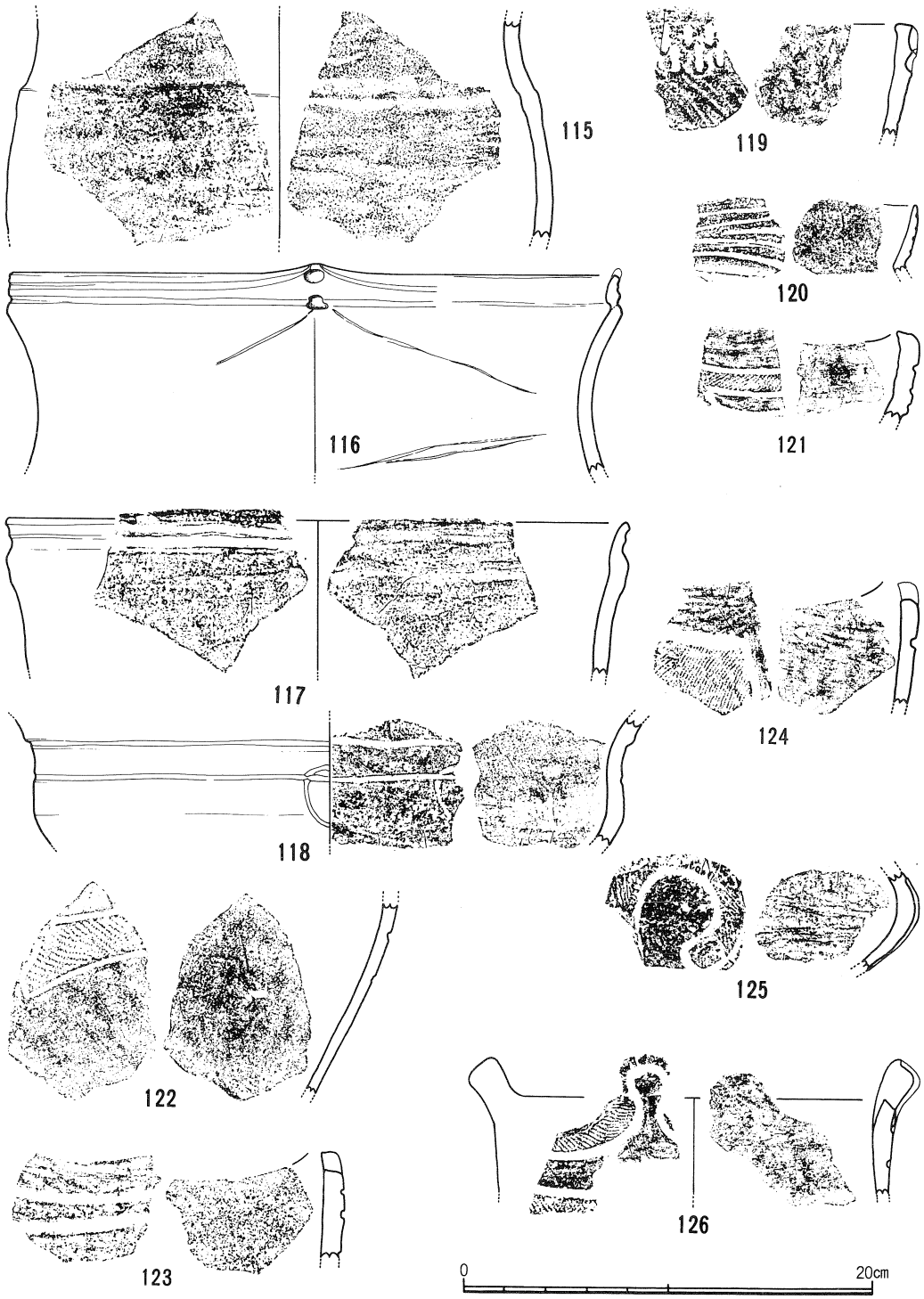
107～108は，御領式ないし広田式で，肩部に屈折の稜をもち，頸部から強く外反して口縁に至り，立ち上がった口縁端外面に２条の沈線をもった精製土器。後者は肩部上にも２条の沈線，また沈線を有した部下の屈折に指状の押圧痕を施文する。内外面は丁寧にヘラミガキし，外面は灰褐色～暗褐色，内面は黒褐色を呈する。

109～113は，器壁が薄くやや精製の印象をあたえるもの。109は５層が出土したもので，ゆるやかな鰭状突起をもち，内外面はナデでやや粗い感じがする。外面は黄褐色，内面は黒褐色を呈する。110～112は，肩頸部の鍵状の屈折が短いもの。そのうち111は，特に短く屈曲する。113は，４層黒色土に出土したもので，口唇部は丸味をもって肥厚する。角ばった突起の結合内面には沈線を有している。110は内外面とも黒褐色，111・112・113は外面灰褐色，111・112の内面は黒褐色を呈している。

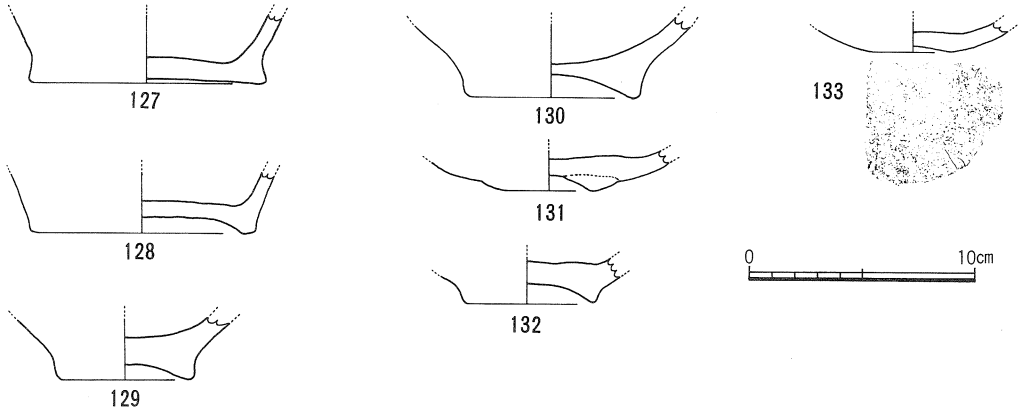
114～118は，岩田系の粗製，あるいは半粗製のもので，そのうち114・115は第Ⅳ類，116～118は第Ⅲ類に比定されるもの。114は，半粗製の鉢形で５層から出土したもの。内外面をヘラで調整した後，横方向のナデを施す。口縁部外面に篦状工具で窪みを施す。115は，頸胴部界に屈折の稜をもった深鉢土器。内外面ともナデ調整で，暗褐色を呈する。116は，口縁端の屈曲部外面の凹線に２条の沈線を有する半粗製土器。内外面とも板状工具で，特に外面は丁寧に調整し，内面，凹線部をナデとする。頸部外面には，斜向の引掻き風の浅い沈線がみられ，またゆるい波状口縁部下の凹線部には，篦状工具による抉りがみられる。暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。118は，５層に出



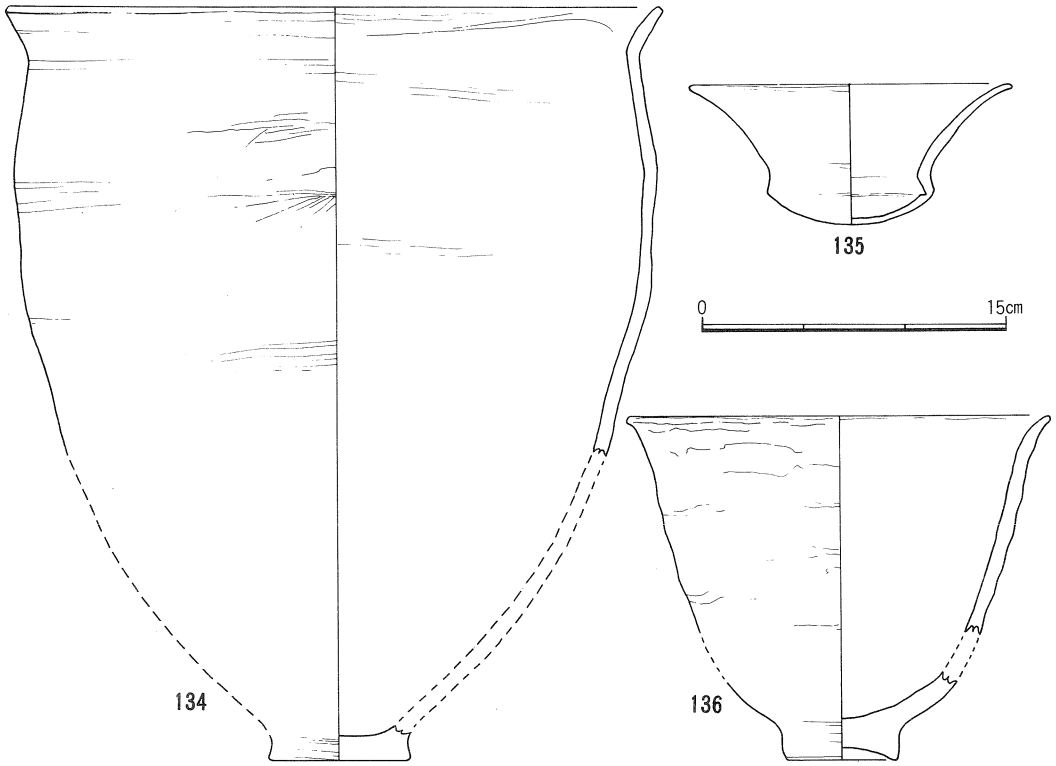
第20図　土器実測図(8)



第21図　土器実測図(9)



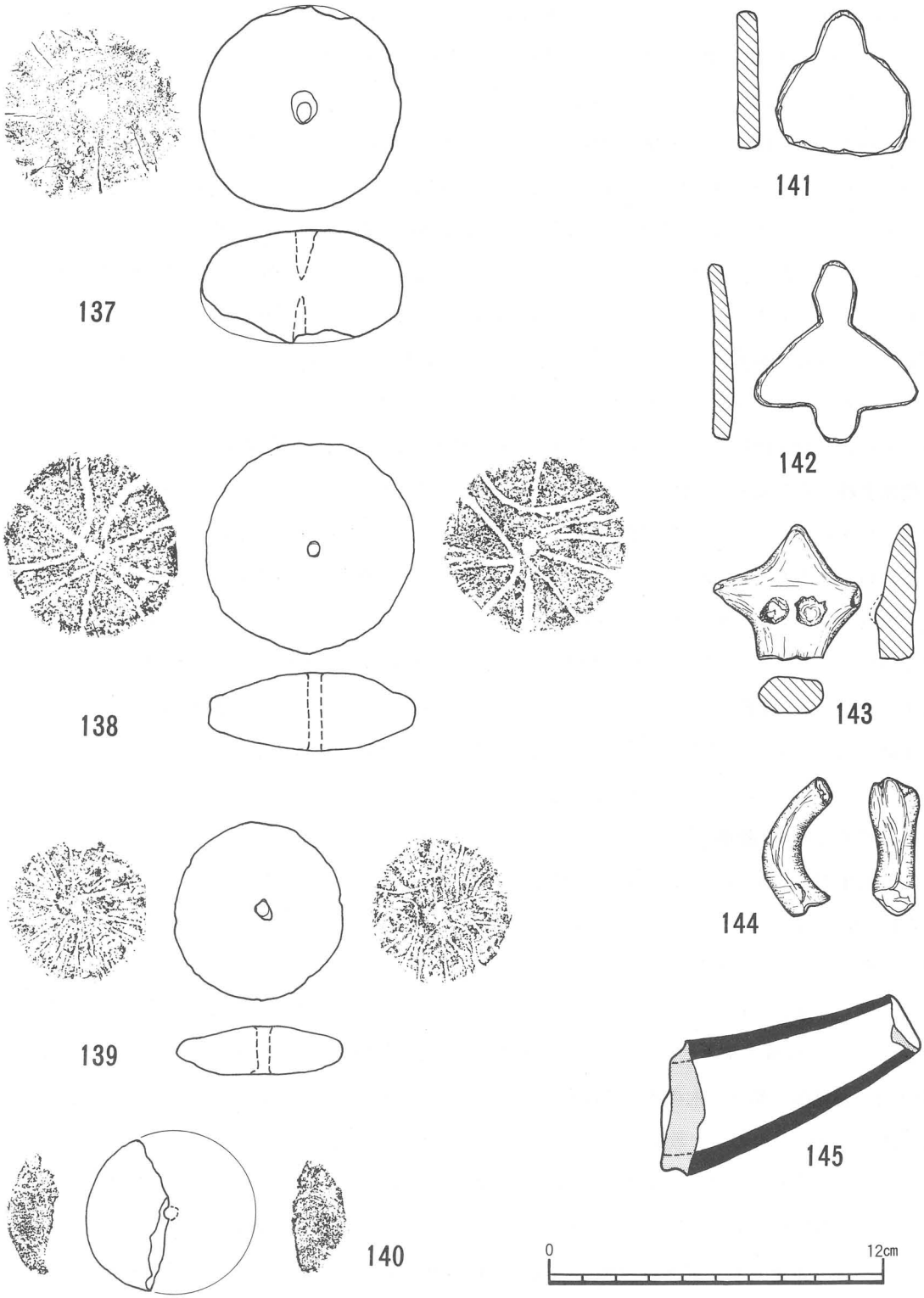
第22図　土器実測図(10)



第23図　復元土器実測図

土したもので，肩頸部に棒状工具による２本，および曲線の施文がみられる。内外面ともナデ調整で，赤茶褐色を呈する。

119～126は，縄文後期前半から中葉のもので，おもに深く掘削したトレンチや河道跡，またＢ調査区の南西半に出土したもの。そのうち119は，やや肥厚させた口縁部外面に篦状工具で刺突する



第24図　その他の土製品

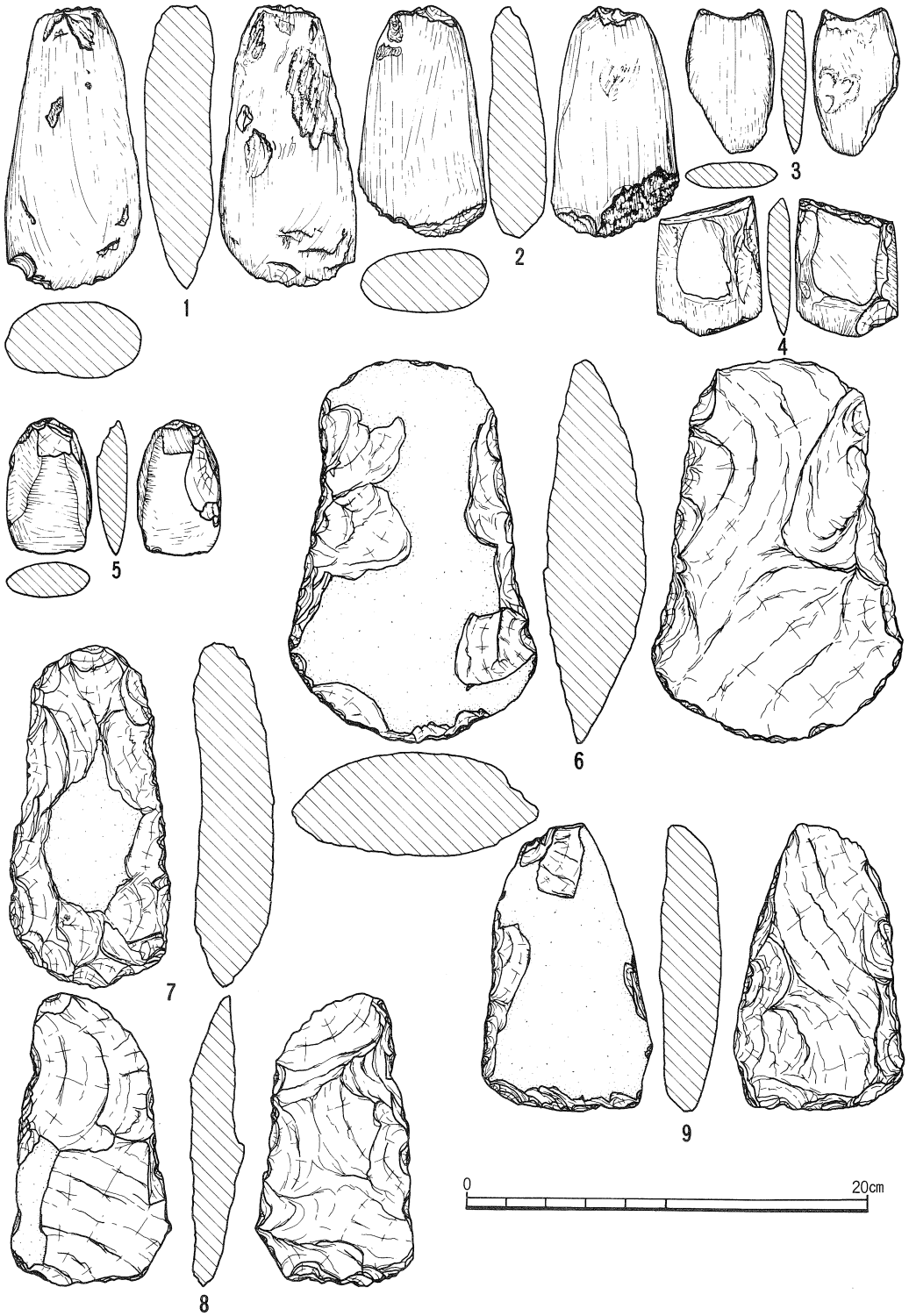
波状口縁の外面には条痕で調整した後内外面ともナデ。色調は橙褐色を呈し，焼成は良好である。120は，内外面を精緻に磨き，その外面に横方向の多条沈線を施文する。波状部は加線とする。薄手の浅鉢系土器。121～127は中津式土器で，そのうち123・124は造りが粗いものである。123以外は磨消縄文で，直線または曲線の沈線による幾何学的文様を施し，その縄文は単節とする。また121・123・124は波状口縁であり，125は袋状口縁の突出部か。123は，太めの沈線を波状口縁に並走させ，その後内外面をナデ調整とする。胎土には多量の金雲母を含み，色調は赤褐色を呈する。

127～132は，縄文包含層から出土した底部。そのうち127・128は，5層に出土した径の広い底部。前者は平底で，後者は凸レンズ状を呈しやや上げ底となる。いずれも黄褐色を呈し，内外面をナデとするが，前者は顕著でない。129・130は，径が狭く底面は凸レンズ状をなし，色調は橙褐色を呈する。前者は4層，後者は5層に出土したもの。131～133は，浅鉢系の底部と想定されるもの。そのうち131・132は粗製系で，淡橙色を呈し，133は精緻に磨かれた凹み底である。

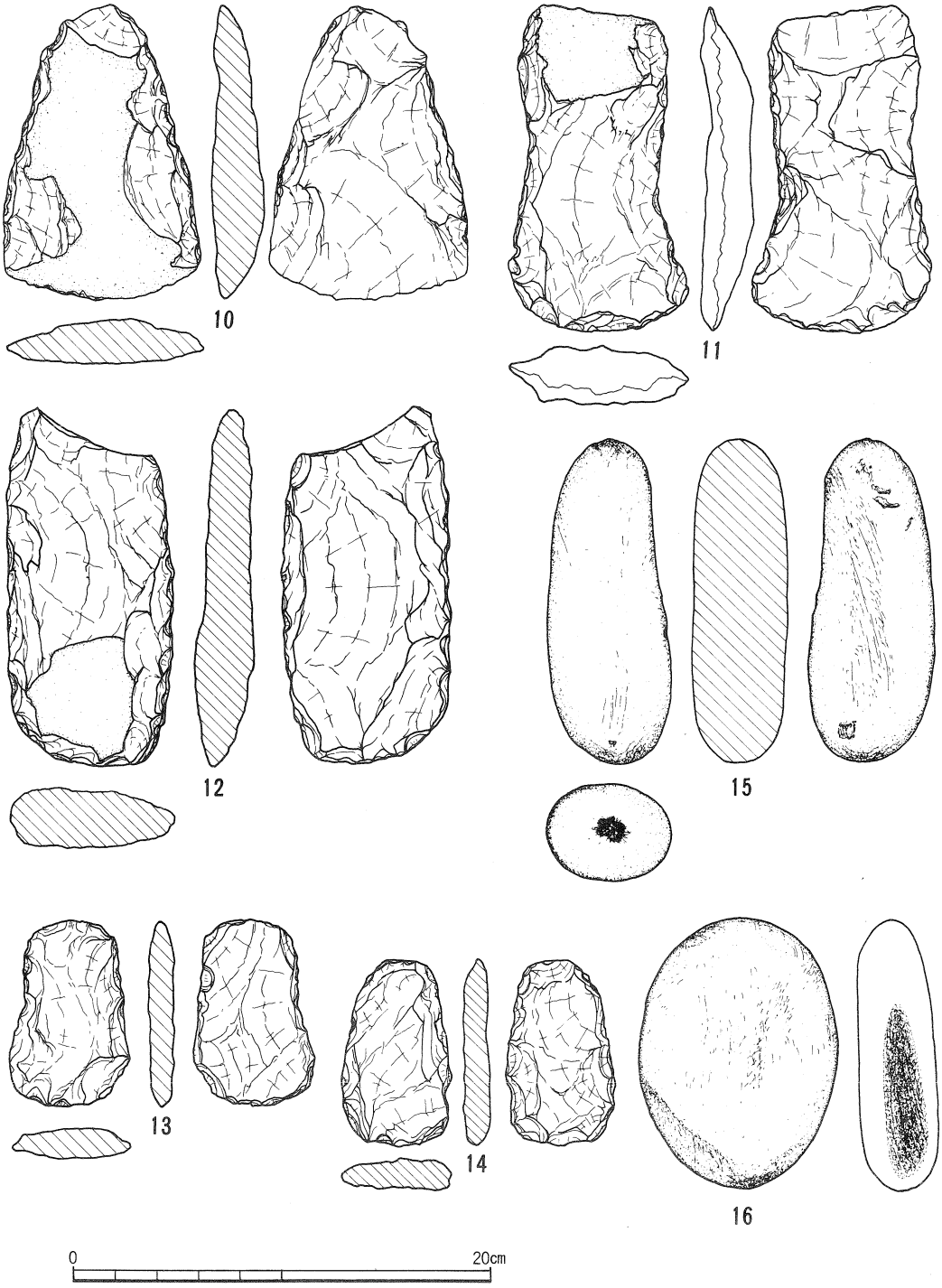
復元土器（第23図・図版16）　134～136は，縄文の復元土器。そのうち134は，SK78の土坑内に横倒した状態で出土したもの。器形は砲弾形を呈し，口頸部は「く」の字状にくっきり屈折し，口縁部は短い。内外面とも板状工具によるケズリの後，ナデ調整とする。器厚は薄く，色調は橙褐色で，焼成はきわめて良好である。136は，4層から出土した粗製鉢形土器。口縁部は，器高約17cm測るのに比べて外反して開き，その径約22cmを測る。内外面は板状工具による調整の後，ナデとし，橙褐色を呈する。135は，4層から出土したもので，頸部に屈折をもち，口縁部に向って大きく開く浅鉢土器。肩部にも屈折の稜をもち，底部は丸底で，内面肩部にはケズリ状の抉りがみられる。内外とも丁寧にヘラミガキし，黒褐色を呈する。

3．その他の土製遺物

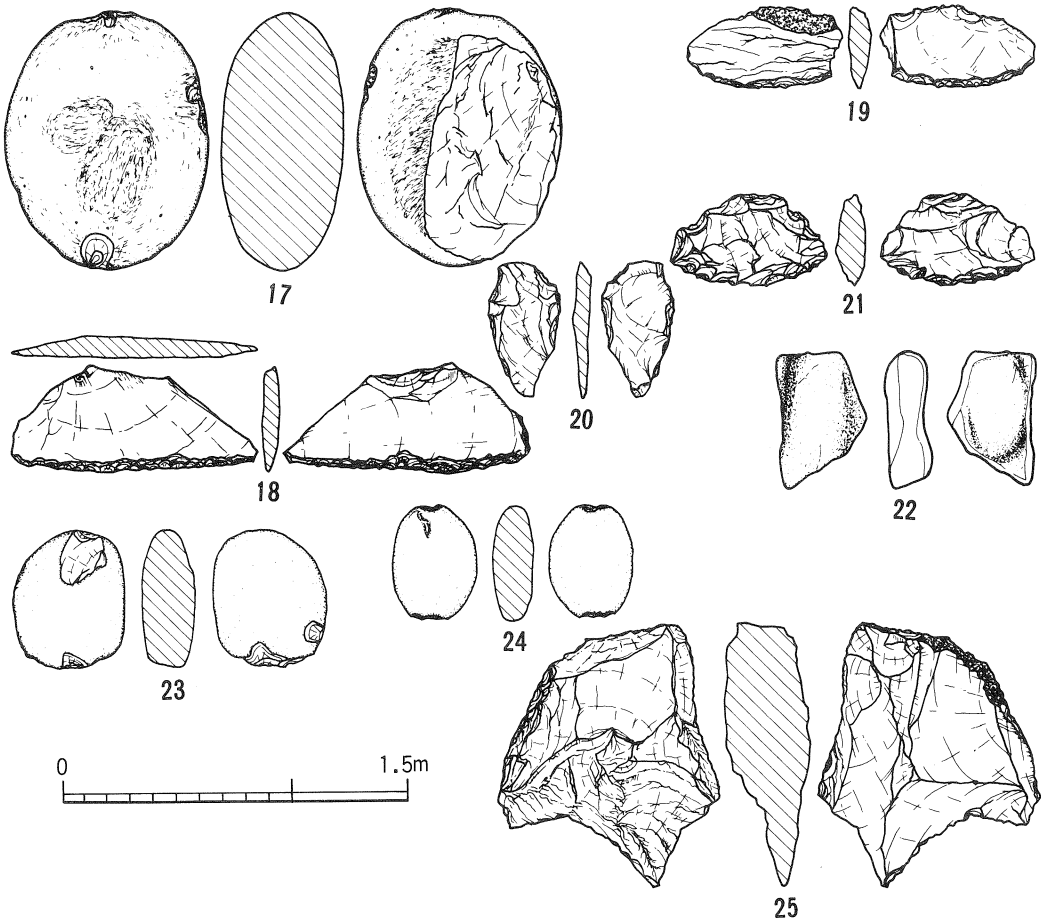
円盤形土製品（第24図・図版16）　本遺跡からは8点の円盤土製品が出土している。そのうち137は5層から出土したもので，径6.6cm，厚さ3.7cmを測り，中央部に両面からの孔を有する。本品を本町に出土している30点以上である中で，その特徴を捉らえてみると，まず無文であり，径に比べて厚く，穿孔されていない（水田の上遺跡で1点あるが）ということなどが挙げられる。138・139は，両面に紋様が施されている円盤形土製品。前者は厚さ3.4cmを測りやや厚く，太めな沈線で部分的に表裏面に繋げ，木の葉状の紋様を描く。後者はSK76土坑に出土したもので裏面に繋る半長楕円形を描き，その中に数条の沈線を描くというモチーフ。両者とも箆状工具で整形の後，ナデ調整。141・142は，5層から出土した鳥形土製品（後者は耕作土表面から80cm以下に出土）。両者とも浅鉢系の精製土器片を代用して形象したもので，象った周縁部には面取りがみられる。表面は精緻にヘラミガキされ，前者は茶褐色，後者は暗褐色を呈し，裏面はいずれも黒褐色。なお後者（第11図）は出土当時，周縁部分に赤色の着装がみられた（水洗いなどで剝脱され，今では確認で



第25図　石器実測図(1)



第26図　石器実測図(2)

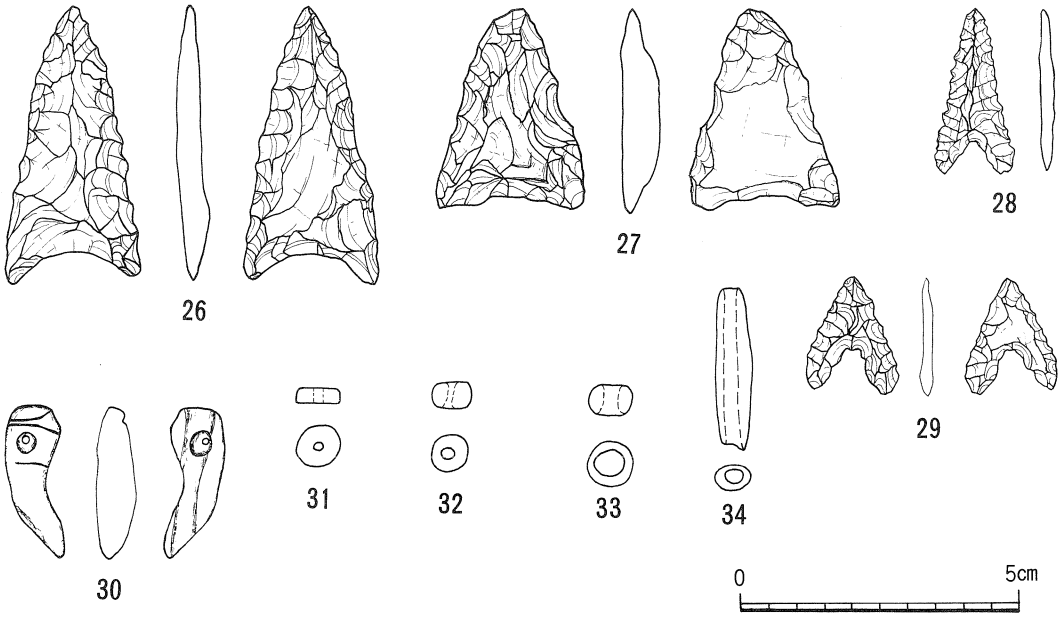


第27図　石器実測図(3)

きない)。143は，３層上面から出土した「奴凧形」土偶。頭部・手部が三角形状なし，乳房・下半部が欠損する。尋幅約5.3cm，推定背高約８cmで，板状型。調整は箆状工具による整形の後ナデで，色調は淡橙褐色を呈する。144は，３層上面に出土した異形土製品。屈曲した粘土紐状のもので，両端が欠損する。色調は淡赤褐色を呈し，調整はナデ。145は，４層に出土した注口土器の注ぎ口。内外面ともナデ調整であるが，特に筒部は指ナデが丁寧。胎土は精緻で，外面の色調淡赤橙色内面筒部は暗褐色を呈する。

４．実測石器

はじめに　本遺跡では多くの石器類が出土しており，大半は３層から４層にかけて，つまり縄文晩期中葉に位置付けられるところの黒川式（原下層式に併行期）以降と考えられる縄文文化層にみ



第28図　その他の石器実測図

られた。しかし非日常生活品である玉類などの呪術品は，4層下面から5層にかけての下位層で出土するという傾向がみられ，そこには石器から生活の立て方の差異が浮き彫りとなったといえる。

石斧などの実測石器（第25図～第27図・図版17～図版18）　1～5は，3層から4層にかけて出土した磨製石斧類で，1・2は緑泥片岩，3は蛇紋岩，4・5は玄武岩の材質である。そのうち3は，成形・打裂痕がみられず，また円礫の表皮がのこることから河原石を材とし，無成形のまま刃部を中心に研磨したものと想定される。また4は，節理面の板状を材とし，側面部を研磨したもの。器長約6.7cmを測る5は，周縁部から打裂して成形の後，稜線を段状に研磨する。おそらく再加工品であろう。

6～14は，打製石斧で，12の5層以外，他は3層および4層からの出土したものである。材質はすべて玄武岩で，そのうち6～10・14・15は撥形，11は分銅形，12は短冊形である。6は器長約19cm・器幅約12.5cm・器厚約5cmを測り，大型である。周縁部から粗い敲打を加え成形し，表面には自然面がのこる。7は，器幅に比べて厚手で，裏面に反る。10は，典型的な撥形で，測縁部を2次加工して成形する。14・15は，前者の器長約9cm，後者が約8.7cmを測り，両者とも小型。敲打で成形の後，周縁部を2次加工の打裂で整形する。

15は，砂岩材質による敲石。器長約15.5cm測る両端，特に先端部には打敲が顕著で，体部には擦

痕もみられる。16・17は磨石で，前者が花崗岩，後者は砂岩の材質。両者とも擦痕がみられるが，特に前者は磨滅が顕著で，後者には打敲痕もみられ壊損する。

18～21は剝片石器類。いずれも3層および4層から出土したもので，材質は安山岩質凝灰岩である。そのうち18は，横型のスクレイパーで，単一打裂した剝片をもって，刃部面に両面細部調整を施したもの。22は軽石材質のもので，曲折面に擦痕が認められることから砥石類と考えられる。23・24は，円礫をもちいた打欠の石錘。前者が1層の耕作土，後者が4層黒色土に出土したもの。25は，4層から出土した安山岩質凝灰岩の石核。

その他の実測石器（第28図・図版18）　26～29は石鏃。26は，3層から出土した基部に抉入にある無茎鏃。器長4.8cm，器幅2.3cmを測る大型のもの。材質は安山岩質凝灰岩で，剝離はやや粗い。28は，乳白色の黒曜石。器長約3cmを測り，周縁部を丁寧に剝離する。29は，安山岩質凝灰岩による鍬形鏃。

30～34は玉類。そのうち30は，SK25土坑内から出土したJ字形勾玉。材質は翡翠で，C字形にやや湾曲する。頭には孔を有し，その上下に1～2条の刻線がある。裏面には縦方向の穿孔痕がみられることから，玉類を再加工したものであろう。31は青瑪瑙，33は滑石製で，前者はSK10土坑上に出土したもの。後者は水路埋設地（拡張区）で採集されたものである。34は，SK114土坑内に出土した管玉。材質は長崎翡翠といわれるもので，器長約3cm，器幅約0.7cmを測り，体部を精緻に研磨する。

（渡辺友千代）

第5章　匹見町ヨレ遺跡出土の植物遺体

1．サンプルの状態

送付された貯蔵穴内の植物遺体を含む土壌サンプルは，約28,900㎤である。このなかにはかなり大型の礫も多数含まれていた。

2．検討のプロセス

あらかじめトチの存在に気付いていたため，種皮付きの種子か裸の種子なのかに重点を置いて検討することにした。

そのためには水洗選別に再して，できるだけ水に浸しておく時間を短縮することが必要であった。また大型の礫も多数含まれていたため，水を加えた第1段階で，明らかに大きなものは直接手で取り上げた。

第2段階では10㎜間隔のふるいで選別した。

次に第３段階では，0.6㎜間隔のふるいで細泥を流し，水を透明状態にした。

以下，５㎜，３㎜，２㎜の各段階のふるいで選別した。

３．検討の結果

検出された植物遺体は，野生の堅果類である次の１種のみである。

とちのき科トチノキ　Aesclus trubinata Blume

残存状態は，次のとおりである。それらは種皮の有無が基準である。

A．種皮無し ── a．5㎜以上。94.4ｇ（図版19－１）。
　　├── b．2㎜～5㎜。136.4ｇ。
　　└── c．0.6㎜～2㎜。30.7ｇ。

ｃは厳密にはトチと判断できるサイズではない。しかしトチ以外の種子が認められないので，本遺跡においては上記の取扱いで問題無いと考えられる。

B．種皮付き ── 24.2ｇ（図版19－２）。

C．種皮破片 ── a．発芽孔のあるもの。2.4ｇ（図版19－３）。
　　└── b．発芽孔の無いもの。75.4ｇ。

以上のうち，特にＢとＣにおいて明らかなように，それらは種皮付きのまま貯蔵されていたと判断される。

トチは，長期貯蔵の場合はよく乾燥させて屋根裏に置くが，短期貯蔵の場合は虫殺しをした後，本遺跡例のように穴のなかに入れておく。乾燥させてしまうと，皮むきもアク抜きも面倒になるので，その冬食べる分だけは穴貯蔵するのである。

なおこれは筆者の推定ではなく，民俗調査の結果である。

また，植物遺体以外に次の人工遺物も含まれていた。

D．土器細片　　55点。

E．削　　片　　17点。

（渡辺　　誠）

第６章　小　　結

本遺跡は，縄文晩期から奈良平安時代・室町時代にかけての遺物・遺構を検出した複合遺跡である。集落あるいは墓地（祭場）が営まれたと想定される時期については，縄文後期前半の中津式土器に比定されている段階をまず第１期として捉らえられる。該期は河床礫層上に営まれた可能性が強く，部分的に遺構の顕在が認められるが，完掘していないこともあって集落形態などは判然とし

霊屋（たまや）　（益田市川登町）

今日でも島根県益田市の西部域では，土葬の場合において，石塔が建てられるまで，アマヤ（黒周町中倉）とかウワヤ（横田町中小路）といって，埋葬した墓地に位牌や標石（河原石）を納める家形代を置き，その周囲にタマガキという垣を設けて囲う。

もとは埋葬した場所に４本の木棒を立て，その上にタテガン（立棺）の鳥形がとり付けられた屋根型の天蓋が載せられたという。ウワヤという語原は，おそらくその様形に起因しているものと思われる。

ていない。ただし，非配石の墓坑と確認される中には，つまり勾玉などの玉類が検出された土坑には共伴遺物などからみて，該期の墓坑としての遺構の可能性も否定できないと考えられる。

第２期として考えられるのは，本報告の主要な配石遺構を構築した時期で，縄文後期後葉から晩期前葉の時期に当たる。出土土器としては岩田Ⅳ類を主体とするものであって，その包含層は４層黒色土の下面に検出を多とする。これらは細片が多く，比較的精製品の比率が高かったことも目に付いた。その分布は配石土坑内には極めて希で，坑上面に出土するという状況を呈していた。しかし円盤形土製品は２坑において坑内で検出されており，非日常具の可能性が窺われ，そこには土偶・鳥形土製品らと同様の祭具として相有されていたものと考えられる。

また坑内には比較的高い比率で骨片が検出されている。この骨片が人骨あるいは獣骨かについて

はいちいち分析していないものの（うち6点の骨片を井上貴央教授に鑑定してもらった結果によると，いずれも獣骨という），出土状況からみて，配石坑に埋蔵されたものであることは確かであろう。しかも酸性度の強い土質下にありながら，その顕在が確認されたということは，その保存率からみて，火焼等により遺存性が高化されたことを示しているといえるのであろう。つまり火焼→埋蔵という2次的行為が窺われるのである。あくまでも恣意的ではあるが，そういった理解に立てば，焼土址の検出，あるいは生命遺体の直接埋蔵にしては余りにも小規模の土坑が多すぎる，という不合理性も解決できそうである。ただしSK71・SK84などの土坑内には，僅少の炭化物が検出されているが，これらの土坑内には火焼痕跡が確認されていないことから，これは遺骨への混在物として捉らえられる。

以上のことから，現段階では確定的要件を充たしていないものの，敢て公約数を集約するならば，該配石遺構群は狩猟儀礼の祭場としても共用されていた可能性が考えられ，土偶・円盤形土製品（女陰を形像ったものか）は，おそらく“再生”具としての祭具であったものであろう。

一方，これらの配石遺構期における日常生活としてのプレイスが存在したかについては明らかではなく，遺構と遺物の共伴性からみて，面的に捉らえられる多くの遺構との関係はむしろ薄いと判断される。勿論，該期と判断するSB－1・SB－2の遺物跡が検出されているものの，前者は竪穴式にもかかわらず径2mと小規模，後者は規模的には問題ではないとしても，非竪穴式という日常生活的な建物としては，両者ともそぐわない面が指摘できるのである。

これから考えて，線刻石，立石が検出されたSX－1などの特殊的遺構にみられるように，それらは祭場としての機能をもった関連施設ではなかったかという想像が頭を擡えてくるのである（写真・霊屋参照）。

3期として捉らえられるのは，縄文晩期中葉から刻目突帯文土器が出現する末葉までの時期と想定される。この中にはヘラ描き沈線文を多用した中山B式的なもの（第14図），あるいは原下層・前池式などが顕在しており，また九州の黒川式あるいは近畿でいうところの滋賀里Ⅲb式などを母胎する。これらの土器は概ね4層中位面で出土しているが，埋土が単層であるため下面で検出された配石期の遺物とは正確に分離できておらず，しかも該期における遺構界をも見逃している可能性が強い。しかし上下関係によるところの出土傾向は凡そ把握されており，両期における生活形態差は認知できるものと考えられる。特に磨製，打製をはじめとする斧，磨石・掻器・削器などの日常的石器類の大半は，4層中位面を中心とする該期の土器と共伴しており，また下位層に至達して検出されたSK55の貯蔵穴にみられるように，そこには祭示的性格の2期とは異なったエヴリディ的な社会があったと，想像されるのである。

4期とするものは，2層客土から4層上面にかけて出土した弥生中期から古墳中期の時期に当た

るもので，該期に集落が営まれていたことは確かであろう。しかし，その出土面が上位層に存在していたために，後世の田地開墾などで上面は平削されており，しかも埋土が単層であるために遺構も確認することができず，したがって集落形態などは明らかにすることはできなかった。ただし３層黒色土（茶褐色土が欠落しているために，実質的には４層に並層するもの）には，共伴性，層位的にみて弥生時代と想定される列石遺構が検出されている。この列石遺構がどのような目的のもとに構築されたかは，上述の状況もあって明らかにすることはできなかったが，形態的には手がかりとしての注意点を指摘することができる。それは列石体の中位面の一側面に帯状の砂粒を敷き詰めていることなどが挙げられ，よって今後の事例あるいは構築形態から解明されることを期待したい。

５期とするものは，耕作土から４層黒色土に掘り込まれた中世墓の遺構である。この土坑墓はハンモック状を呈しており，その坑形また発掘状況からみて，坑部上面及び標石などは他の数基のものとともに平削によってとり払われたものと思われる。また坑内から検出された銭貨から，該墓跡は上限法則にもとずいていうならば，15世紀中ごろ以降のものであるといえるだろう。

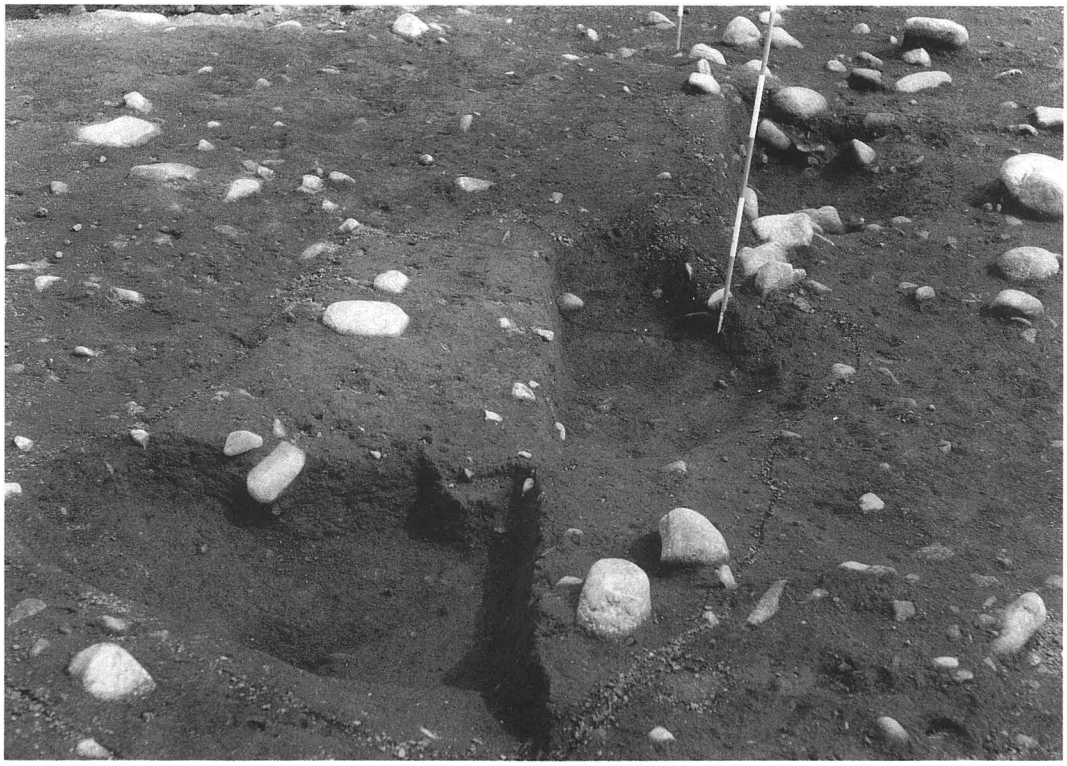
以上，遺構形態を中心に私考を記述し，小結としたい。

（渡辺友千代）

1．遺跡地点鳥瞰

図版 2

1．発掘風景

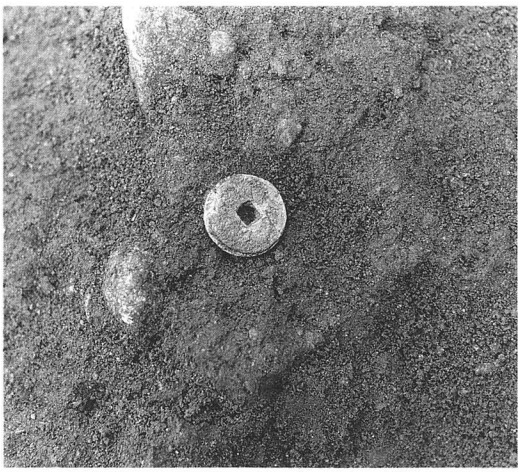


2．中世墓検出状況

1．列石出土状況（南東から）

2．列石中の方形状に突出した部分

図版 4



1．銭貨出土状況(中世墓壙内)

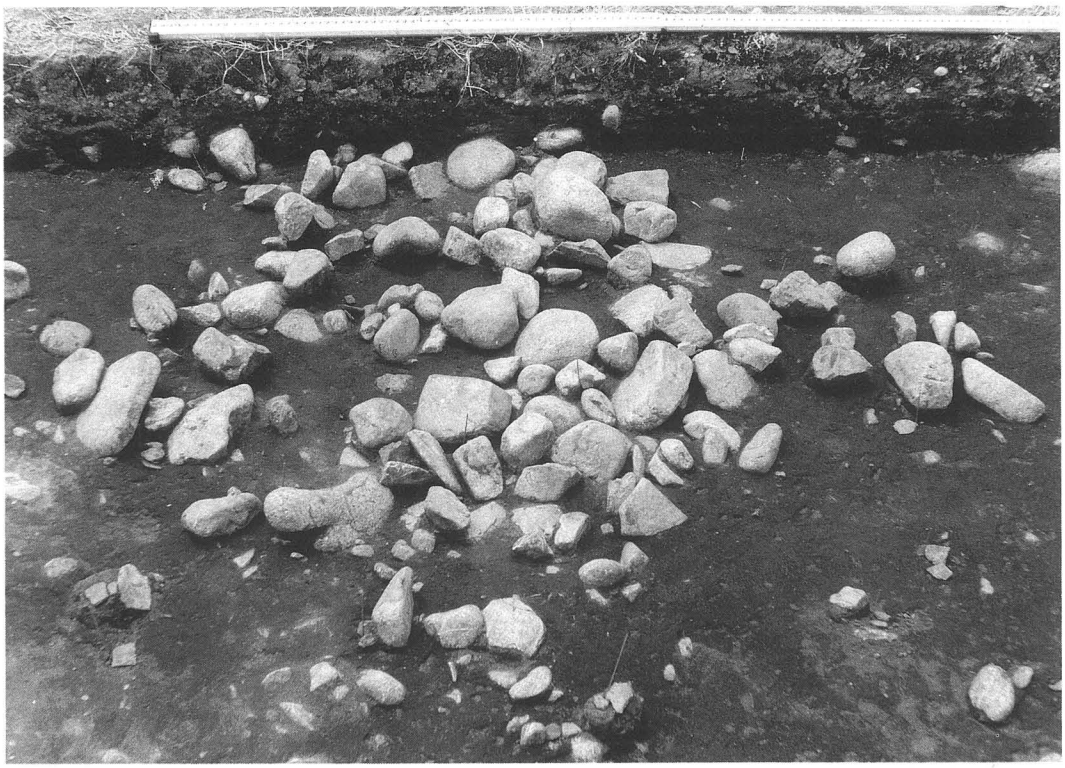
2．骨片出土状況

3．土偶出土状況

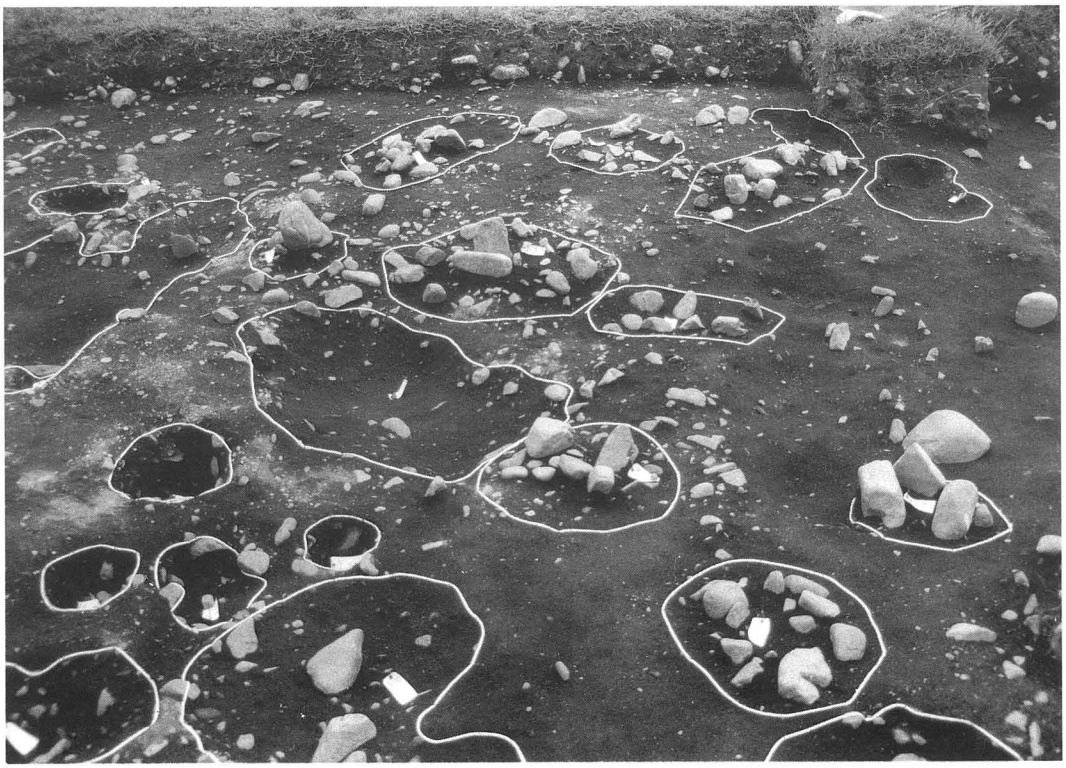
4．黒色磨研土器出土状況

5．石鏃出土状況

6．円盤形線刻土製品出土状況



1．3層上面に出土した配石（D区）

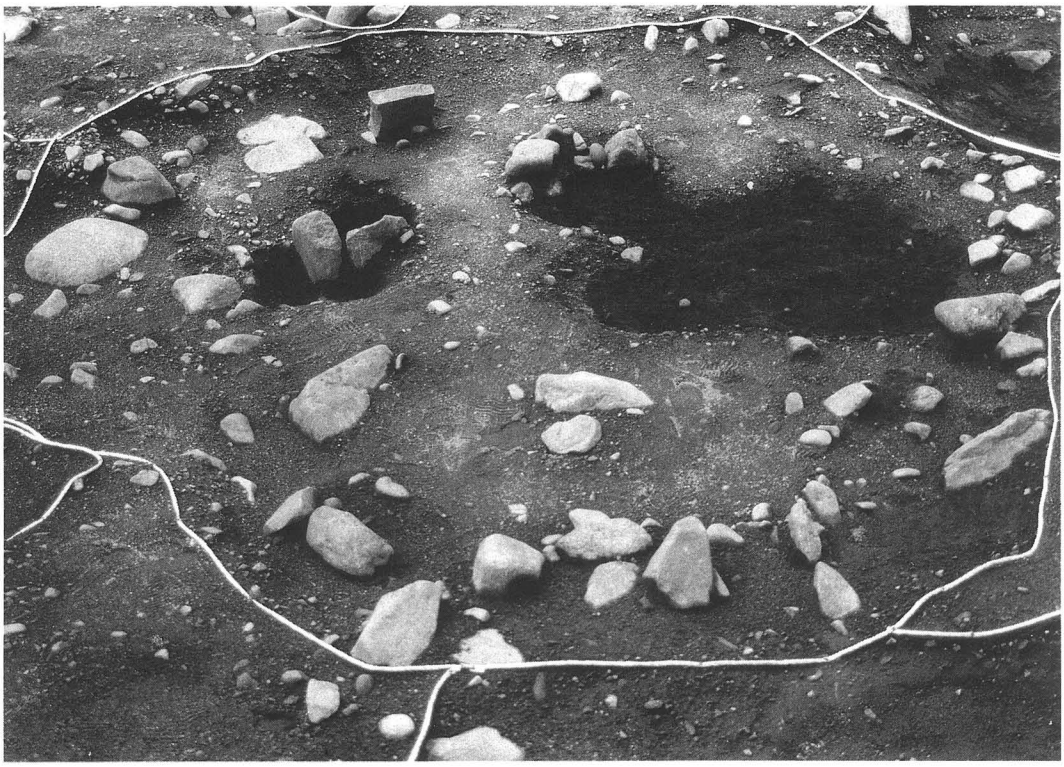


2．A区に出土した配石群（北から）

図版 6

1．配石に出土した線刻の石体

2．立石を伴う配石（SK97）



1．A地点土坑内状況

2．A区東側の基底面状況（北西から）

図版 8

1．土坑内の組石状況（P50）

2．トチの実を検した土坑状況（SK55）

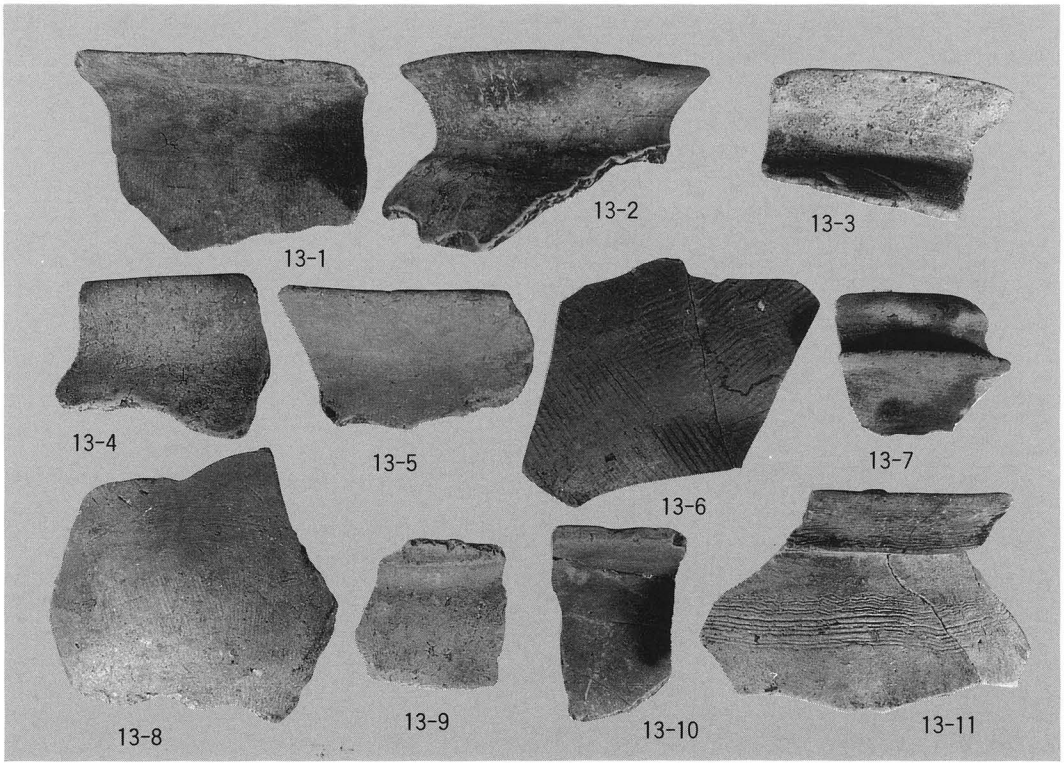
1．A区の発掘状況（南から）

2．B区の発掘状況（北から）

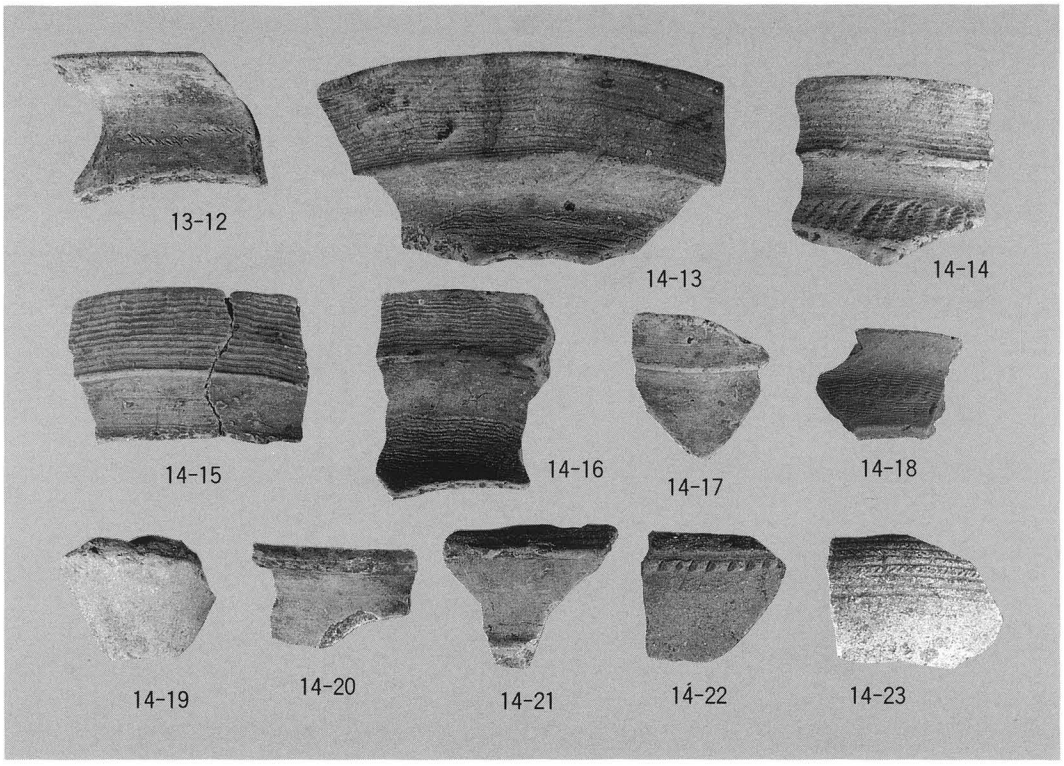
図版10

1．A区・B区の発掘状況

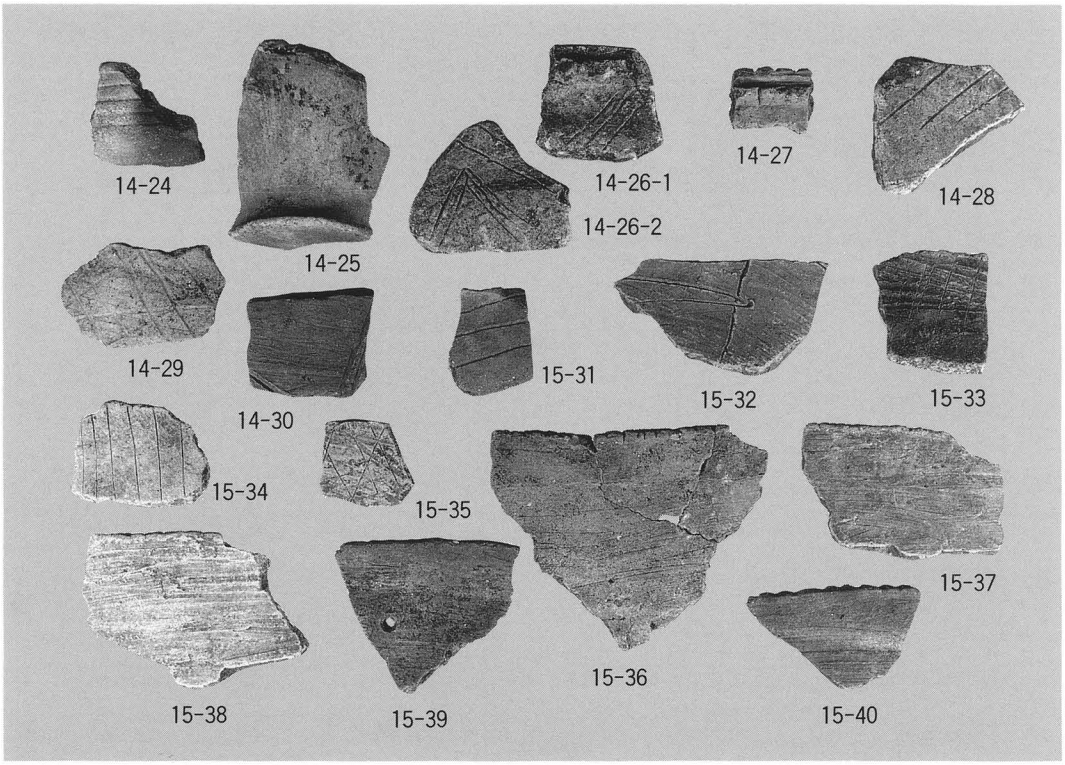
2．南から見た発掘区


13-1
13-2
13-3
13-4
13-5
13-6
13-7
13-8
13-9
13-10
13-11

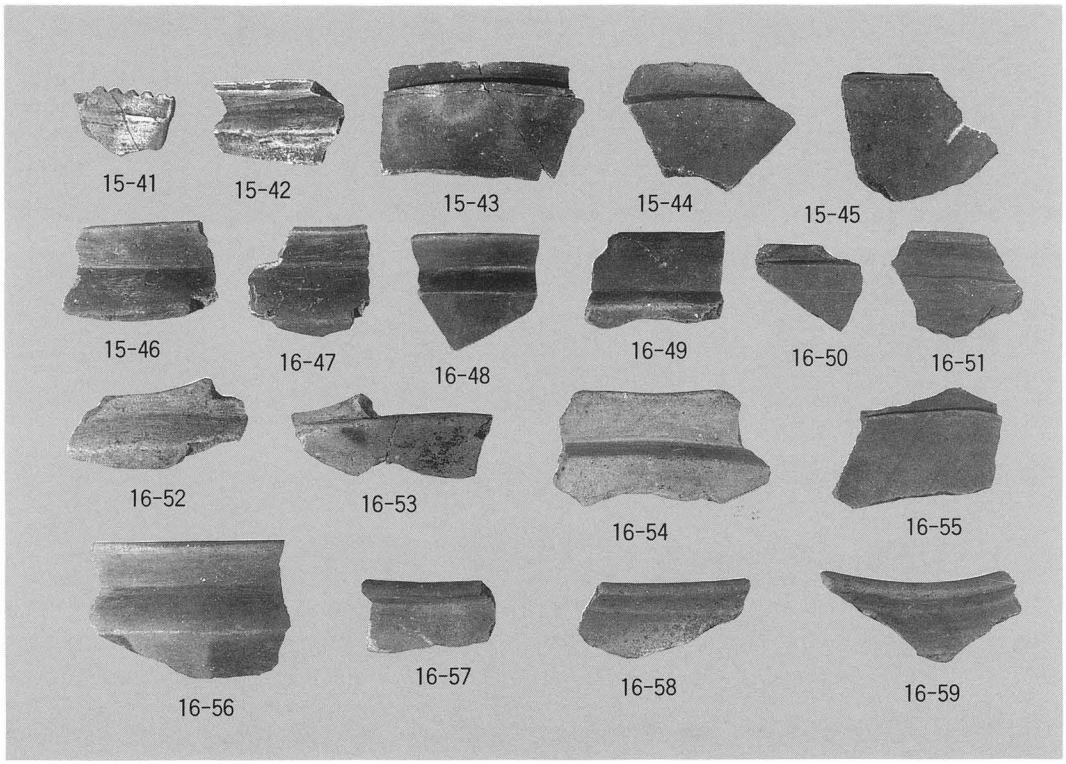
1. 土　器(1)


13-12
14-13
14-14
14-15
14-16
14-17
14-18
14-19
14-20
14-21
14-22
14-23

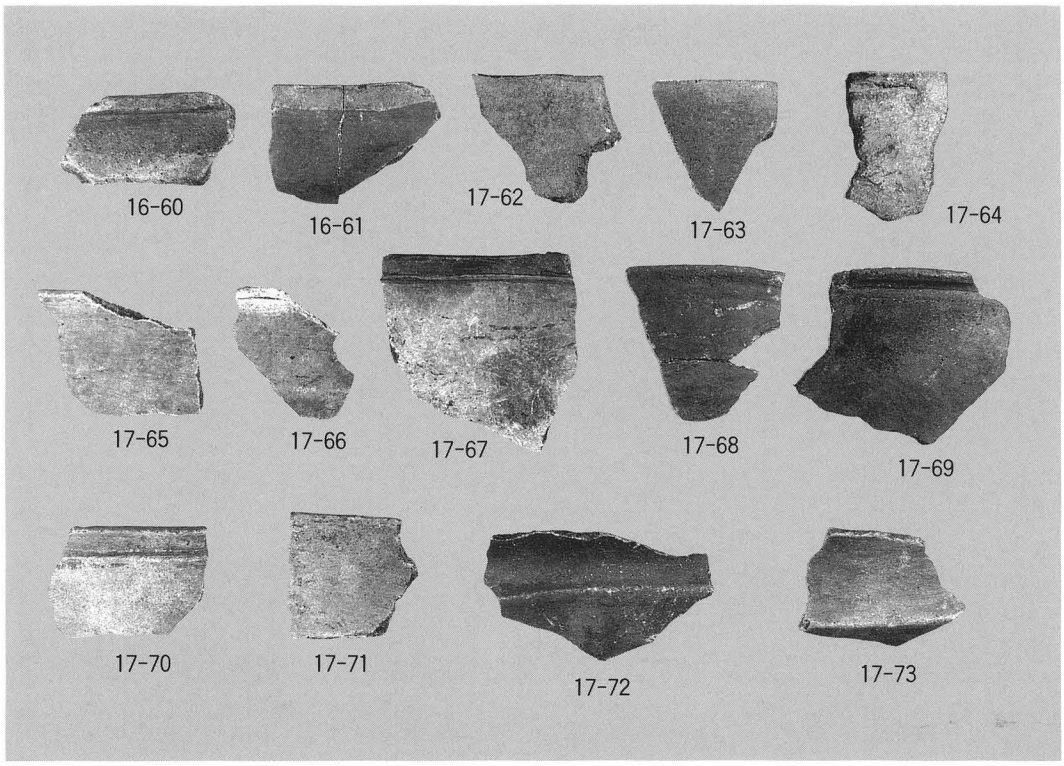
2. 土　器(2)


14-24
14-25
14-26-1
14-26-2
14-27
14-28
14-29
14-30
15-31
15-32
15-33
15-34
15-35
15-36
15-37
15-38
15-39
15-40

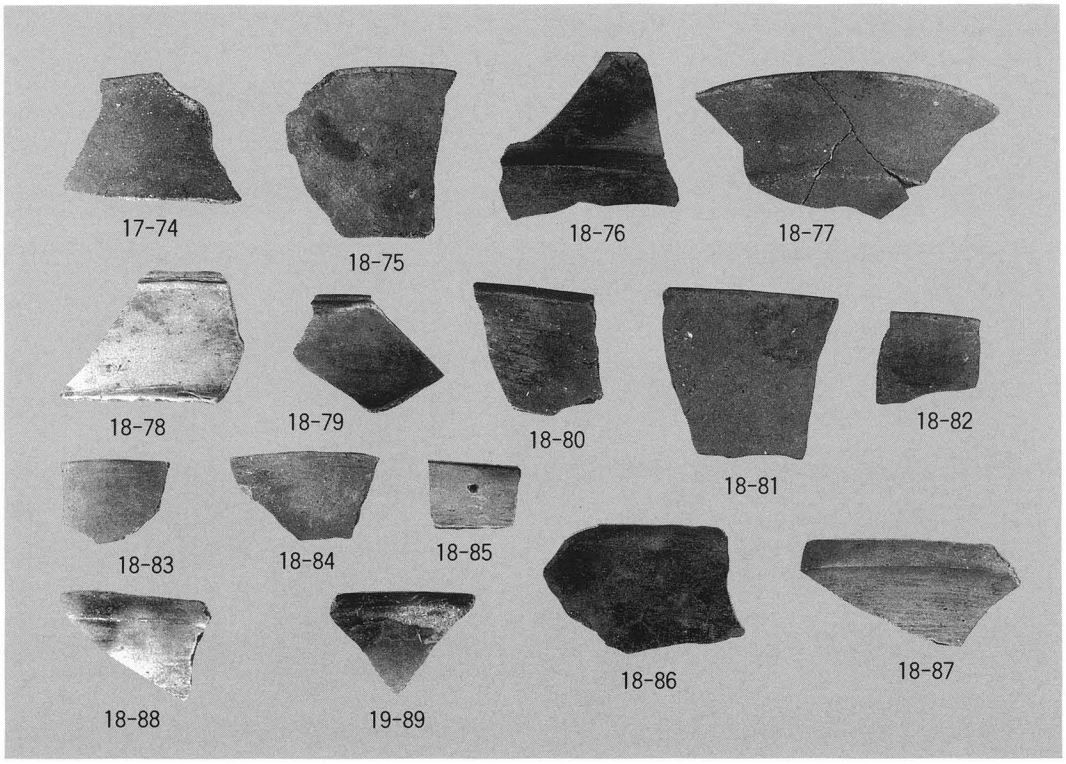
1. 土　器(3)


15-41
15-42
15-43
15-44
15-45
15-46
16-47
16-48
16-49
16-50
16-51
16-52
16-53
16-54
16-55
16-56
16-57
16-58
16-59

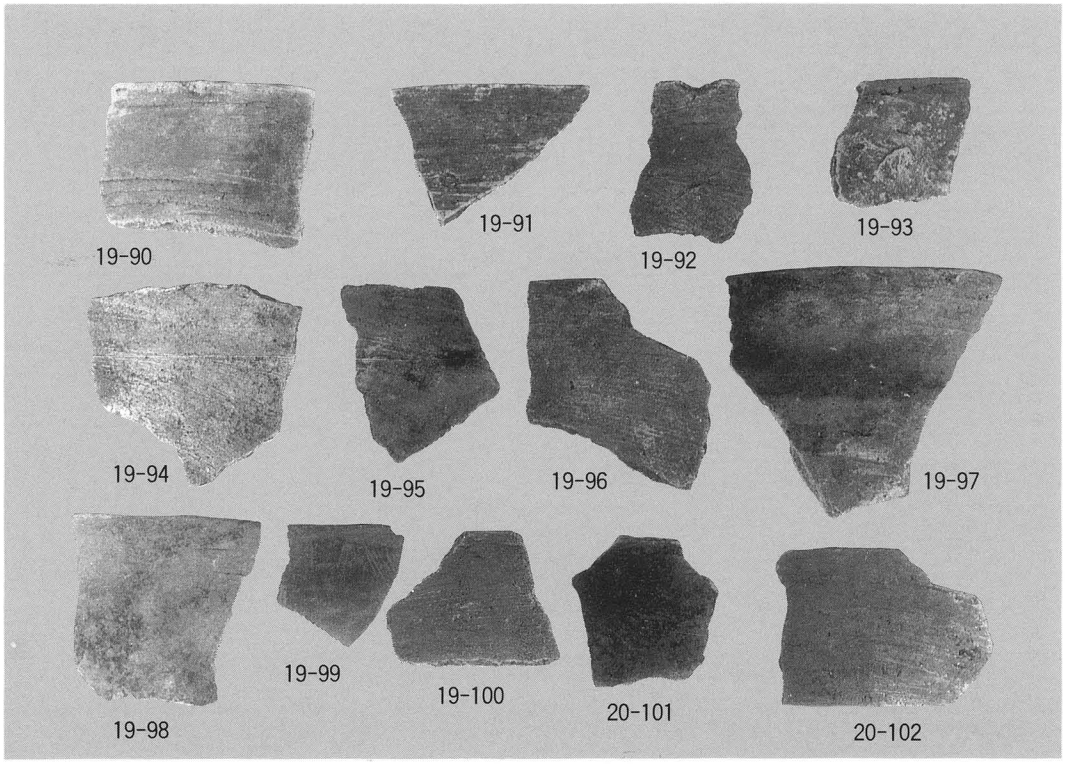
2. 土　器(4)


16-60
16-61
17-62
17-63
17-64
17-65
17-66
17-67
17-68
17-69
17-70
17-71
17-72
17-73

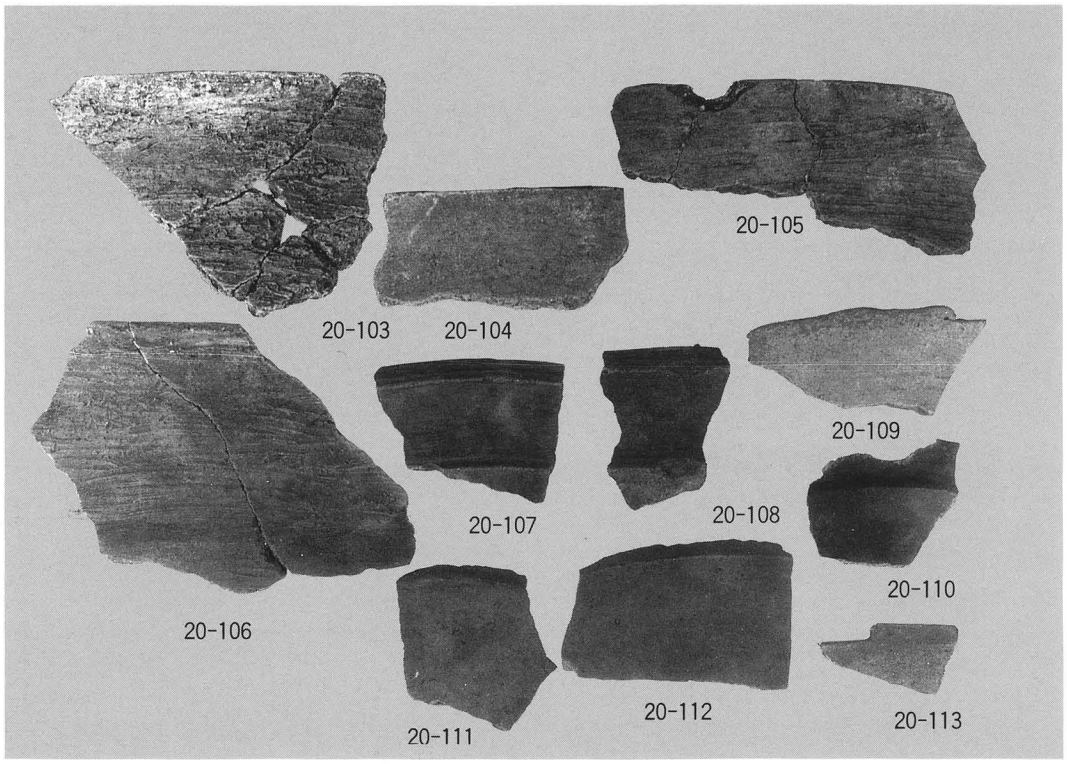
1．土　器(5)


17-74
18-75
18-76
18-77
18-78
18-79
18-80
18-81
18-82
18-83
18-84
18-85
18-86
18-87
18-88
19-89

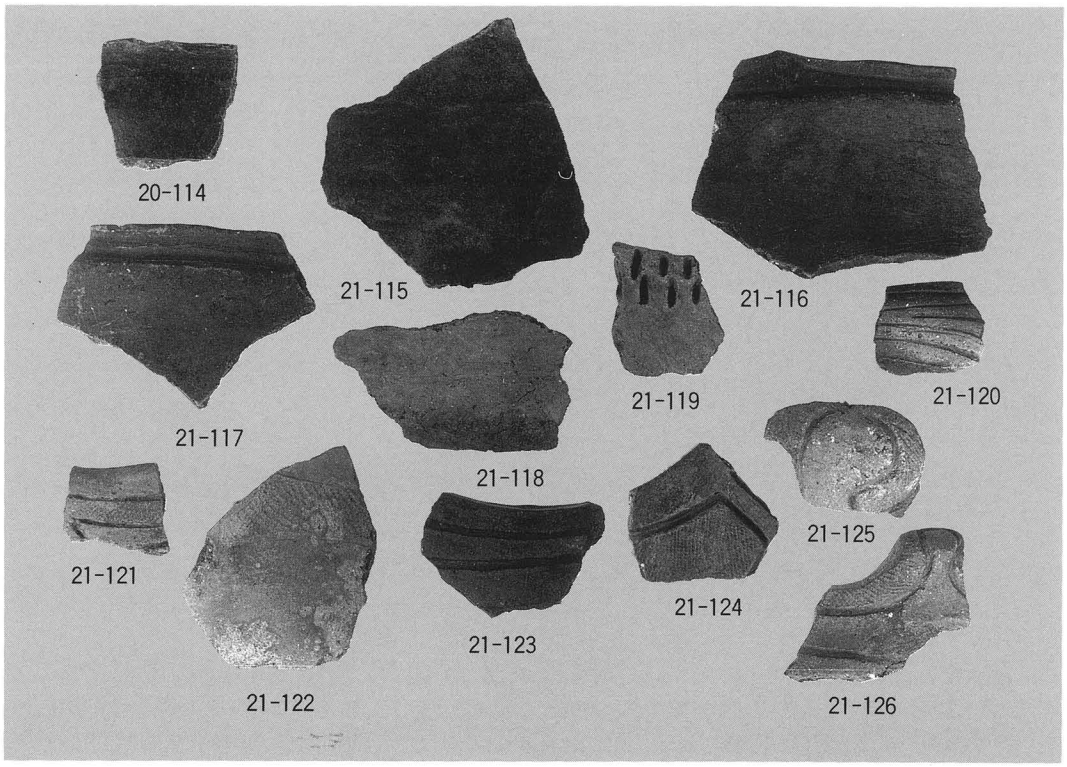
2．土　器(6)


19-90
19-91
19-92
19-93
19-94
19-95
19-96
19-97
19-98
19-99
19-100
20-101
20-102

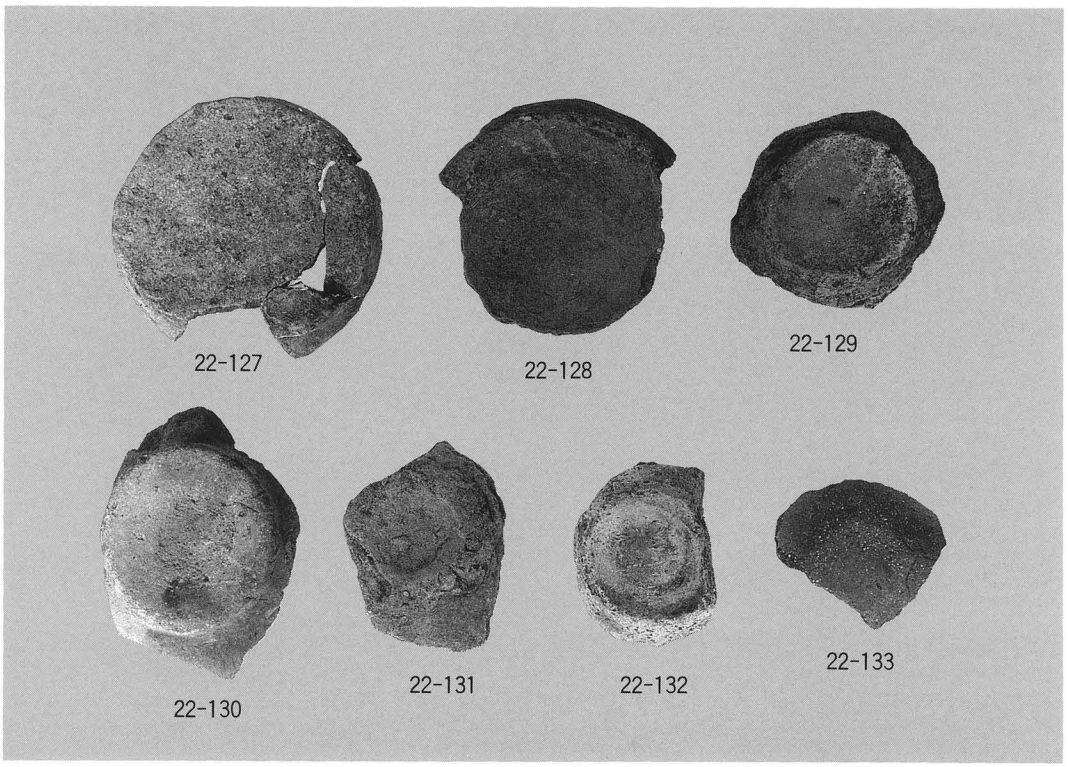
1. 土　器(7)


20-103
20-104
20-105
20-106
20-107
20-108
20-109
20-110
20-111
20-112
20-113

2. 土　器(8)


20-114
21-115
21-116
21-117
21-118
21-119
21-120
21-121
21-122
21-123
21-124
21-125
21-126

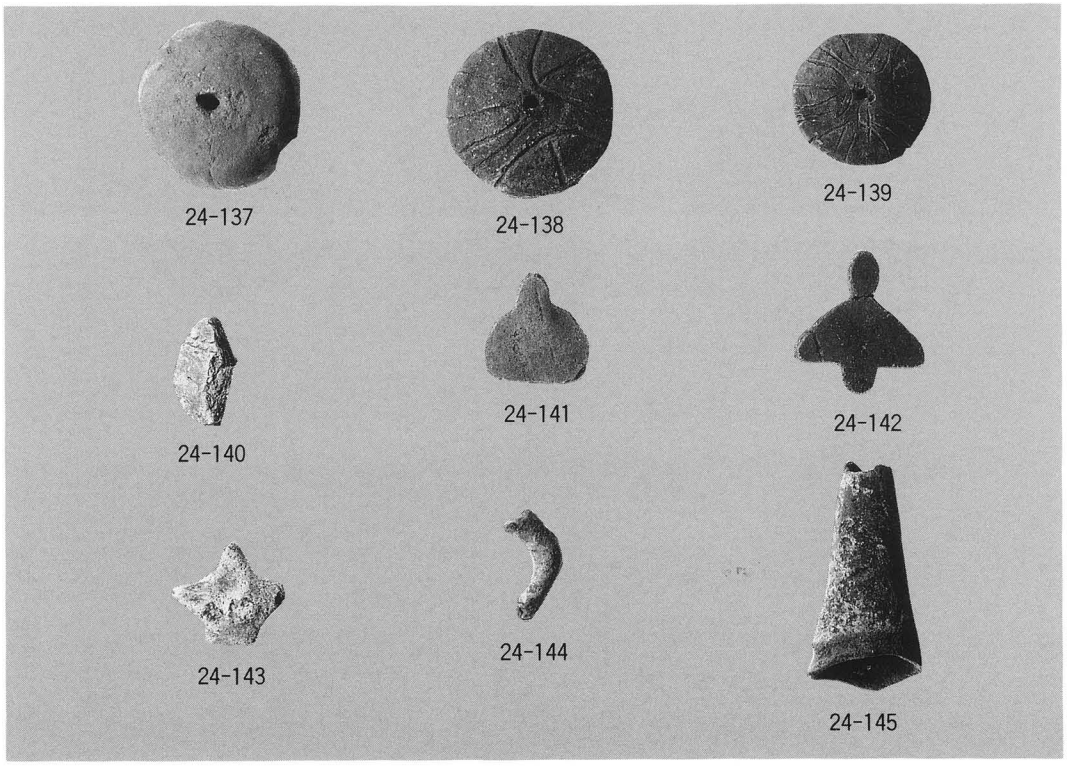
1. 土　器(9)


22-127
22-128
22-129
22-130
22-131
22-132
22-133

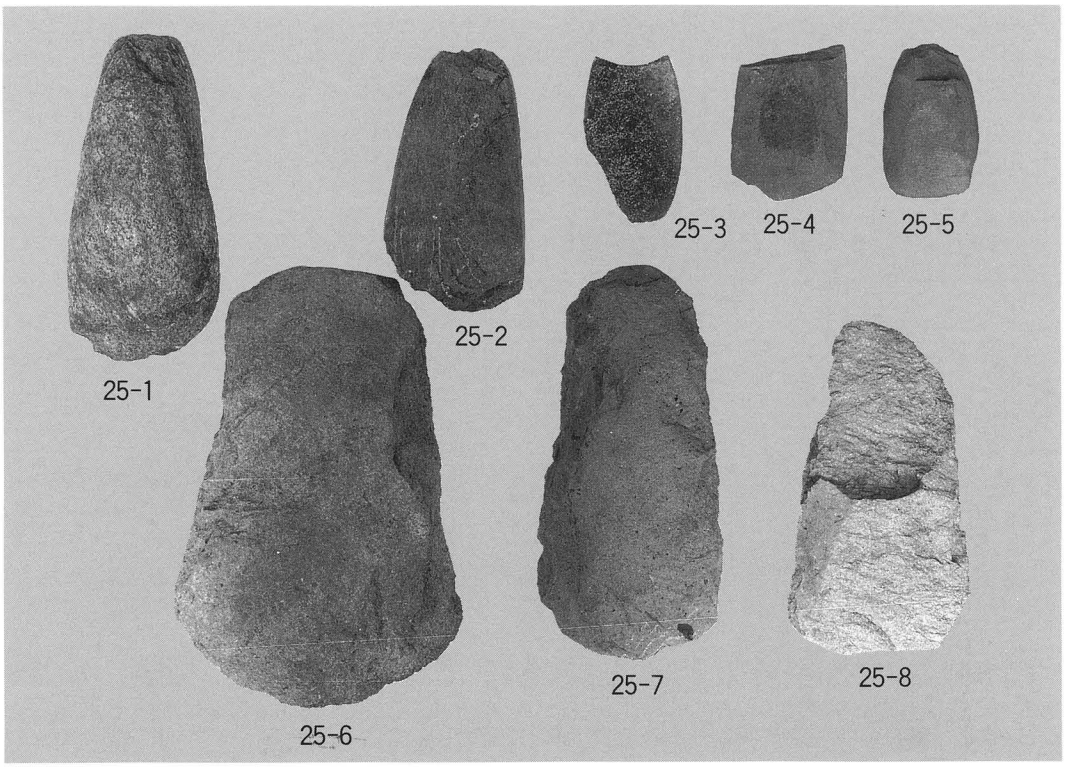
2. 土　器(10)

図版16

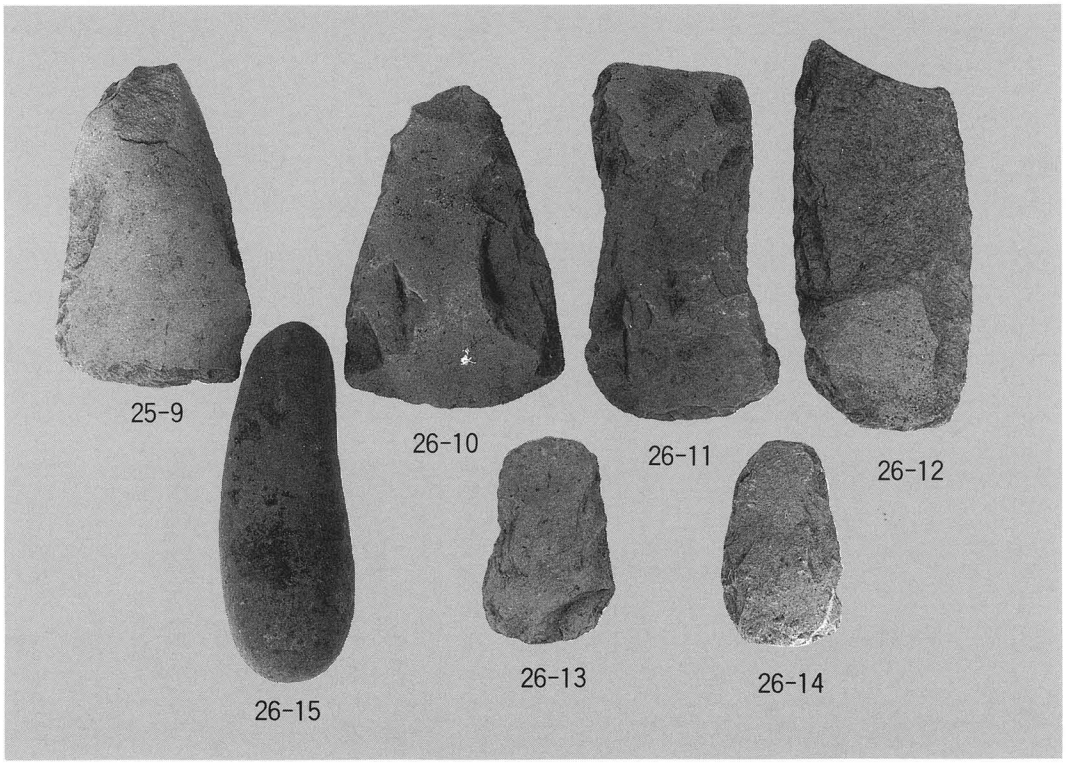
1．復元土器



2．その他の土製器

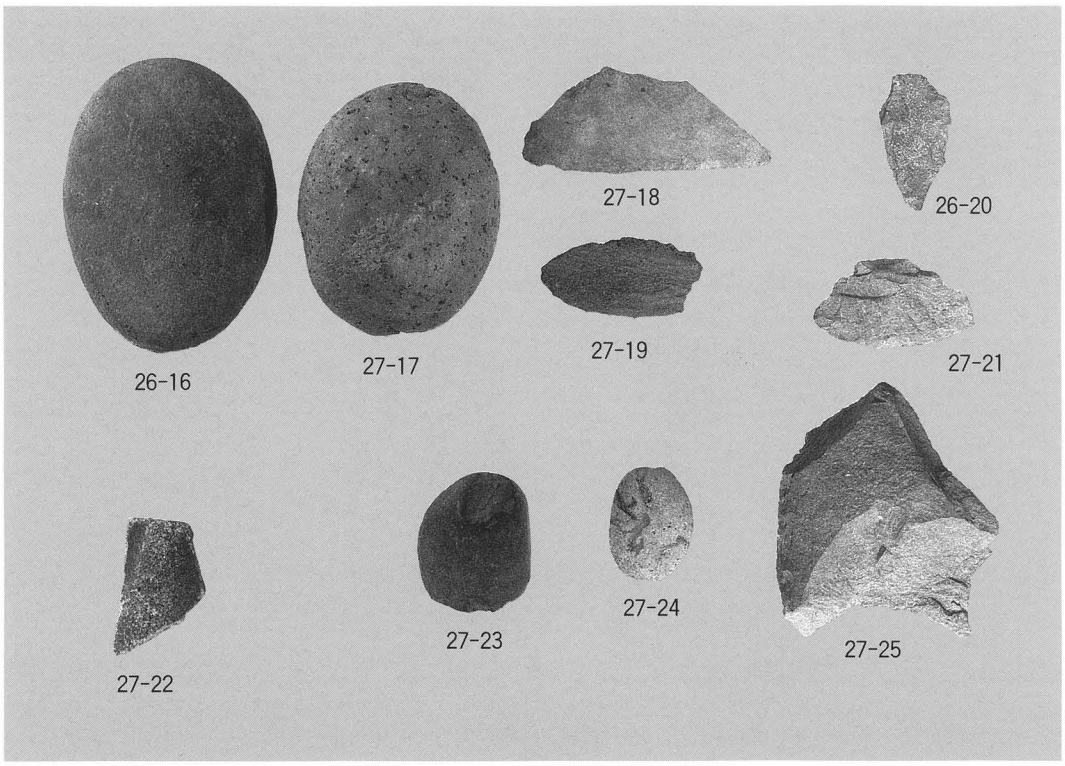

25-1
25-2
25-3
25-4
25-5
25-6
25-7
25-8

1．石　器(2)

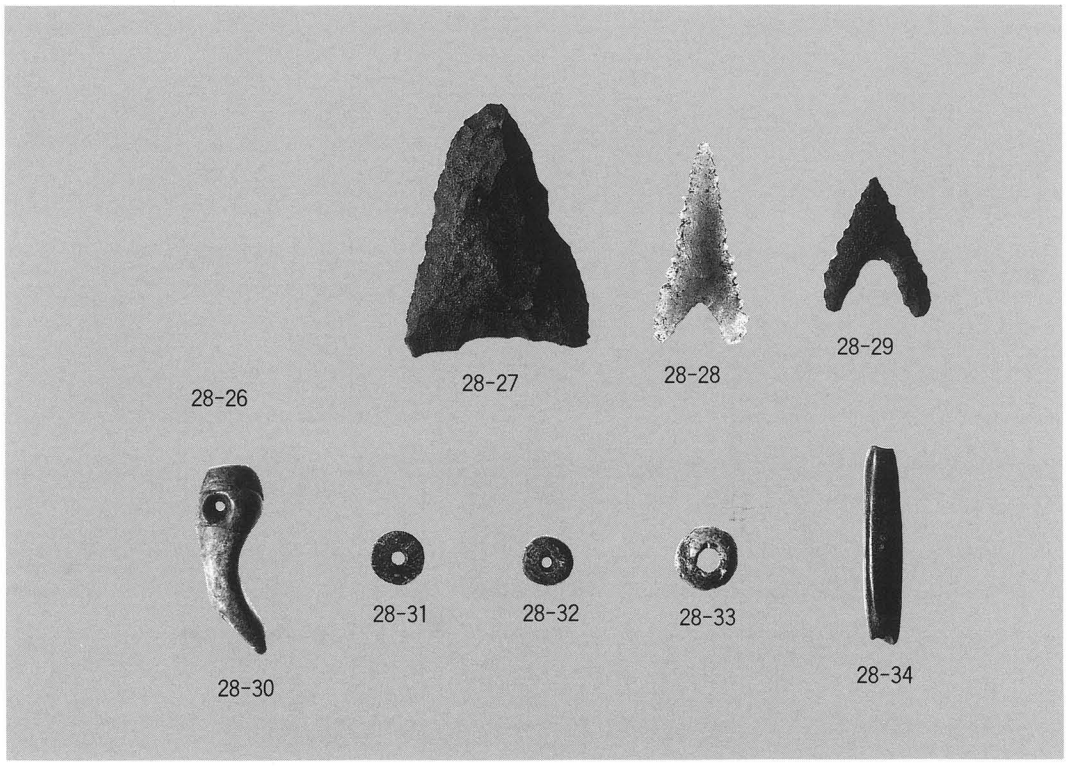

25-9
26-10
26-11
26-12
26-13
26-14
26-15

2．石　器(2)

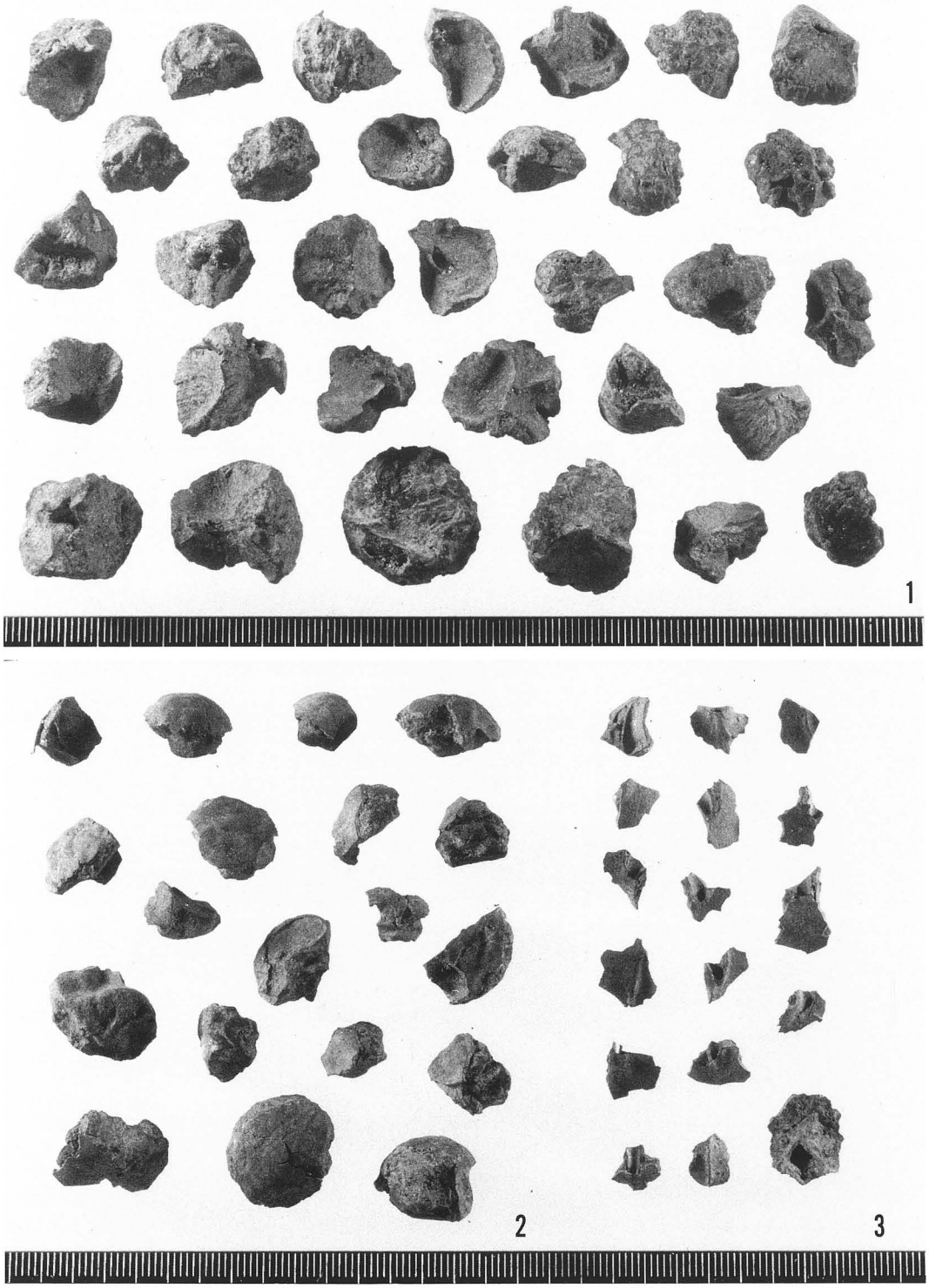
図版18



1．石　器(3)



2．その他の石器



1．種皮無しの種子　2．種皮付きの種子　3．発芽孔のある種皮片

第2部　イ　セ　遺　跡

C2区第4層の発掘

挿　図　目　次

第１図　イセ遺跡と周辺の遺跡 …… 79
第２図　調査区の配置 …… 81
第３図　C1～C3区西壁の層位 …… 83
第４図　住居址SB1 …… 84
第５図　第6a層上面検出遺構 …… 85
第６図　住居址SB2 …… 86
第７図　住居址SB3 …… 87
第８図　第6a層上面検出の土坑と集石 …… 88
第９図　第6b層上面検出遺構 …… 89
第10図　第6b層上面検出の集石と土坑 …… 90
第11図　第6c層上面検出遺構 …… 91
第12図　第6c層上面検出の土坑と集石 …… 92
第13図　第7a層上面検出遺構 …… 93
第14図　第7a層上面検出の土坑(1) …… 94
第15図　第7a層上面検出の土坑(2) …… 95
第16図　第7b層上面検出遺構 …… 97
第17図　第7b層上面検出の土坑(1) …… 98
第18図　第7b層上面検出の土坑(2) …… 99
第19図　第7b層上面検出の土坑(3) …… 100
第20図　第８層上面検出遺構 …… 101
第21図　縄文時代後期の有文土器(1) …… 103
第22図　縄文時代後期の有文土器(2) …… 104
第23図　縄文時代後期の有文土器(3) …… 106
第24図　縄文時代後期の無文土器(1) …… 108
第25図　縄文時代後期の無文土器(2) …… 109
第26図　縄文時代後期の無文土器(3) …… 110

第27図　縄文晩期と弥生前期の土器 …… 114
第28図　紡錘車と土製円盤 …… 115

挿　表　目　次

第１表　縄文後期有文土器口縁部個体数 …… 107
第２表　縄文後期無文土器口縁部個体数 …… 111
第３表　縄文後期土器底部個体数 …… 111
第４表　縄文後期土器の出土層位・遺構 …… 112
第５表　石器・石製品の計測値と出土層位・遺構 …… 116

図　版　目　次

図版１　１．遺跡遠景（北西から）　２．C2区西壁の層位
図版２　１．C2区西半第6a層上面遺構検出状況（南から）
　　２．C2区第6c層上面SK1～４検出状況（南から）
図版３　１．C2区西半第7a層上面検出遺構群（北から）
　　２．C2区第7b層上面遺構検出状況（西から）
　　３．C2区第6b層上面集石１（東から）
図版４　１．C2区第6a層上面SK3　２．C2区第6c層上面SK3
　　３．C2区第6c層上面SK4　４．C2区第6c層上面集石１
　　５．C2区第7a層上面SK2　６．C2区第7a層上面SK3
　　７．C2区第7a層上面SK4　８．C2区第7a層上面SK6
図版５　１．C2区第7a層上面SK7　２．C2区第7a層上面SK8
　　３．C2区第7a層上面SK9　４．C2区第7a層上面SK10
　　５．C2区第7a層上面SK15　６．C2区第7a層上面SK16
　　７．C2区第7a層上面SK18　８．C2区第7a層上面SK19

図版６　１．C2区第7b層上面SK4（東から）

２．C2区第7b層上面SK6（南から）

３．C2区第7b層上面SK7（南東から）

４．SK7底面検出遺構（北西から）

５．C2区第８層上面SK1～3（南から）

６．C2区北西部第８層礫群（東から）

７．C2区第7b層上面SK3内土器出土状況

８．C2区第7b層骨粉出土状況

図版７　１．C2区SB3（東から）　２．C2区SB1（南から）

３．A4区完掘状況（北から）

図版８　１．石鏃（１～13）・楔形石器（14・15）・石錐（16）・石核（17）

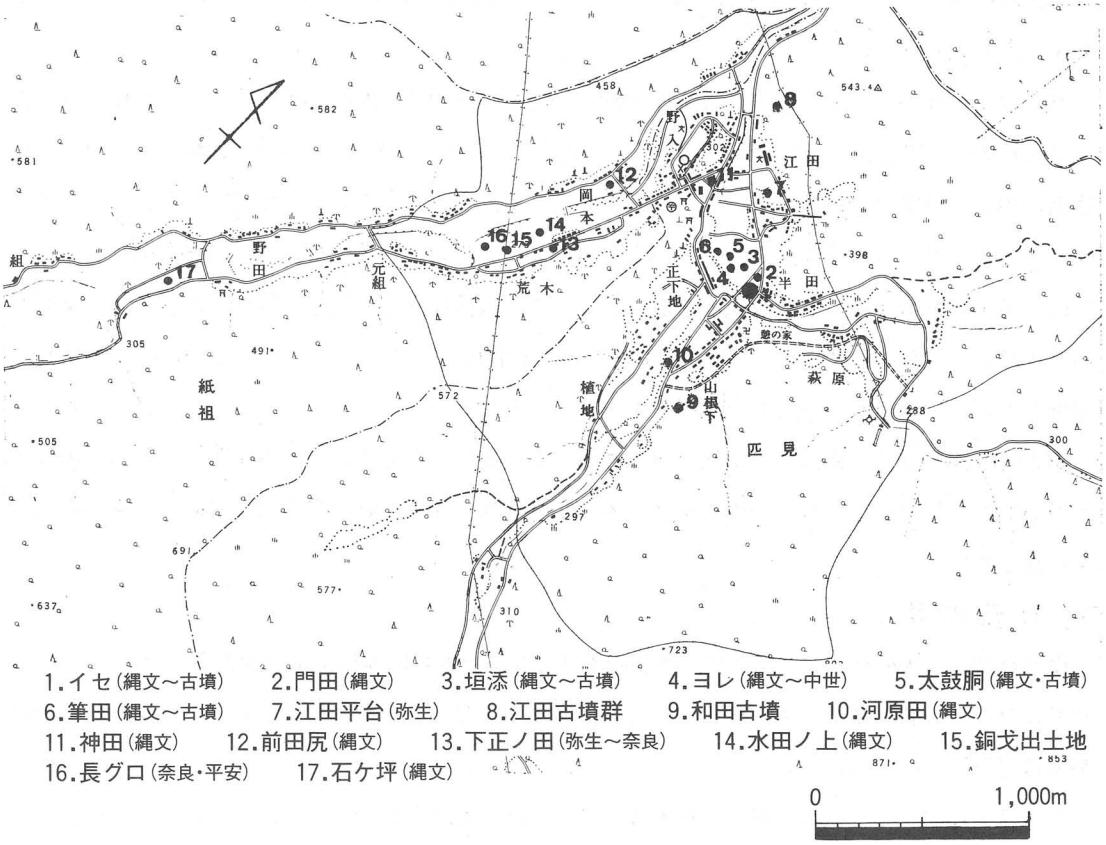
２．磨製石斧（１～４）・打製石斧（５）・石錘（６）・敲石（７）・石棒（８）・土製品（９～11）

第１章　遺跡の位置と環境

イセ遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字匹見（イ276・イ275－3）字半田に所在する。遺跡は匹見川と広見川の合流地点に形成された匹見川右岸の河岸段丘上の川岸に接する地点に立地している（第１図）。遺跡の立地する段丘の比高差は約6.5mで，遺跡の標高は約265mである。

匹見川とその支流によって形成された河岸段丘上には，並木式を大量に出土した石ケ坪遺跡［渡辺1990］，大規模環状集石遺構が発見された水田ノ上遺跡［渡辺1991］，鳥形土製品が出土したヨレ遺跡といった大規模な縄文遺跡が集中している。北白川上層式後半から元住吉山１式に併行する時期を除き，縄文時代後晩期の遺跡はほぼ間断なく発見されている。弥生時代や古墳時代の遺跡もほぼ全期間を通じて発見されており，小規模な群集墳も散在する。

なお，イセ遺跡は，「半田イセ遺跡」［足立1987］（第２図の西田邸の敷地内），「半田遺跡イセ地区」［松本ほか1987，松本1992］として紹介されているが，本報告では分布調査報告［渡辺1991］の方針に従い，小字名をとり，「イセ遺跡」と呼称する。　　（矢野健一）



第１図　イセ遺跡と周辺の遺跡

第2章　調 査 の 概 要

1．調査の経緯と調査区の設定

イセ遺跡の調査は，1991年4月19日より同年9月4日まで実施した。調査参加者は以下のとおりである。

調　査　員　　矢野健一（京都大学大学院）

調査補助員　　櫛部正典，鈴木康二，三沢繁忠，中村　豊（以上立命館大学学生），
魚津知克（京都大学学生），大谷文子，籾田悦子

作　業　員　　森　　清，森脇雅夫，三島忠俊，砂川賢市，山崎リマヨ，山根初子

調査区は，試掘調査時の南北のラインを基準に設定した（第2図）。10m間隔でグリッドを設定し，西から順にA・B・C区とし，各区を北から順にA1・A2・A3区というように命名した。各区に1m幅の南北のトレンチを設定し，この部分を発掘すると共に，分布調査時に遺物出土量の多かったDトレンチ（第2図の90D）を含むC2区を全面的に発掘した。A2・B2・C2区以外では遺物包含層が比較的薄かったが，A5区では匹見川に向かって落ちる遺物包含層が検出されたため，この部分を拡張して発掘した。

当初は1m幅のトレンチ調査とA5区の調査が先行し，C2区の調査にはいったのは5月2日である。6月30日に現地説明会を開催したが，この時点で第7a層上面検出の土坑群の調査途中であった。遺構の累積と作業員の減少によって調査は難航し，C2区については，北東部分を除き，最終遺構面である第8層上面の遺構を確認して調査を打ち切った。なお，C2区北東部分とA1・B1区については，第4層・第6層上面で住居址を検出しており，遺構部分を発掘した後は，拡張せず，下層を掘り下げることはしなかった。C2区第8層上面の遺構についても，平面を図化したにとどまり，完掘していない。なお，調査区全域が盛土保存されている。

調査時に指導委員である河瀬正利，田中義昭，中村友博の各先生に御指導を賜った他，家根祥多が指導した。足立克己，松本岩雄，平井　勝，山本悦世，千葉　豊の各氏より御教示を賜ったことを感謝します。

2．整 理 作 業

整理作業は，1991年12月初旬まで，遺物の水洗と注記を匹見町埋蔵文化財調査室で行っていたが，12月18日より，和田晴悟先生の御協力のもと，家根と矢野が立命館大学にて行った。整理作業の参加者は以下のとおりである。

水洗・注記　　牧野　博，小竹志織，沢井美野，渡辺牧子，帆足俊文（以上立命館大学学生）

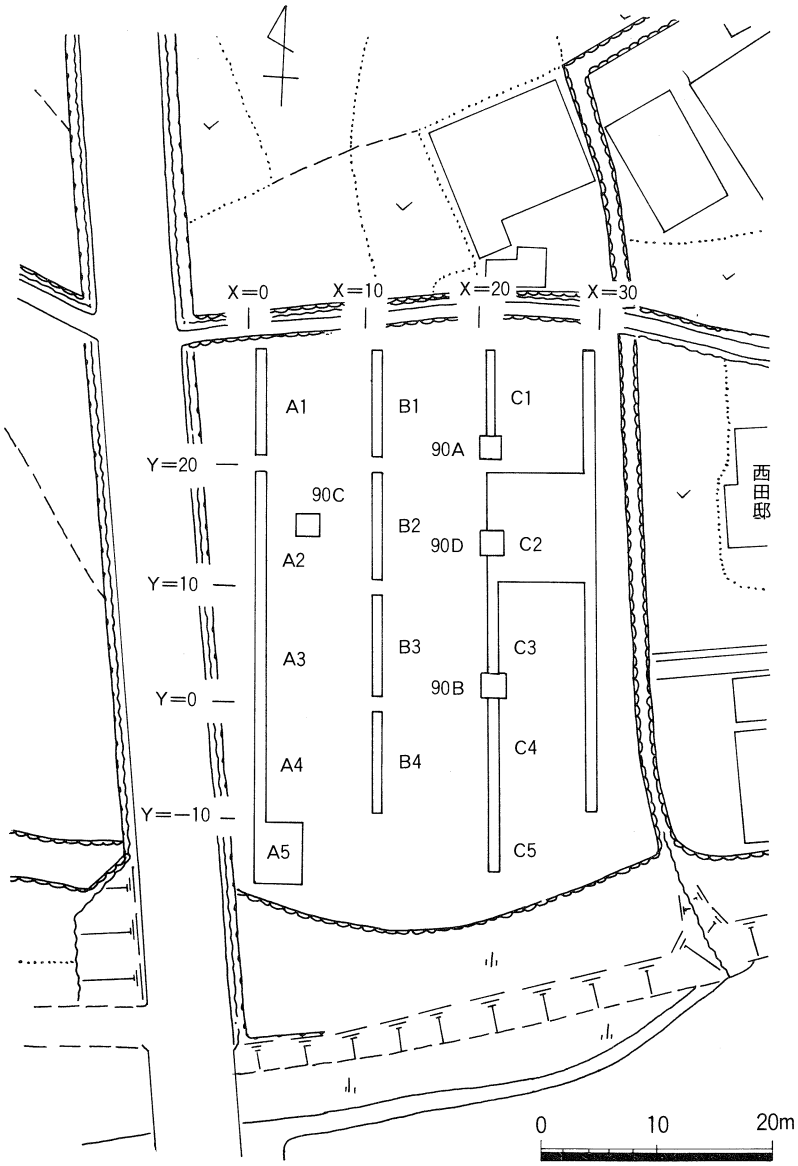
遺物の実測　　櫛部，中野　充，新開義夫，中村，田畑直彦（以上立命館大学学生），

富井　眞，大石崇史（以上京都大学学生），矢野

トレース　　大石，矢野

写真撮影　　矢野

なお，水洗・注記と接合作業は全調査区の遺物について完了した。層，遺構別の出土遺物の詳細についての台帳作成はC2区についてのみ完了している。また，C2区の縄文土器と石器については遺物の詳細についてのカードを作成した。土器については矢野が行い，石器については遠藤陽子



※90A～Dは分布調査時のトレンチ

第２図　調査区の配置

（京都大学聴講生）が行った。

整理作業の進行と報告書の紙数の関係から出土遺物の豊富なC2区についての報告となる。これも概要にとどまっており，他の調査区とC2区の詳細については，別途報告する必要がある。報告の執筆・編集は家根の指導のもと，矢野があたった。なお，整理時に山中一郎，森本　晋，千葉豊，西脇対名夫，大下　明，大賀克彦の各先生，各氏より御教示を賜ったことを感謝します。

（矢野健一）

第3章　層　　位

C1～3区の西壁の層位について述べる（第3図）。現地表面は，C1区は約246.9m，C4区は約246.7mとなり，北から南に向かってわずかに傾斜している。しかし，第4層以下はC2区南半が最も低くなり，そこから北と南に向かってゆるやかに高くなる。C4区では表土を除去したら，第9層の河床礫が現れる状況であり，この様相はA4・B4区でも同様である（写真図版7(3)）。東西の傾斜はほとんどないが，現地表面および各層は南西方向に向かって低くなっている。また，A5区で川に向かって傾斜する遺物包含層を確認しているが，他の区でも同様であるとみなしてよいだろう。なお，層位名は分布調査報告［渡辺1991］に準ずるが，一部変更した部分がある。

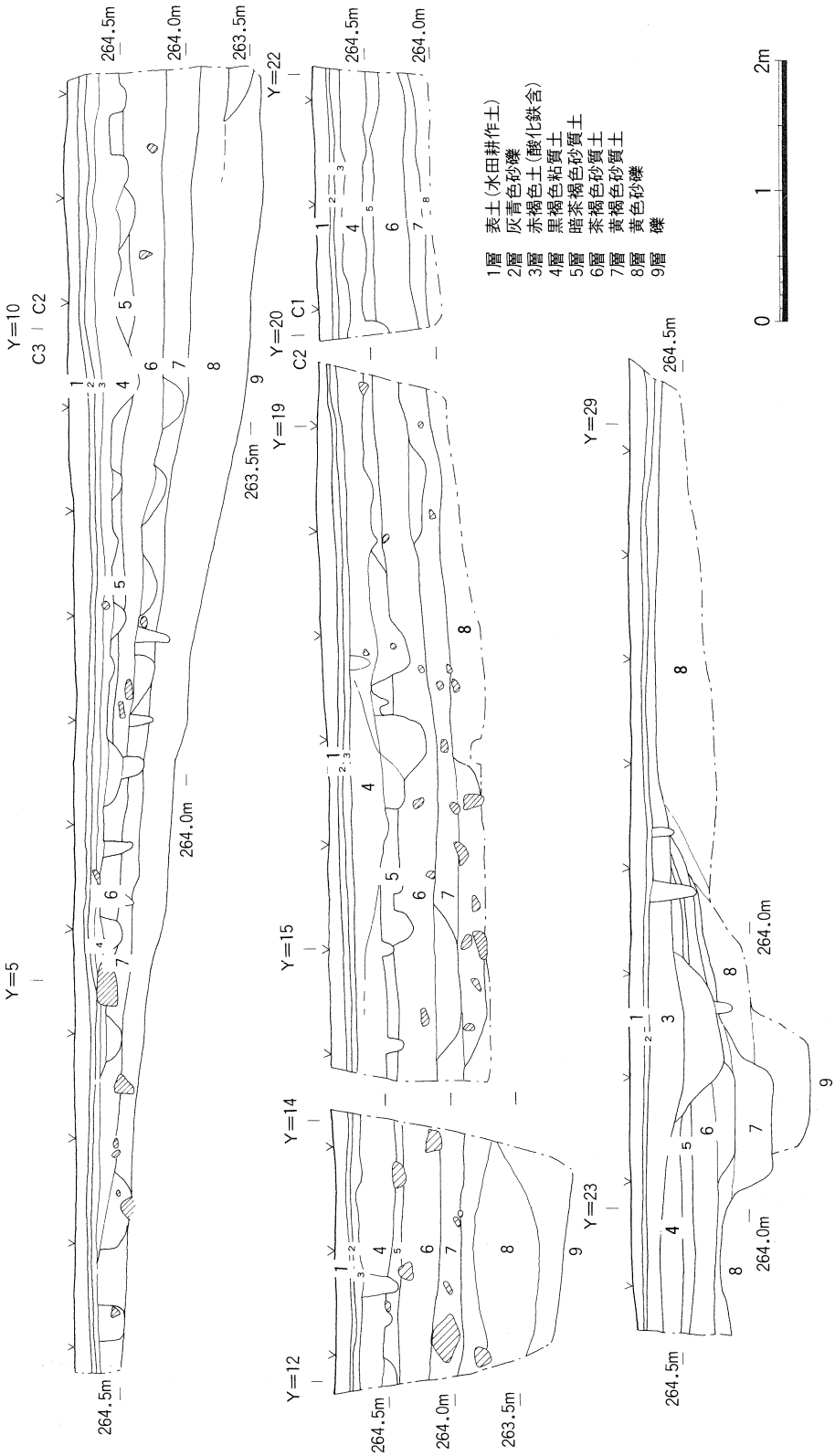
第1層は，表土（水田耕作土）で，第2層は水田造成時に敷かれた砂礫層である。第3層は土層に酸化鉄が付着し，層位や遺構の認定が困難であったため，一括して便宜的に設定した層である。

第4層（黒褐色粘質土）は，C2区西壁中央で2層に区分できる部分がある。遺構の可能性があるが，平面では把握できなかった。第5層（暗茶褐色砂質土）は第4層に比べて粒子が粗くなる。一部第6層との境界が不明瞭な部分があるが，第4層とは区別が明瞭である。第6層（茶褐色砂質土）と第7層についても区分が困難な部分があるが，色調の他に粒子が粗くなるという相違がある。

第4層から第7層はC2区南半で最も深くなるものの，土層の傾斜は比較的ゆるやかである。第8層（黄色砂礫）になると，この傾斜がかなりきつくなる。砂礫の特徴によって部分的に細分可能であり，C2区南半では，径10㎜程度の小礫が集中しているレンズ状の堆積がある。このような礫の部分的な堆積はC1区中央でも認められた。第9層は人頭大の礫層で，50㎝程度深掘した部分があるが，かなり厚いようである。

第4層は土師器・弥生土器・縄文晩期の土器の細片が出土する。須恵器は第1層からわずかに出土したものの，第4層からは出土しなかった。第6層以下は縄文後期の土器のみが出土し，第8層は上部で縄文後期土器の細片を出土したものの，下部からは遺物の出土はなく，第9層上面も同様である。

（矢野健一）



第3図　Ｃ１～Ｃ３区西壁の層位

第4章　遺　　構

1．概　　要

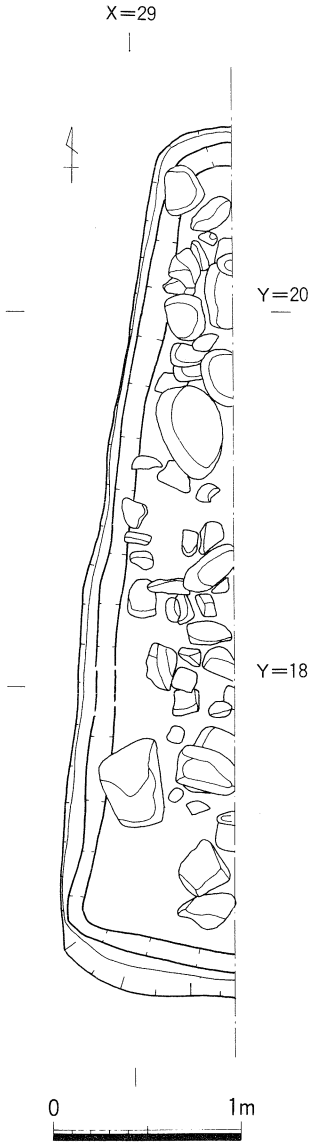
C2区で検出した遺構は以下のとおりである。第4層上面では古墳時代のものと推定される住居址1棟を検出した（第4図，写真図版7(2)）。1辺約4.6mの方形で，幅15cm程度の浅い周溝を床面で検出した。中央部には，20～50cm大の礫を大量に遺棄している。出土遺物は，土師器の小片が10点の他には，縄文後・晩期の土器片が数点あるのみである。埋土は第4層よりわずかに黒色味の強い黒褐色土である。第6層上面で検出した土坑SK18・19も同じ埋土であり，同時期のものであろう。第4層上面では，他にクイの穴と考えられる径10～20cmの小土坑を多数検出したが，ほとんどは埋土に第2層と同質の灰青色土を混じており，稀に陶磁器片を出土する。規則的な配列は全く認められないが，Y＝15のラインより北半に多い。このことは他のトレンチでも同様である。

第6層と第7層中には，それぞれ遺構が累積しており，それらの埋土は原則として同一層では変化がないため，a・b・cと10cmの厚みで人工層位を設定し，それぞれを検出面とした。

第6a層上面では，住居址2棟・土坑22基・集石3基・小土坑多数を検出した。住居址は1棟が弥生時代前期，1棟が縄文時代晩期ないし弥生時代前期のものと考えられる。土坑は前述の古墳時代のものが2基，弥生時代のものが3基，他は時期決定の決め手に欠ける。小土坑は，弥生土器ないし土師器を出土したものが3基あり，他は時期決定の決め手に欠ける。第6b層上面では，縄文時代後期の土坑6基・集石1基・小土坑多数を検出した。第6c層上面では，縄文時代後期の土坑8基・集石1基・小土坑5基を検出した。

第7a層上面では，縄文時代後期の土坑23基・小土坑9基を検出した。第7b層上面では縄文時代後期の土坑7基を検出した。

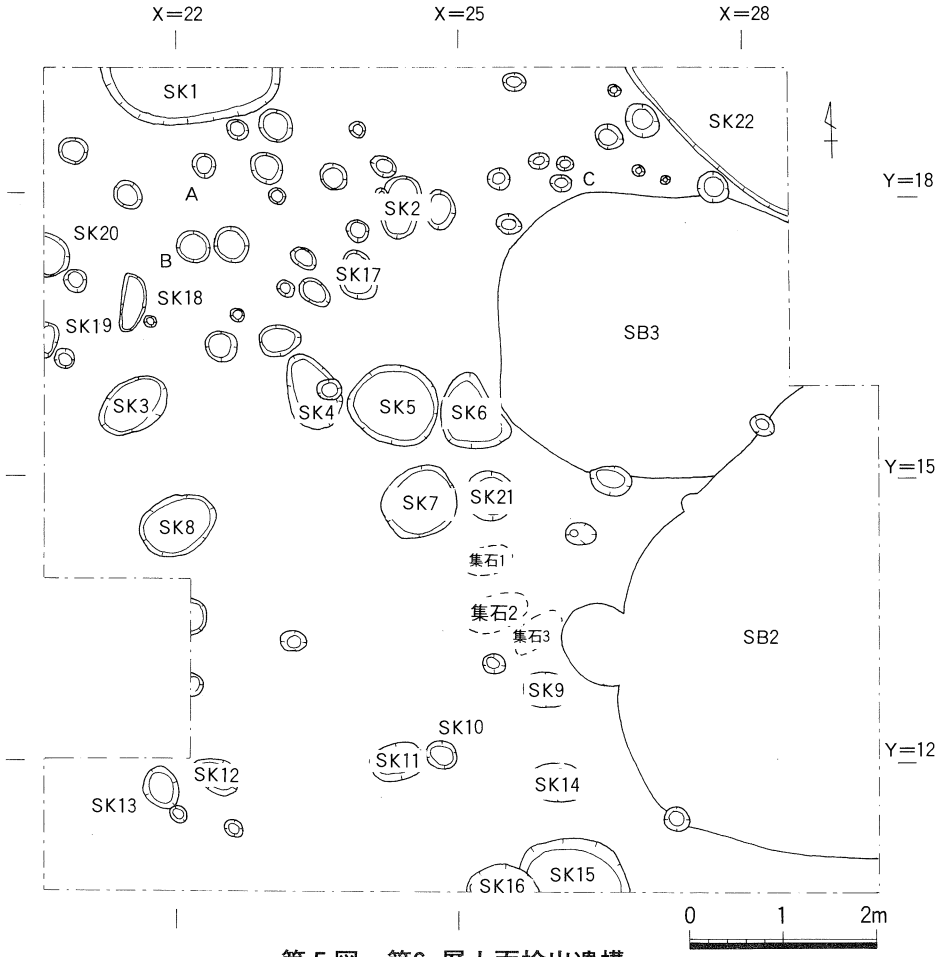
第8層上面では，礫を大量に伴う縄文時代後期の土坑8基を検出しているが，完掘していない。遺構ではない可能性も指摘されたが，調査者は遺構であると推定している。



第4図　住居址SB1

２．第6a層上面検出遺構

C2区第6a層上面で検出した遺構の配置は第５図のとおりである。このうち，土坑SK18・19は埋土より古墳時代のものと推定している。土坑は，20～30cm大の礫を伴うものがSK1～８・10・11・15で，SK1から弥生前期の土器がまとまって出土している他，SK6・22からも弥生土器の小片が出土している。他は縄文後期の土器片がわずかに出土する程度で，時期決定の決め手を欠く。下部検出の土坑に比べて，礫の集中部が土坑底面と接する傾向があり，しかも小形のものが多く，遺物の出土量も極めて少ないといった差がある。いずれも縄文晩期ないし弥生時代に下がる可能性がある。小土坑は，Ａ・Ｂ・Ｃの３基より弥生土器片ないし土師器片を出土しており，埋土から判断すれば古墳時代のものとは異なる。他の小土坑も，同じく縄文晩期ないし弥生時代のものである可能性が高いと考えている。なお，小土坑はいずれも深さ20cm程度で，下部検出のものよりも分布域が北半に集中する傾向があるが，配置に規則性はない。



第５図　第6a層上面検出遺構

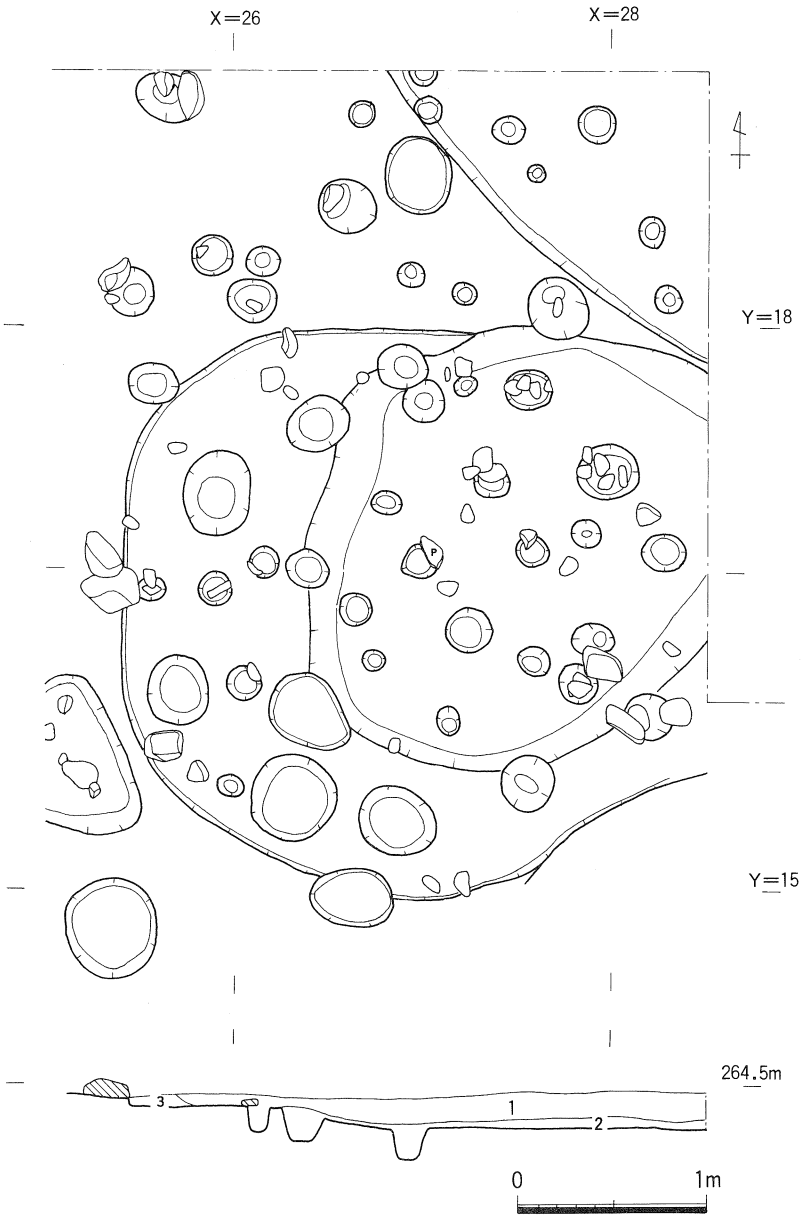
住居址SB2　住居址SB2（第６図）は，西辺で土坑と切り合っており，北半でも別の土坑と切り合っている。ただし，後者の切り合いは床面で判明した。中央付近に10～50cm大の礫が集中する傾向がある。この礫は埋土中に包含されており，人為的に遺棄したものではない。特に南辺付近では住居址埋土と包含層との識別が困難であり，南辺は１ｍ程度北に寄る可能性を否定できない。礫の集中部もこの付近までに限定され，出土遺物も南辺部は縄文後期のものが多い。したがって，住居址本来の輪郭は北東方向に軸が傾いた１辺４ｍ以上の隅丸方形であったと推定している。

住居址の埋土は，第１層（暗褐色土）と第２層（暗黄褐色土）に分層できる。中央部に炉址と考えられる焼土と土坑を検出した。

出土遺物には，弥生前期土器片30点，縄文晩期中山Ｂ式３点，凸帯文土器１点の他，縄文後期の土器片と，石鏃３点，磨製石斧１点，打製石斧１点がある。いずれも埋土中に包含されており，床面に遺棄されたものはないが，住居址の時期は，弥生前期と判断している。

第６図　住居址SB2

住居址SB3　住居址SB3（第７図，写真図版７(1)）の埋土上層を剝ぎ，西辺部で床面に達した時点で，中央部に土坑の切り合いを検出した。断面の層位観察から，この土坑は住居址SB3廃絶後に堀り込まれたものと判断した。この土坑は，径３ｍ程度の小さな別の住居址とも考えられる。ただし，断面観察からの推定は微妙であり，本来，段をもつ住居址であった可能性が全く否定できるわけではない。住居址SB3に伴う炉址は検出されなかったが，これは廃絶後の土坑の堀り込みによって破壊されたためであるとも考えられる。ただし，住居址SB3は，本来長径３ｍ強の小さな隅丸方形あるいは楕円形であり，炉址がなくとも不自然ではない。



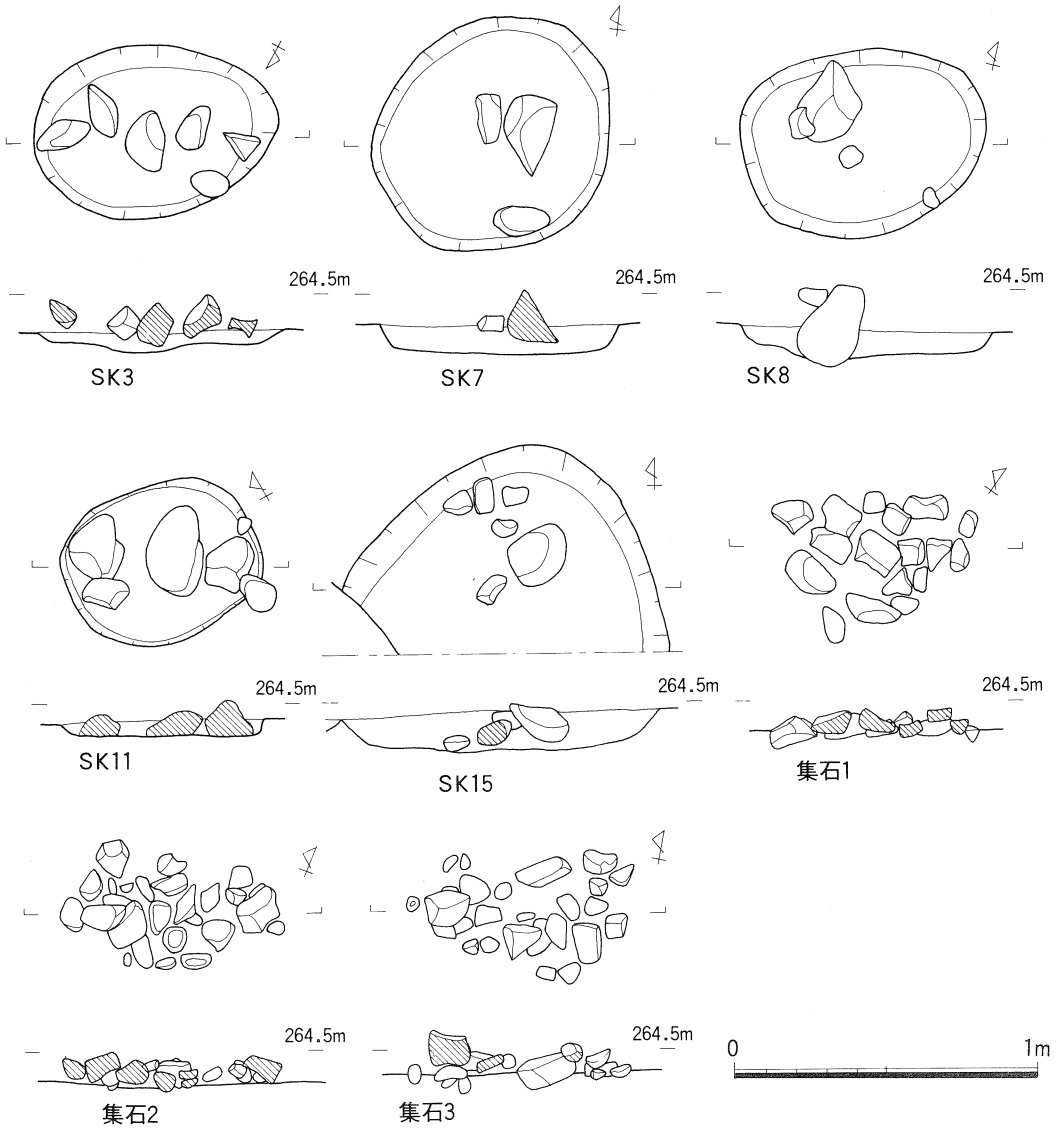
第７図　住居址SB3

埋土は，後で堀り込まれた土坑の第１層（暗褐色土）と第２層（暗黄褐色土），および本来の埋土と判断した第３層（暗黄茶褐色土）に分層できる。柱穴は本来の住居址に伴うものか否か，埋土からの判断は困難であった。一部に10～20cm大の礫を埋めている柱穴がみられる。

出土遺物には，弥生前期土器片10点，縄文晩期中山Ｂ式24点，以外の凸帯文土器３点の他，縄文後期の土器片と，石鏃１点，敲石３点がある。破片が大きく，残りのよい土器片は中山Ｂ式に限られ，多くは廃絶後の土坑中から出土している。

土坑と集石　第８図に図示した土坑と集石は，いずれも縄文後期の土器片をごくわずかに出土するのみで，時期決定の決め手を欠く。土坑SK3（写真図版４(1)）・11は長軸方向に礫を配列しており，土坑SK7・８・15は中央部からやや偏った位置に数個の礫を配置している。なお，図示していないが，弥生前期の土器をまとまって出土した土坑SK1にも礫の集中部がある。

集石１～３の下面には，土坑は検出されなかった。第6b層以下の集石と比べて，10～20cm大の小さな礫だけから構成されている点が異なる。集石に伴う遺物はないが，多くの礫に擦った痕跡が残っている。ただし，定型的な磨石は含まれない。

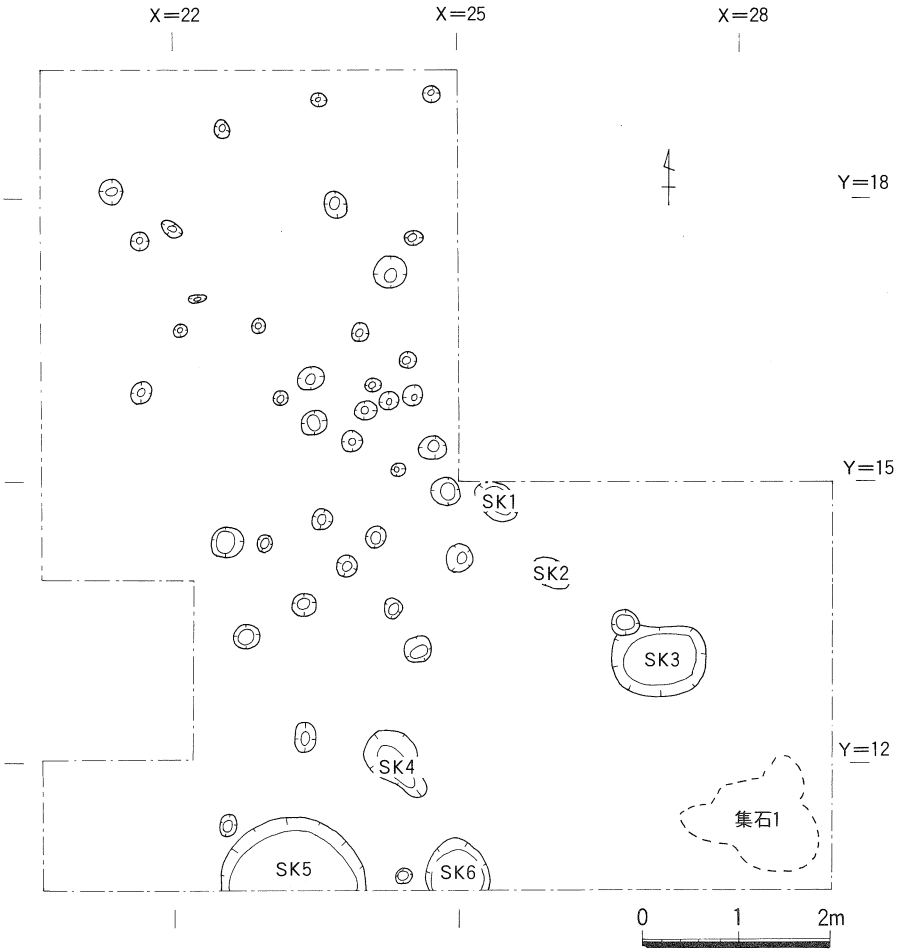


第８図　第6a層上面検出の土坑と集石

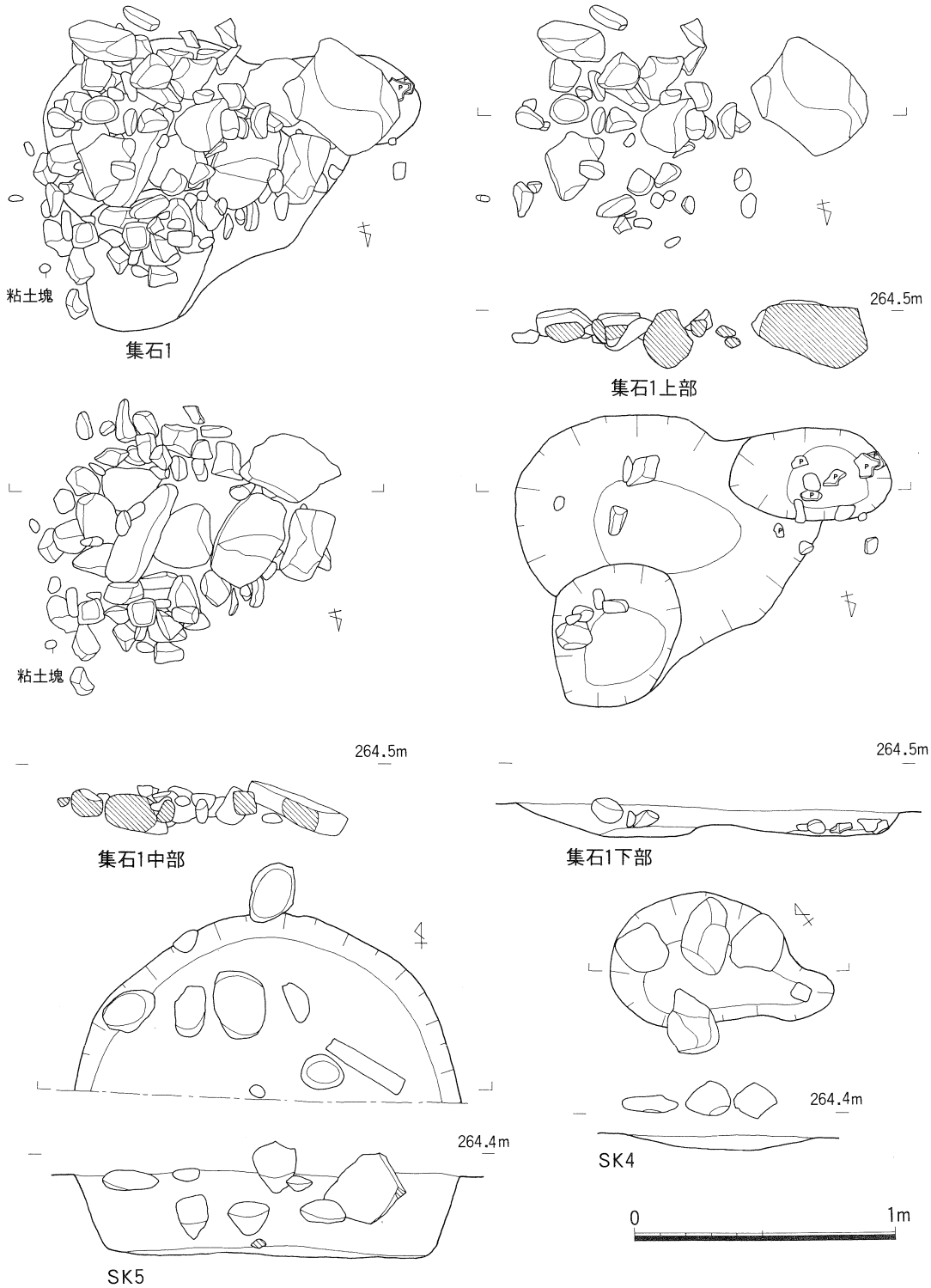
３．第6b層上面検出遺構

C2区第6b層上面で検出した遺構の配置は第９図のとおりで，主な遺構を第10図に図示している。小土坑からは遺物はほとんど出土しない。他の遺構からは縄文後期の無文土器片が出土している。小土坑とは分布域が異なり，小土坑も含めて縄文後期に限定できると考えている。

集石１（写真図版３(3)）は下部に土坑があり，一部に土器片が集中するが，完形にはならない小片である。３基の土坑は一連のものとみてよいだろうが，北辺の土坑は集石中部の20～30cm大の礫集中部と対応しており，中央部の大形の礫は一部この上に重なる。上部の礫は，中央部の大形の礫の上に散在している。土坑SK5は，第6c層上面の集石１（第12図）と切り合っている。縄文後期の無文土器片がまとまって出土したが，いずれも小片で完形にはならない。土坑SK4と同様土坑に伴う礫の大きさが30cm大のものに限られる。なお，土坑SK1～３・６からは，まとまった形で礫は出土していない。



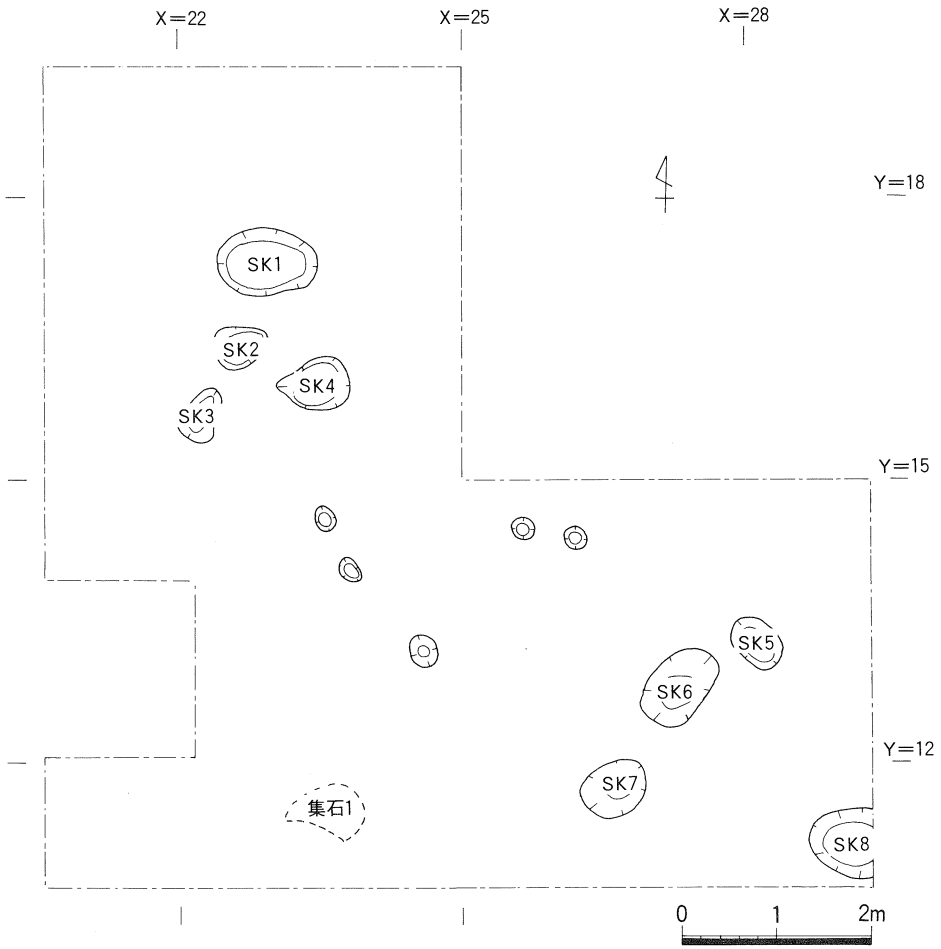
第９図　第6b層上面検出遺構



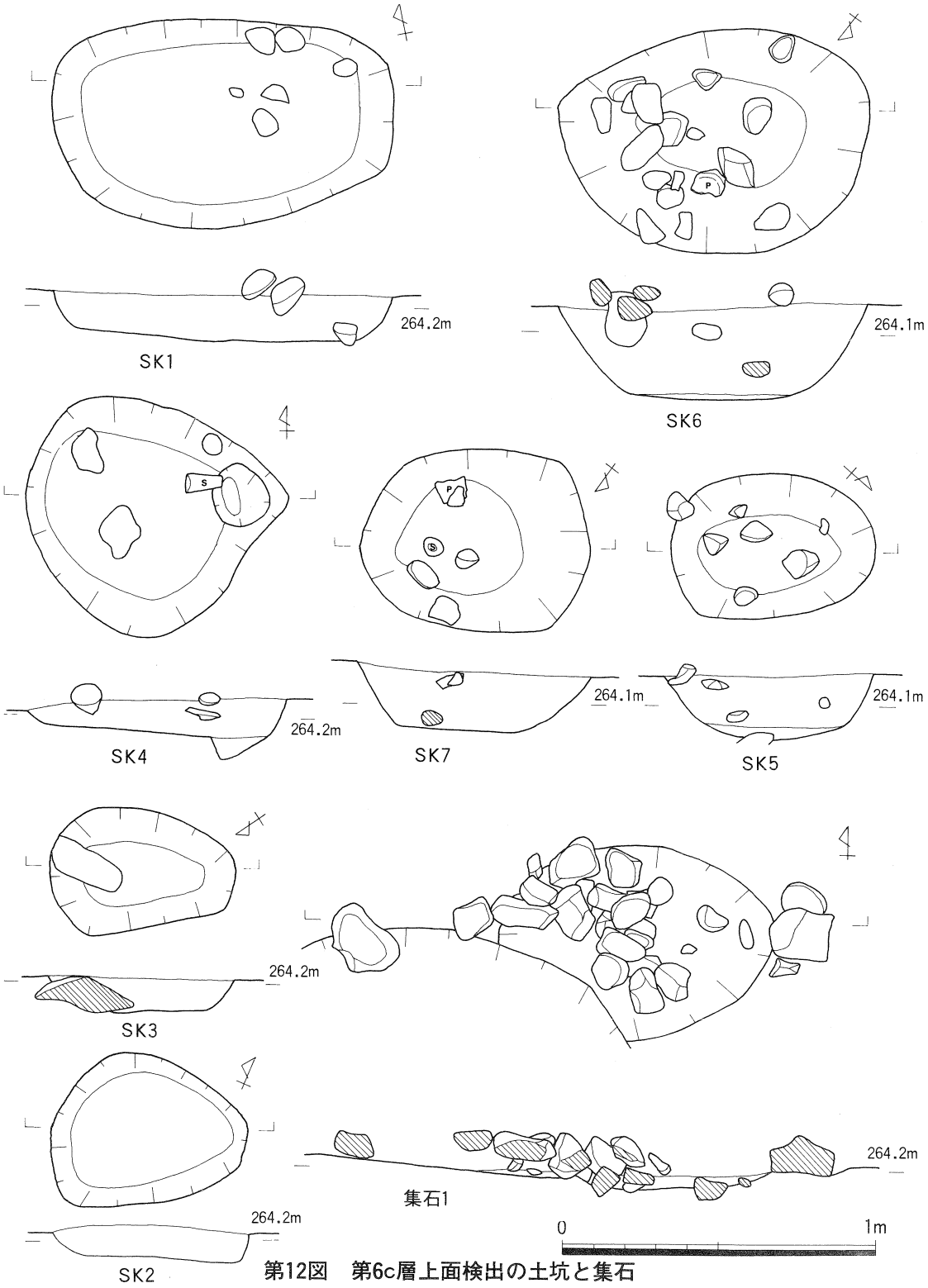
第10図　第6b層上面検出の集石と土坑

４．第6c層上面検出遺構

C2区第6c層上面で検出した遺構の配置は第11図のとおりで，主な遺構を第12図に図示している。土坑は，第7a層上面検出のものとは分布域に差があり，重複はしていない。このため，第6c層上面検出の土坑の時期は，第7a層上面検出の土坑の時期から大きく下がらず，しかもその位置を概ね把握していた者によって堀り込まれていると考えられる。第7a層上面で検出した土坑に比べて，礫の量は少なく，土坑の上部に集中する傾向がある。いずれも出土遺物は少なく，土器は縄文後期の土器片に限られる。土坑SK4（写真図版４(3)）からは，破損した敲打製の石斧が出土している。土坑SK3（写真図版４(2)）からは，土坑の縁辺に長さ30cmほどの細長い礫が出土した。立石の可能性も考えられる。集石１（写真図版４(4)）は，一部を上面からの土坑で破壊されている。集石下部に皿状の窪みがある。集石を構成する礫は径20cm大にまとまる傾向がある。小土坑からはほとんど遺物が出土しておらず，配列にも規則性はないが，分布はまとまる。



第11図　第6c層上面検出遺構

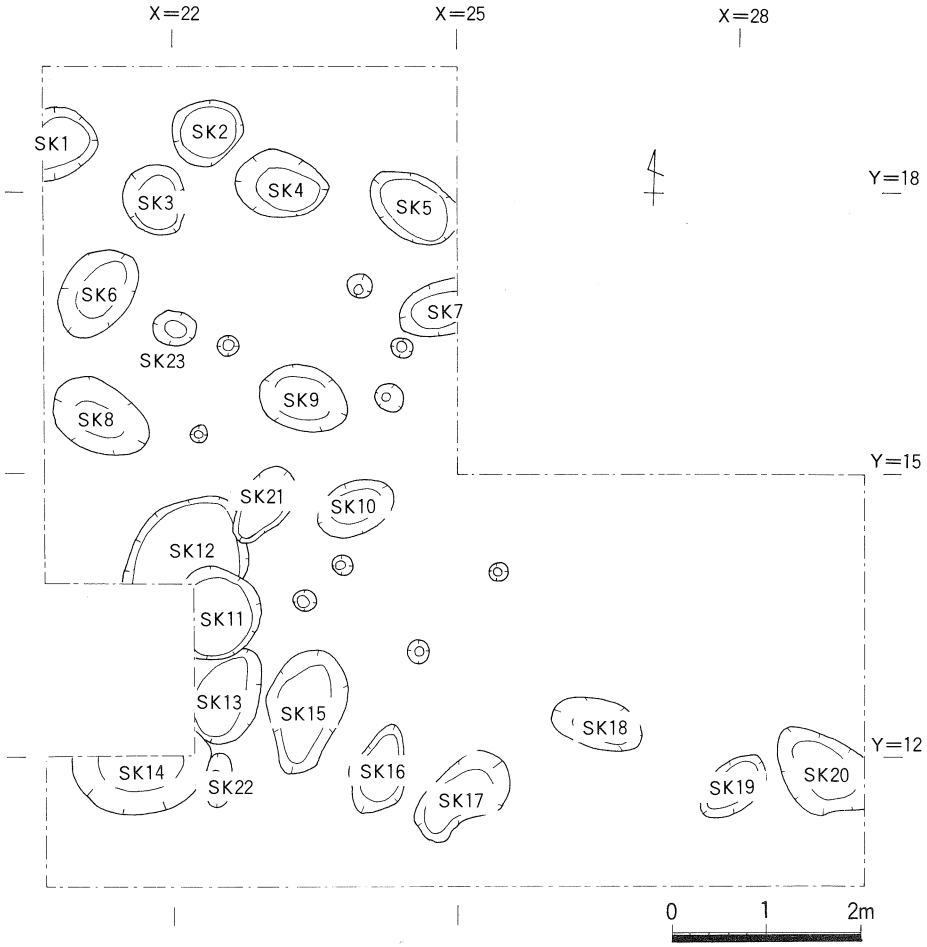


第12図　第6c層上面検出の土坑と集石

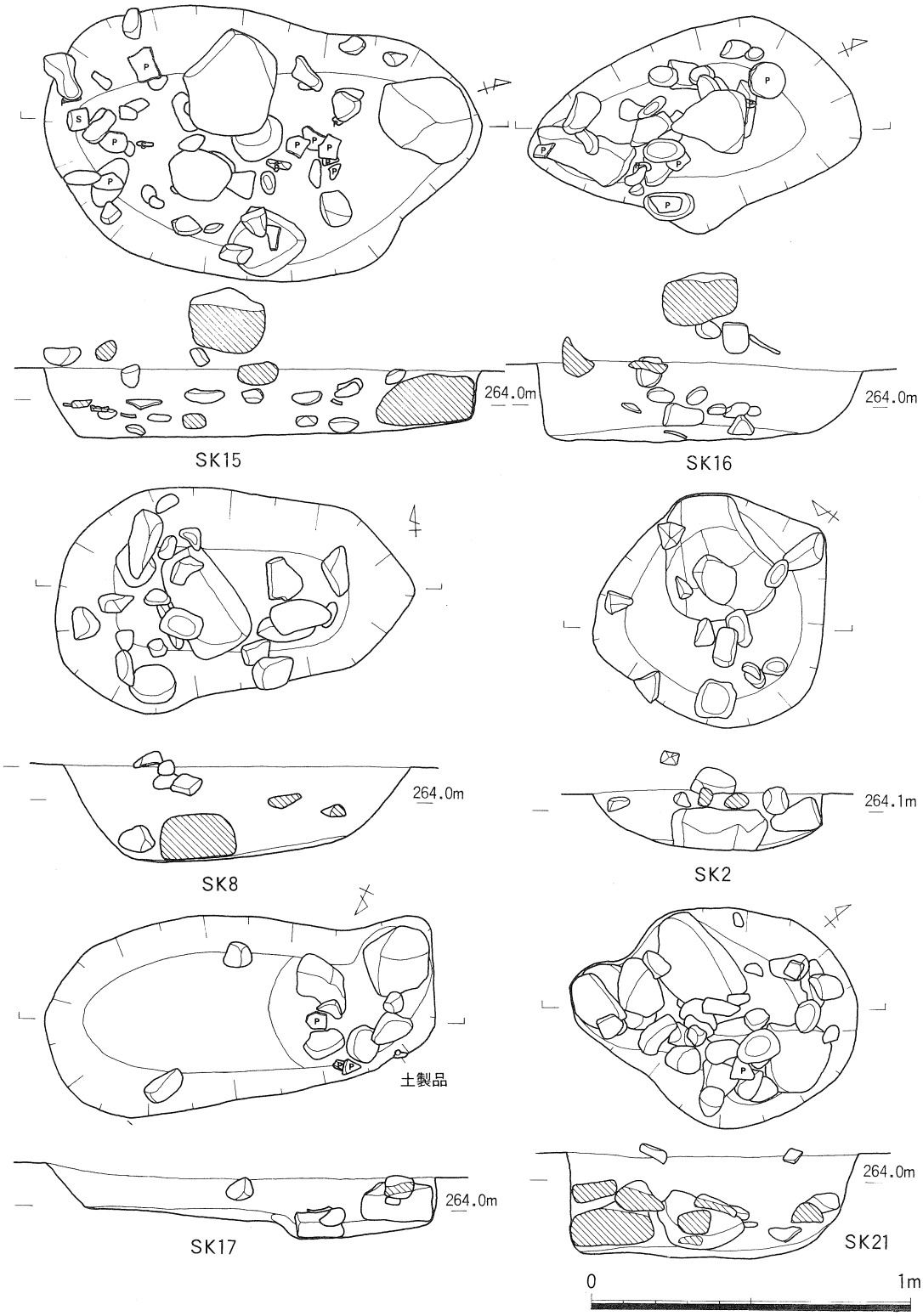
５．第7a層上面検出遺構

C2区第7a層上面で検出した遺構の配置は第13図に示すとおりで，主な遺構を第14・15図に図示している。遺構は多数の礫を伴う土坑と小土坑に限られ，土坑を伴わない集石は検出されていない。土坑からは多量の縄文後期の土器片が出土する。ただし，いずれも比較的大きな破片を含むものの，接合して完形になるわけではなく，多数の個体の破片である。包含層よりも土器片の出土する密度が高いことは明かであるものの，大きさや遺存状況に差があるわけではなく，一部には包含層出土の土器片と接合する場合がある。ただし，埋土は明らかに第7a層とは異なり，また，第7a層中に礫は散在するものの，土坑のように集中せず，遺構の認定は比較的容易であった。礫の出土状況と土坑の大きさから４類に分類し，以下，類別に記述する。

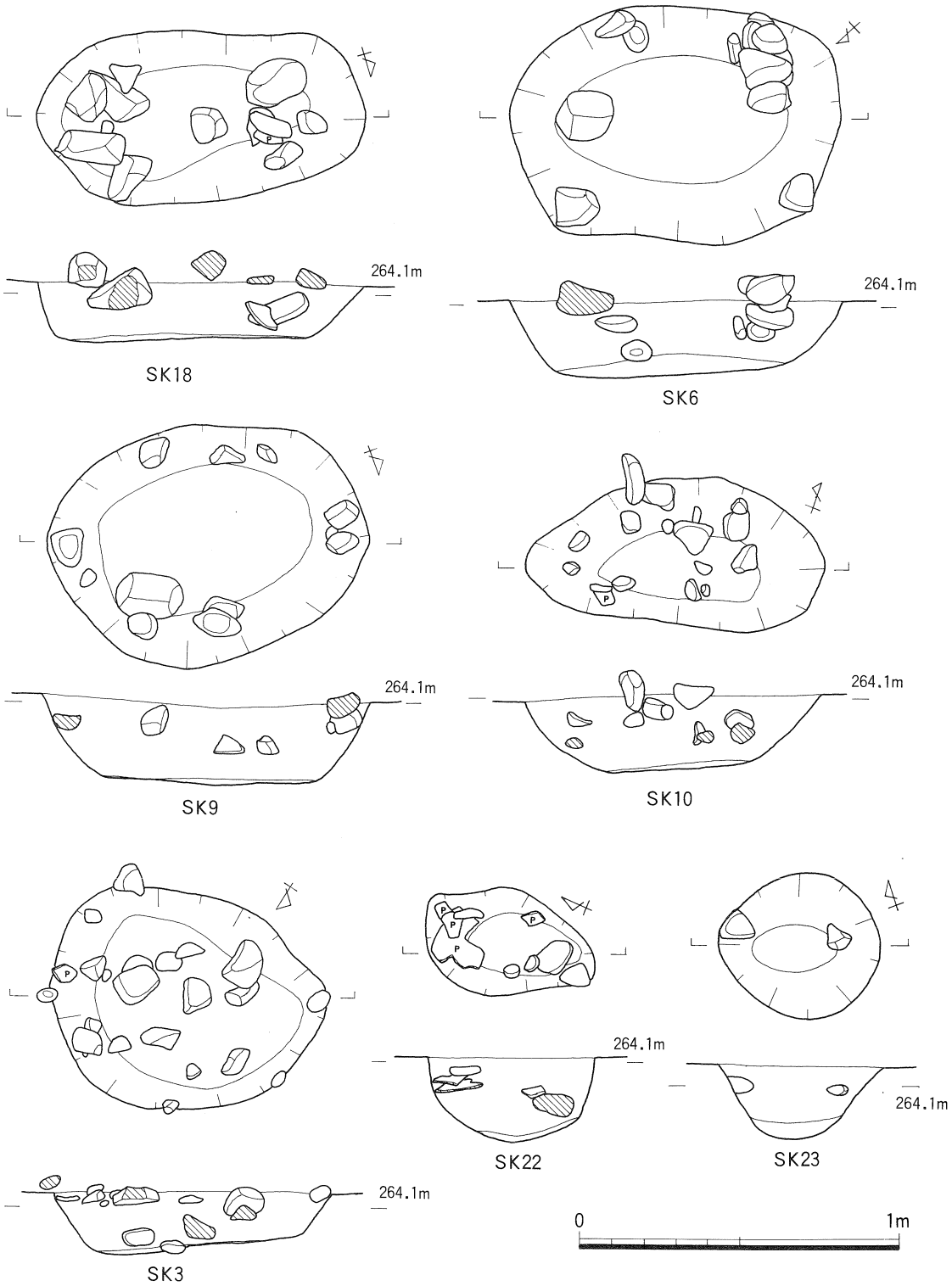
第１類…土坑上面に大形の礫を配するもの。土坑SK15（写真図版５(5)）・16（写真図版５(6)）が該当する。いずれも土坑底面にも大形の礫が配されており，この点第２類と同様である。土坑



第13図　第7a層上面検出遺構



第14図　第7a層上面検出の土坑(1)



第15図　第7a層上面検出の土坑(2)

SK15・16とも，10cm大の礫を大量に含む。これらは埋土中に散在し，一部に集中するわけではない。しかし，包含層中には，礫がこのように多量に出土するわけではないので，土坑に本来伴うものと判断できる。土器片はこのような礫に混じて出土しており，部分的に集中するわけではない。なお，土坑SK15からはスクレイパーと破損した敲打製の石斧が１点ずつ出土している。また，土坑SK17からは土製品の破片（写真図版８(2)の９）が出土している。

第２類…上面に大形の礫を配さず，土坑底面に大形の礫を配するもの。土坑SK2（写真図版４(5)）・８（写真図版５(2)）は，底面の大形の礫が１個で，この点，第１類と同様である。土坑SK17は土坑底面が一段深く堀り込まれており，その部分に礫が集中する。土坑SK21は，土坑底面に大形の礫が密に配されており，土器片の出土数が少ない。土器片や小礫の出土状況は，土坑SK21を除くと大きな差はない。なお，土坑SK2から敲石が１点出土している。

第３類…特に大形の礫をもたないもの。図示している土坑SK3（写真図版４(6)）・６（写真図版４(8)）・９（写真図版５(3)）・10（写真図版５(4)）・18（写真図版５(7)）の他に，土坑SK1・４（写真図版４(7)）・５・７（写真図版５(1)）・11～14・19（写真図版５(8)）・20が該当する。礫は埋土の上層に集中する傾向があり，この点第6c層上面検出の土坑と同様である。なお，土坑SK10からは切目石錘が１点出土している。

第４類…径50cm以下の小さな土坑。土坑SK22・23が該当する。土坑SK22からはやや大きな土器片が出土しているが，完形になるまで接合するわけではなく，破片のまま埋められているものと考えられる。

以上の第１～４類の土坑は，土器片の出土量が礫の出土量に必ずしも対応するわけではなく，土坑SK21は土器片の量は少ないものの礫が集中し，土坑SK22は礫は少なく比較的大形の土器片がまとまって出土するといった様相を指摘できる。したがって，径10cm程度の小礫を含めて，礫や土器片は土坑を埋める際，意図的に準備されたものと考えたい。第１類は１m前後の楕円形のものに限られるが，第２・３類には１m弱の正円に近いものが含まれる。第１～４類の差やこのような形態の差が，土坑の配置といかに関連しているかについては，明確に把握することができなかった。C2区北東部分は未掘であり，A2・B2区でも同一層位から同様の土坑を部分的に検出している。したがって，土坑の分布域はさらに広がることは確実である。

このような礫を大量に伴う土坑は，縄文後期の西日本に一般的に認められる。すべてを同一の用途とは判断できず，例えば土坑SK21は明らかに異質な用途を推定させるが，他の多くは，土坑の形態や集中して出土する様相から判断すれば，墓以外の用途を想定することは困難であろう。１m前後の楕円形の土坑は，脚部を折り曲げた遺体をそのまま埋葬することも充分可能であり，第１類の上面の大形の礫も墓壙の標石として用いられた可能性を指摘できる。

６．第7b層上面検出遺構

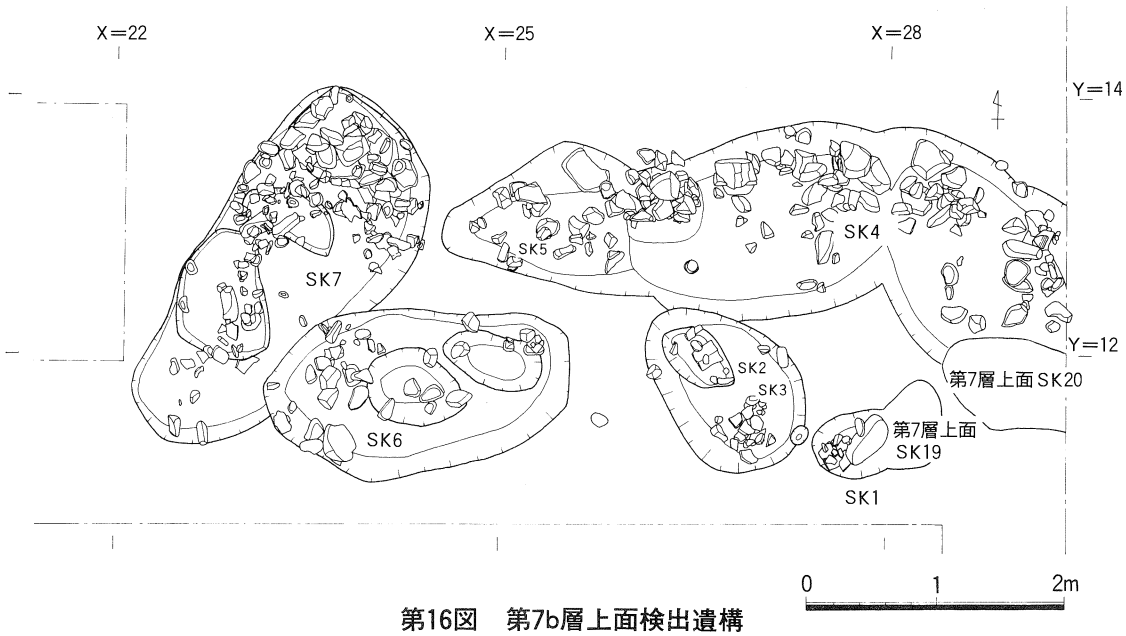
C2区第7b層上面で検出した遺構の配置は第16図に示したとおりで，第17～19図にこれらの遺構を図示している。これらの遺構は，第7a層上面で不明瞭ながら黒色味の強い部分として認識していたが，輪郭を明確に把握するには到らず，10cmの深さまで発掘を進めた時点で，複数の土坑の切り合いとして検出できた。土坑SK4～７はより多くの土坑が切り合っている可能性があるが，仮にそうであるとしても，第7a層上面の土坑と比べると，土坑底面近くに土器片や礫が集中するという点で差がある。以下，個別に記述する。

土坑SK1は，土坑底面近くに大形の礫が配され，埋土中から小礫と比較的大形の縄文後期の土器片が出土している。ただし，この土器片は複数の個体の破片で，完形に接合できるものではない。

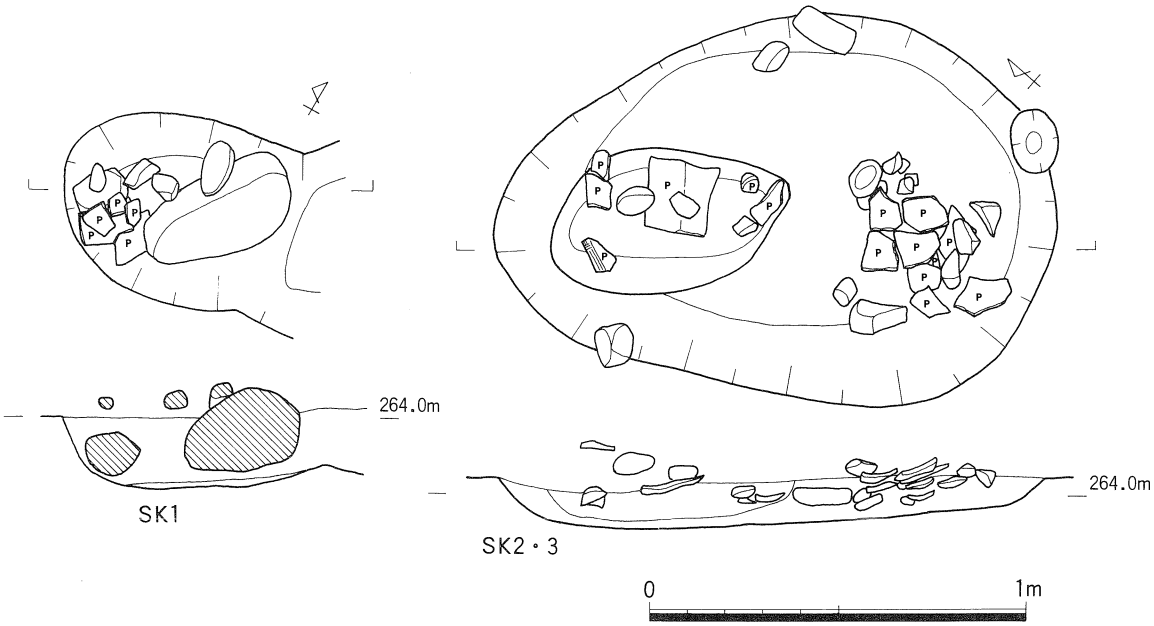
土坑SK2は，土坑SK3の埋土を上面から堀り込んでおり，比較的大形の縄文後期の土器片が出土している。完形の４分の１程度の大形の無文土器片もあるが，第７層中に同一個体は少なく，完形のまま埋設されたものではないことは確実である。他の個体の土器片も比較的大きい。

土坑SK3は，土坑SK1・２より一段と大きく，完形の４分の１程度の大形の縄文後期の無文土器片が出土している（写真図版６(7)）。他に複数の個体の破片があり，土器片の集中部は土坑の南辺付近に限定される。10～20cm大の礫もこの部分に集中する傾向がある。

土坑SK4（写真図版６(1)）は，その輪郭の認定が困難であったが，２基以上の一連の土坑から形成されていると考えられる。礫の集中部が４箇所認められるが，集石とは異なり，礫と礫との間に土砂がかむ。多量の縄文後期の土器片が出土しているが，礫の集中部に限定されるわけではなく，



第16図　第7b層上面検出遺構



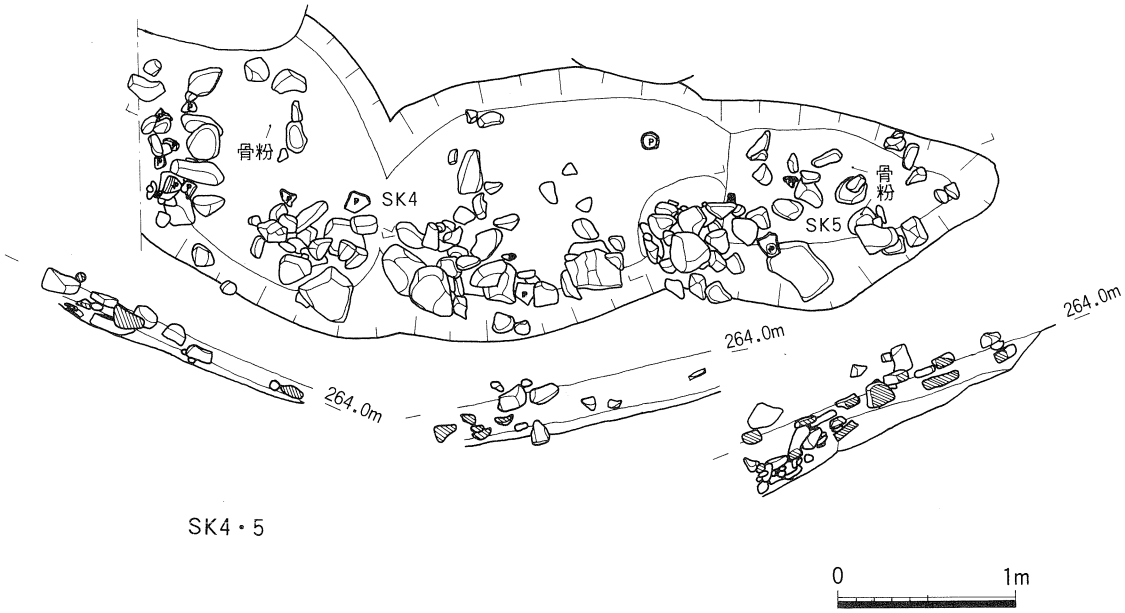
第17図　第7b層上面検出の土坑(1)

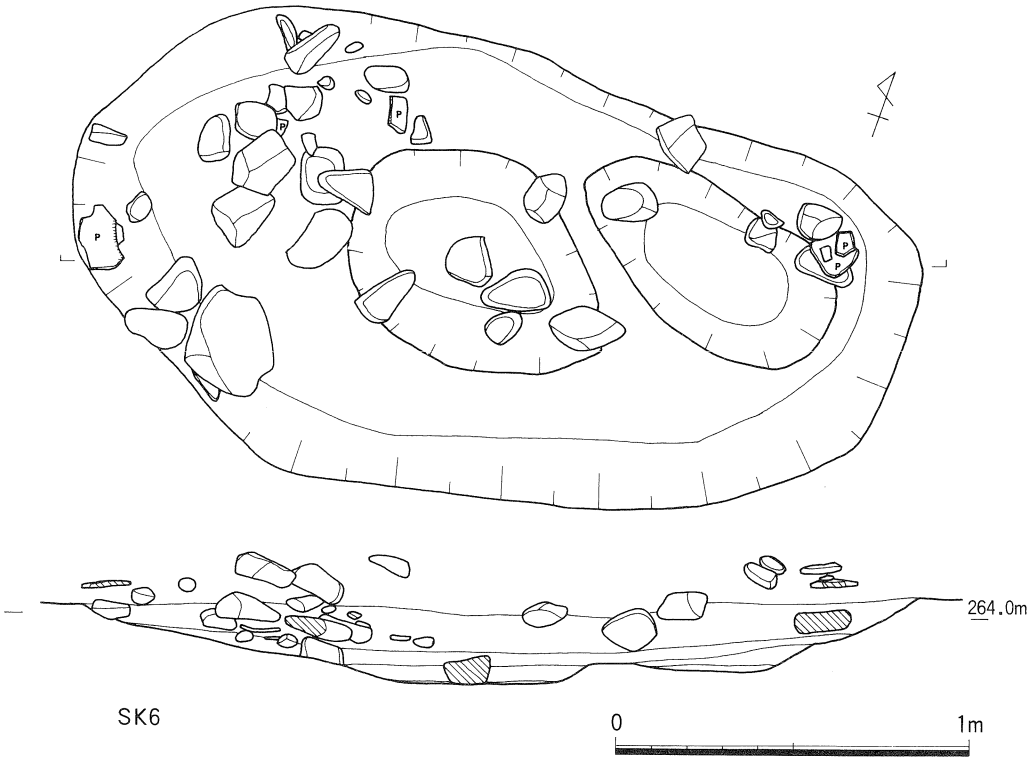
埋土中に散在する。土坑SK5は土坑SK4に切られていると判断し，別個に発掘した。礫の集中部は認められないが，多量の土器片が埋土中に散在する点は土坑SK4と同様である。土坑SK4・5とも微量の骨粉と思われるものが出土している。

土坑SK6（写真図版6(2)）には，土坑底面に浅い窪みが2箇所認められるが，上面から堀り込まれたものとは判断できなかった。10cm大以下の小礫は少なく，20～30cm大の大形の礫が土坑の西辺付近に集中する傾向がある。土器片は埋土中に散在する。

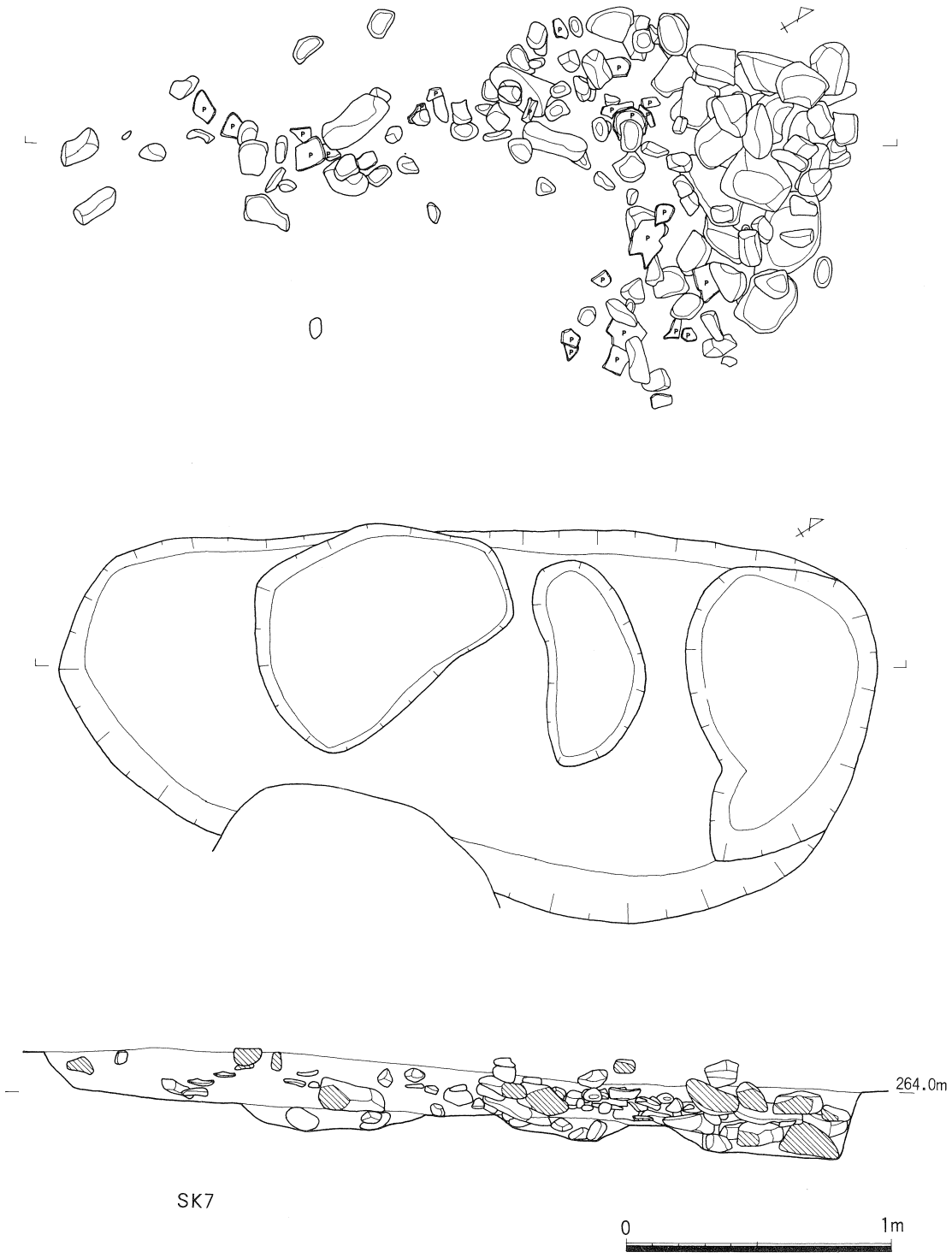
土坑SK7（写真図版6(3･4)）には，土坑SK6と同様，土坑の底面に浅い窪みが認められる。上面から堀り込まれたものとは判断できなかった。北辺付近に，特に20～30cm大の比較的大形の礫が大量に集中している。この部分は礫と礫が密接し，ほとんど土砂をかまない。この集石部分の南側に比較的大形の土器片が集中する箇所が認められる。この部分には20cm以下の小形の礫は散在するものの，大形の礫は認められない。ただし，他の遺構と同様，大形の破片にも完形に復原できるものは存在しない。

以上，いずれも第7a層上面検出の土坑とはかなり様相が異なり，また土坑ごとの様相の差も比較的大きい。出土遺物には大量の土器片があるが，土坑SK4～7では，礫の集中部に土器片が集中するわけではなく，特にSK7では明らかに集中箇所に差が認められる。SK7の集石は，第8層上面で検出した礫を伴う土坑に隣接して土坑を堀込んだ際，出土した礫をこのように集中させて処理し，改めて祭祀施設として機能させた可能性があり，他は墓の可能性が考えられる。





第18図　第7b層上面検出の土坑(2)



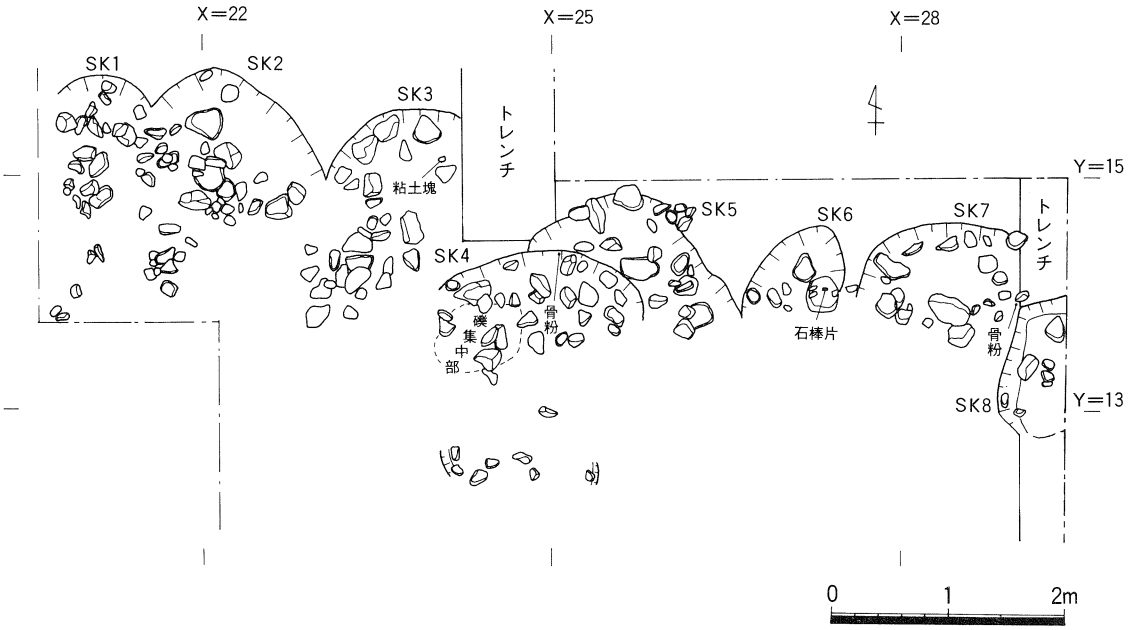
第19図　第7b層上面検出の土坑(3)

７．第８層上面検出遺構

C2区第８層は小礫が多くなり，北西部においても礫が散在する（写真図版６(6)）。この区域では礫の明確な集中部が認められなかったが，南半部では20～30cm大のやや大形の礫が集中して出土する部分がほぼ東西方向に沿って検出された（写真図版６(5)）。いずれも土坑に伴うもので，遺構と判断した。この配置を示したのが第20図である。いずれも完掘しておらず，全体の様相は不明であるが，明らかに礫が集中する箇所と，土坑の縁辺に沿って弧をなすように礫の配列する箇所とがある。これらの土坑からは，第7b層上面検出の土坑と同じように多量の縄文後期の土器片が出土する。後述するように，第7b層上面検出の土坑から出土した土器との間に明確な時期差は認めがたい。出土する礫の大きさは，第7b層上面検出のSK7出土のものと同様である。礫の集中部においては，礫と礫との間に土砂がかむ。土坑SK3から粘土塊が出土し，土坑SK6から石棒の破片（写真図版８(2)の８）が出土した。土坑SK4・７から微量の骨粉と思われるものを検出している。

土坑内の礫は，第９層の河床礫と変わるところがなく，近辺で採取したものと考えてよい。しかし，いずれかの場所から流されてきたものと考えるならば，土層の傾斜と礫の集中箇所からみて北部からとなろう。ところが，北部では礫こそ出土するものの遺物はかなり減少し，南半で多量に出土する土器片は礫とは別の箇所から流されてきたとする，不可能な推定を行うことになる。したがって，礫と土器片は土坑に伴うもので，人為的に準備され埋められたとみなすのが合理的である。

（矢野健一）



第20図　第８層上面検出遺構

第5章　遺　　物

1．縄文時代後期の土器

C2区から出土した縄文時代後期の土器は，口縁部個体数総計981点にのぼる。本来ならば層・遺構別に図示していくべきであるが，紙数の制限上，充分な紹介を行うことができない。そこで，全体を一括して有文土器と無文土器に分類し，さらに器形等の特徴から細分した上で，各分類の層・遺構別の出土点数を表に示すことにする。図示した土器の出土層位と遺構は第4表のとおりである。

有文土器　有文土器として分類したものは，土器の内外面ないし口縁端部のいずれかに文様のあるものだが，口縁端部に刻みないし刺突しか施さないものは無文土器に含めた。口縁端部に沈線のみを施すものや，口縁部外面に刺突のみを有するものは有文土器に含めた。また，いずれかの部位に縄文のみを有する土器は有文土器に含めたが，文様効果を意識している可能性のある条痕調整の土器は無文土器に含めた。

有文土器の口縁部個体数は139点で，全体の14.2％しかない。胴部のみに文様の有る土器は例外的にしか存在せず，文様を有する胴部のみの破片は107点しか存在しないため，無文土器に分類したものの中に胴部にのみ文様を有する土器を相当数含んでいる可能性はない。逆に，有文土器に分類したものの中に，口縁部にのみ文様を有し，胴部が無文になる土器は相当数含まれている。

以下，型式と口縁部形態等の特徴から，次のように細分される。

第1類（第22図1～3）…福田KⅡ式。図示したものは新段階のものだが，他に古段階のものが1点ある。いずれも小片。

第2類（第21図1，第22図4～6）…四ツ池式に類似するもの。口縁端部が肥厚し，そこに沈線を施す。典型的な四ツ池式は出土しておらず，いずれもやや時期が下がるかもしれない。

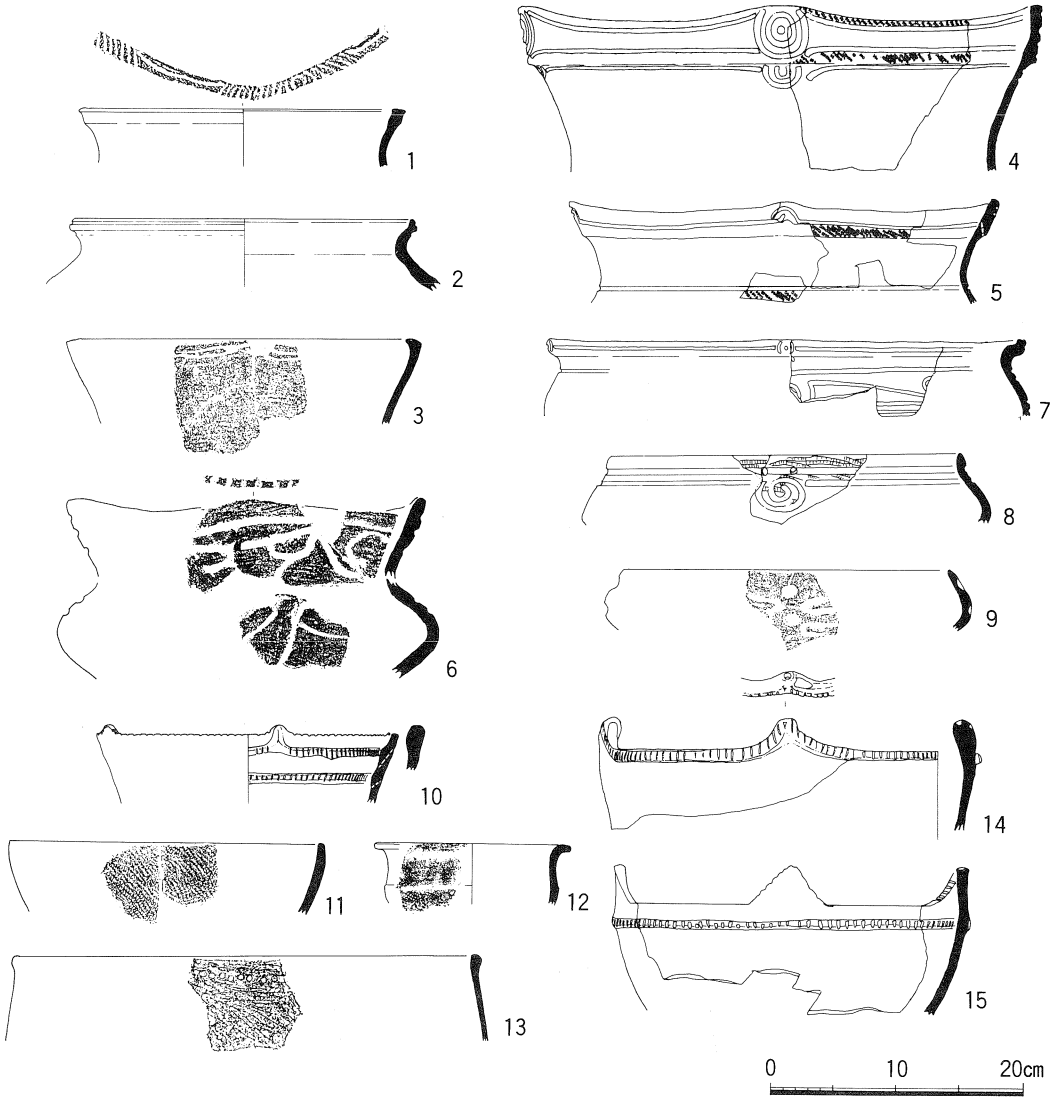
第3類（第21図2・3，第22図7～10）…口縁端部が肥厚気味で，そこに沈線を施すが，四ツ池式の範疇には入れ難いもの。頸部でくびれる壺形の土器と直行する深鉢がある。壺形の土器はミガキ調整。

第4類（第21図4・5，第22図11～22）…口縁部外面が肥厚し，そこに文様を施すもの。深鉢と鉢がある。口縁端部を面とりしないもの（第22図11～17）と，面とりするもの（第21図4・5，第22図18～22）がある。文様は横位の沈線を基本とし，波頂部に円文（第22図11）や同心円文（第21図4），あるいは入り組み文（第21図5）を施す。縦位の沈線を部分的に施すもの（第22図14）や綾杉文（第22図17）や縦位の短沈線（第22図20）を有するものは平縁に限られ，文様は九州地方の出水式に類似する。波状口縁のものの中には，ミガキ調整が存在する（第21図4・5，第22図18）。

第5類（第22図23・24）…口縁部外面が肥厚せず，屈曲するもの。深鉢と鉢がある。第22図24は，

波頂部が内湾する深鉢とみなし，本類に含めた。口縁部付近の破片である第23図８もこの類か。縄の側面圧痕を施す特異な文様を有する。

第６類（第21図６，第22図25～30）…口縁部外面が肥厚せず，かつ段をなして屈曲しないもの。深鉢が多いが，鉢も含んでいると思われる。本類には内面に施文するものが認められる（第21図25・28）。第21図６は口縁部が若干肥厚気味で，波頂部にのみ刻みを有し，外面に巻貝による擬縄文を施す。第22図29は，北白川上層式２期に多い鋸歯状の文様と関係するであろう入り組み文を，２本単位の沈線で施す。



第21図　縄文時代後期の有文土器(1)

第22図　縄文時代後期の有文土器(2)

第７類（第21類７，第22類31・32)…九州地方の小池原上層式ないし鐘崎式に類似するもの。いずれも口縁部が若干肥厚気味で，内面に沈線を施す。第３類に含めた第22図７もこれに近いかもしれない。第22図31は，外面の沈線間に無節Ｌの縄文を有する。第23図２の把手や第23図３の胴部破片は本類のような口縁部を有するだろう。

第８類（第22図33～41，第23図１)…第７類に近いものを含むが，口縁部内面に沈線を施さず，口縁部外面のモチーフが横位の沈線を基調とするもの。RLの縄文を有するものを少量含む。深鉢と鉢があり，一部第９類を含む可能性がある。第22図41は沈線をもたない小形の鉢。第23図１は，第24図11のような器形になると思われる。

第９類（第21図８・９)…強く内湾する浅鉢。太い凹線によってモチーフを描く。端部が先細りするものが多い。この類は，足立克己によって石見地方独特のものとして注目されていたが［足立1987］，四ツ池式併行期の高知県長岡郡本山町松ノ木遺跡で大量に出土し［出原1992］，中四国地方西部に分布することが明かになっている。ただし，四ツ池式併行期のものとはモチーフが異なるものを含む。

第10類（第21図10)…内面の粘土帯の継目が隆帯化し，そこに刺突列を有する鉢。

第11類（第21図11)…RL縄文を横位に施文する鉢。

第12類（第21図12)…口縁部が強く外反し，胴部に縄文を有する小形の鉢。

第13類（第23図９)…く字形の浅鉢。屈曲部を刻むものと，刻まずに肥厚する口縁端部に縄文を施すものがある。

第14類（第23図４)…外面に粘土粒を貼付し，口縁端部に縄文を有するもの。

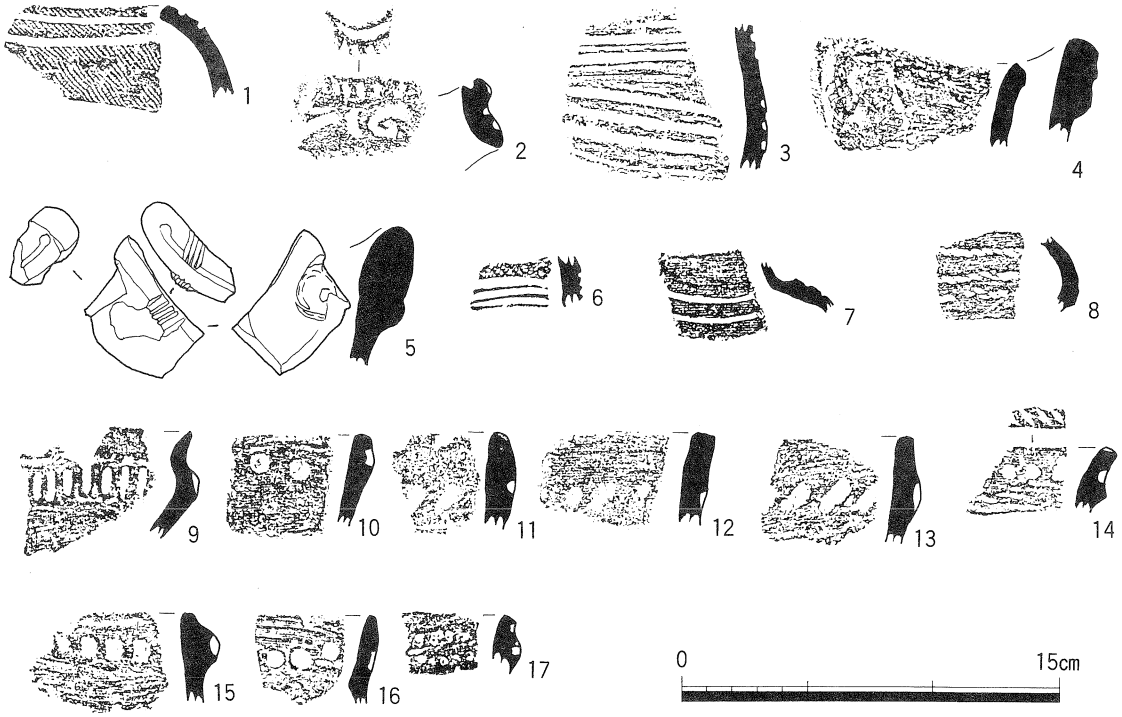
第15類（第23図５～７)…低い隆帯に櫛状の施文具による沈線を施すもの。

第16類（第21図13～15，第23図10～17)…口縁部外面に刺突列を有するもの。刺突の工具には，巻貝の尻によるとみられるもの（第23図10）や巻貝の側面によるもの（第23図11～13）と，棒状工具によるもの（第21図14・15，第23図15）がある。

各類の層位・遺構別の出土点数は第１表に示したとおりである。第８層および第８層上面で検出した遺構から出土するのは，第２・４・９・13類に限られる。第７・11・14類は少数だが，いずれも第７層より上位の層から出土している。第7b層からまとまって出土するのは，第２・３・４・６類で，第８・16類は，出土層位が分散する傾向にある。

無文土器　無文土器は口縁部個体数で総計842点出土しており，全体の85.8%をしめる。器形がわかるものをまず分類し，他は口縁部の特徴を概観する。器壁の外面をミガキや丁寧なナデで調整するものを，精製とみなす。

第１類（第24図１～８)…頸部でくびれ，口縁部が外反する深鉢。口縁端部を刻むもの（第24図



第23図　縄文時代後期の有文土器(3)

6・8）をa種，刻まないものをb種とする。精製と粗製がある。

第2類（第24図9・10)…器形は第1類と同じだが，口縁部が段をもって肥厚するもの。口縁端部は刻まず，粗製に限られる。

第3類（第24図11)…口縁部が内湾し，頸部で屈曲する深鉢。口縁端部は刻まず，精製。

第4類（第24図12～14)…頸部の屈曲しない深鉢ないし鉢形の土器。第8類に比べて深い器形。口縁端部を刻むa種は粗製のみ。刻まないb種には精製が1点あるが，ほとんどは粗製。

第5類（第26図12)…鉢形になると思われる土器で，口縁部を内折する。口縁端部を刻まず，粗製。

第6類（第24図15～17)…器形は第4類と同じだが，口縁部外面が肥厚するもの。口縁端部を刻ます，粗製。

第7類（第25図1・2)…やや内湾気味の比較的深い鉢。いずれも波状口縁で精製。1点は口縁端部を刻む。

第8類（第25図3～7)…浅鉢。ボール形になるものから皿に近いものまである。精製が多く，いずれも口縁端部を刻まない。粗製土器には口縁部が内湾気味になるものがある。

第9類（第25図8・9，第26図17・18)…口縁部内面が肥厚する浅鉢。口縁端部を刻むa種は粗製のみで，刻まないb種には精製がある。口縁部外面を強くなでるものとそうではないものがある。

第１表　縄文後期有文土器口縁部個体数

＊　小ピット出土点数を含む。

層位・遺構 / 分類	第1・2層	第3・4層	第5層	第6a層	第6b層	第6c層	第7a層	第7b層	第8層	小計	第6a層上面検出遺構	上面検出 第6b層 SK2	上面検出 第6b層 SK4	小計	上面検出 第6c層 SK5	上面検出 第6c層 SK7	小計	上面検出 第7a層 SK1	SK3	SK5	SK6	SK8	SK10	SK11	SK13	SK15	SK17	SK18	SK19	SK20	小計	上面検出 第7b層 SK2	SK4	SK5	SK6	SK7	小計	第8層上面検出遺構	総計
第１類						2	1			3																							1			1		1	4
第２類								3		3									1				1								2							1	6
第３類		1			1	3	3	6		14																			1	1	2									16
第４類		1	2	1	1	1	1	5	4	16																		1		1	2	1	4	1	1		7	1	26
第５類					2	1	1			4														1							1									5
第６類				1	1	3		6		11	1				1	1	2				1		1							1	3				1		1		18
第７類			2	1						3																													3
第８類		2		5	1	1	4	1		14	2	1	1	2				1		1			1			1	1				6*			1		1	2	1	27
第９類					1	1	1	1		4	2										2										2							1	9
第10類								1		1																													1
第11類				1	1					2																													2
第12類							1			1																													1
第13類																							1								1							1	2
第14類											1																												1
第15類							1			1																													1
第16類		2	1	1	2			3		9	4														1						1		1		1	1	3		17

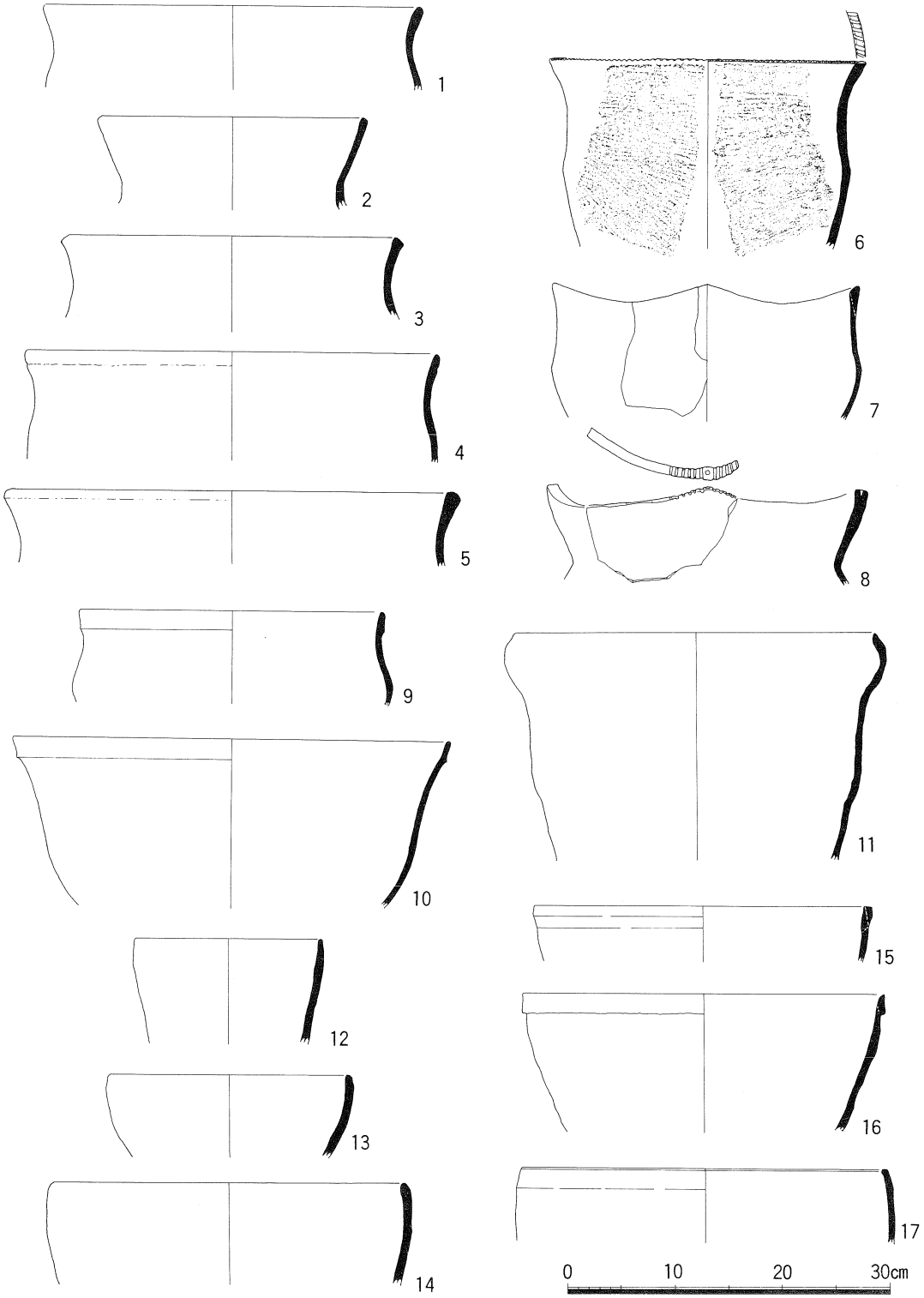
第10類（第25図10・11）…く字形に屈曲する浅鉢。精製に限られるが，口縁部のみにミガキを施し，屈曲部以下意図的に巻貝による条痕調整を残すものがある（第25図10）。口縁端部を刻むものはない。

第11類（第25図12・13，第26図19・20）…皿。精製と粗製がある。口縁端部を刻むものはない。

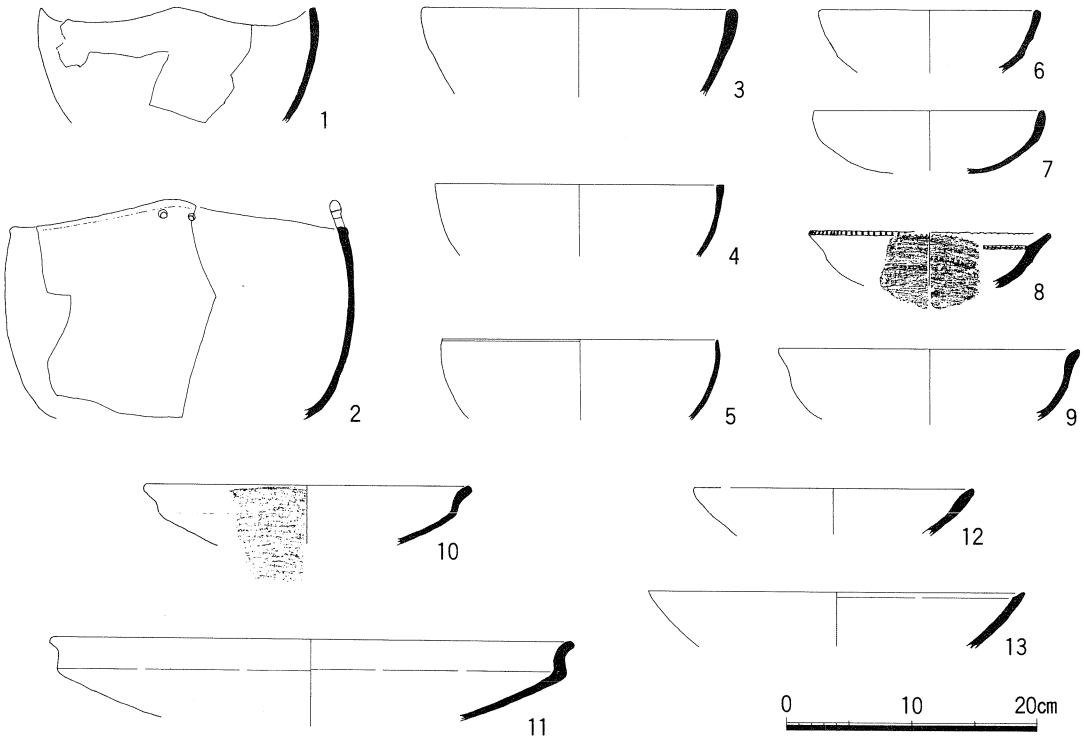
その他，無文土器の特徴について補足する。口縁端部の刻みは，第24図６のように，口縁端部全面を刻むものの他に，口縁端部外端（第26図１・２）や内端（第26図３）をわずかに刻むものがある。口縁部外面を肥厚させるものは原則として口縁端部を刻まないが，例外的に刻むものがある（第26図８・９）。

肥厚部の粘土帯の継目を意図的に残したもの（第26図６）や，これが痕跡として沈線化しているもの（第26図７）がある。口縁部が肥厚しないものにも，粘土帯の継目を意図的に残すものがある。（第26図13）。

波状口縁になるものはわずかだが，これには通常の深鉢ないし鉢の他に，頸部で強く屈曲するも



第24図　縄文時代後期の無文土器(1)



第25図　縄文時代後期の無文土器(2)

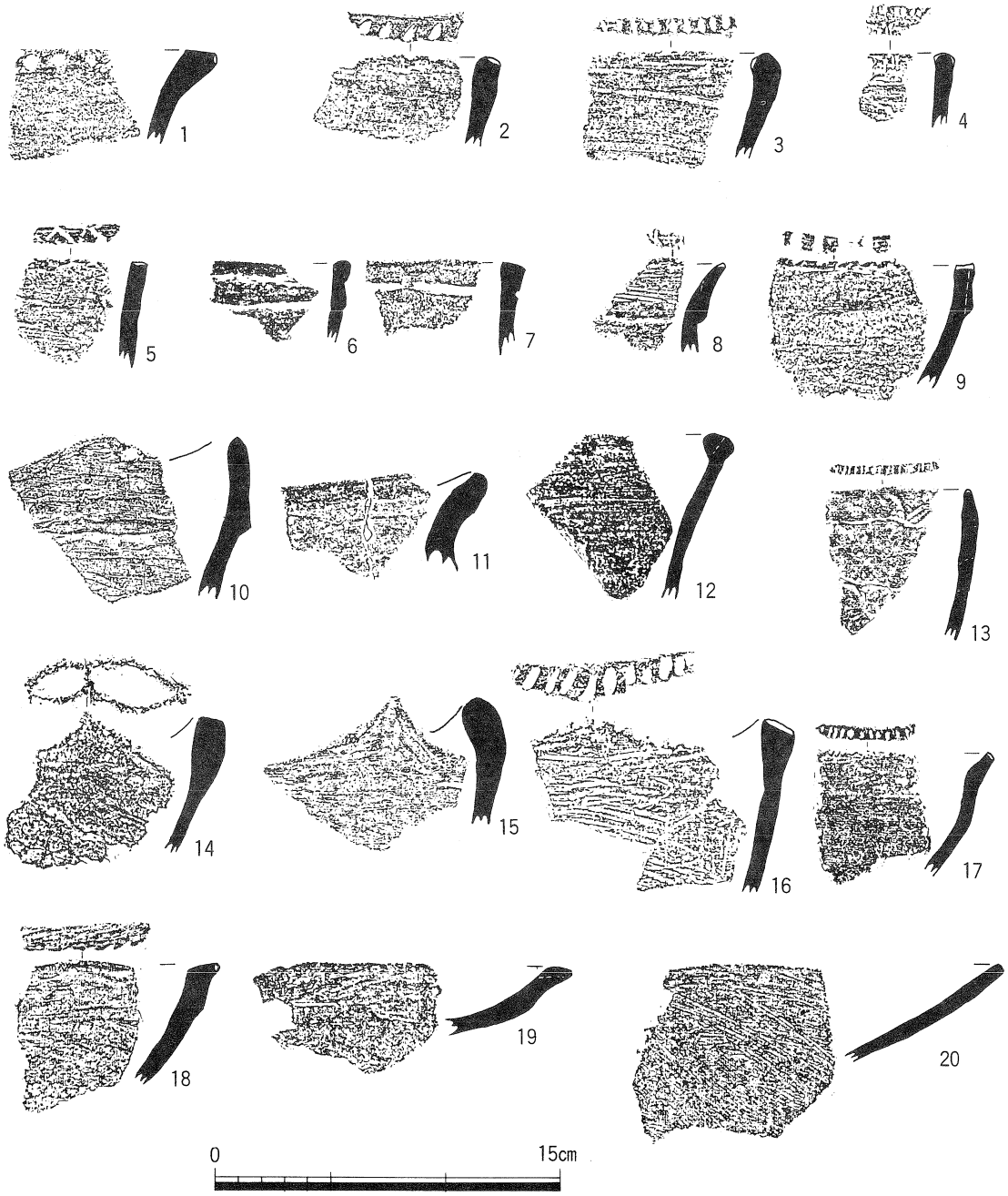
の（第26図11）があり，九州地方の小池原上層式に類似する器形である。波状口縁の形態には，第26図14・15のように，わずかに非対称になるものが存在し，四ツ池式の波状口縁からの変化をうかがわせる。波頂部の刻みは，左右対称の傾きになるものと，一方向の傾きのもの（第26図16）がある。

粗製土器の調整手法は，指ないしヘラによるナデと巻貝による条痕が一般的であり，二枚貝条痕はわずかしか認められない。例外的に刷毛目がある。調整方向は口縁部付近は原則としてすべて横位で，胴下半部は右下がりの斜位となる。ただし，浅い器形では全面斜位になるものがある。また，精製土器に大粒の雲母を混入するものが目立つ。全面，黒色となる土器も精製に限られる。

各類の層位・遺構別の出土点数を第２表に示す。器形の不明な口縁部破片を含めた無文土器842点の中で，精製は129点で15.3%，粗製は713点で84.7%。端部を刻むものは，精製７点で精製全体の5.4%，粗製134点で粗製全体の18.8%，合計141点で無文全体の16.7%。口縁部外面を肥厚させるものは精製３点，粗製59点，計62点で，全体の7.4%。

底部　縄文時代後期の底部の個体数は142点である。口縁部まで接合するものはない。平底，凹底，高台付底に分類する。高台が低くても明確に段をなして高くなっているものは高台付底に分類

し，凹底は段をもたずにゆるやかにくぼんでいるものに限った。平底は59点で全体の41.5%，凹底は24点で全体の16.9%，高台付底は59点で全体の41.5%。各類の層位・遺構別出土点数を第３表に示す。



第26図　縄文時代後期の無文土器(3)

第２表　縄文後期無文土器口縁部個体数

ただし数字は精製／粗製。　＊ 小ピット出土点数を含む。

層位・遺構 / 分類	第1・2層	第3・4層	第5層	第6a層	第6b層	第6c層	第7a層	第7b層	第8層	小計	第6a層上面検出遺構	上面検出 第6b層 SK5	上面検出 第6b層 SK6	小計	上面検出 第6c層 SK3	上面検出 第6c層 SK4	上面検出 第6c層 SK6	上面検出 第6c層 SK7	小計	上面検出 第7a層 SK3	上面検出 第7a層 SK5	上面検出 第7a層 SK8	上面検出 第7a層 SK11	上面検出 第7a層 SK12	上面検出 第7a層 SK13	上面検出 第7a層 SK14	上面検出 第7a層 SK15	上面検出 第7a層 SK17	上面検出 第7a層 SK20	上面検出 第7a層 SK22	小計	上面検出 第7b層 SK1	上面検出 第7b層 SK2	上面検出 第7b層 SK3	上面検出 第7b層 SK4	上面検出 第7b層 SK5	上面検出 第7b層 SK6	上面検出 第7b層 SK7	小計	第8層上面検出遺構	総計
第１類a			1/1	3/1	2/2	2/2	1/1	1/1	1/1	11/11		1/1		1/1						1/1					1/1			2/2		4/4		1/1						1/1	1/1	2/18
第１類b				1/1	2/2	1/2	4/5	1/1	9/9	1/1		1/1		1/1	1/1		1/1		2/2		1/1						2/2	1/1		1/3	3/3			1/1	3/3	1/1	2/2	10/10	3/3	11/28
第２類				1/1	1/1	1/1	1/1			4/4				1/1				1/1	1/1			1/1			1/1					1/1	3/3										9/9
第３類																																	1/1						1/1		1/1
第４類a						2/2	1/1	5/5		8/8							1/1		1/1				1/1							1/1				3/3				3/3	3/3	16/16
第４類b				1/1	3/3	4/4	3/3	1/8		19/19			1/1	1/1			1/1		1/1	2/2				2/2	2/2	1/1	1/1	1/1		9/9	1/1			8/8	1/1		1/1	11/11	5/5	46/46
第５類																																				1/1		1/1	1/1		2/2
第６類					1/1	1/1		1/1		3/3														1/1						1/1			1/1				1/1	2/2		6/6
第７類									1/1	1/1																								1/1	1/1			2/2		3/3
第８類	1/1		1/1	3/1	2/1	3/4	3/3			13/7		2/2		2/2													1/1			1/2	1/2		1/1				1/1	3/1	1/1	20/11
第９類a						1/1				1/1																	1/1			1/1							1/1	1/1	1/1	4/4
第９類b	1/1			3/1	3/3	1/1		1/2	5/1	8/8								1/1	1/1																1/1		1/1	1/1	2/2	6/12
第10類						1/1				1/1	1/1																				1/1			1/1			1/1	3/3		5/5
第11類			1/1		1/1			2/1		3/3						1/1			1/1																1/1			1/1	1/1	5/5

第３表　縄文後期土器底部個体数

＊ 小ピット出土点数を含む。

層位・遺構 / 分類	第1・2層	第3・4層	第5層	第6a層	第6b層	第6c層	第7a層	第7b層	第8層	小計	第6a層上面検出遺構	検出遺構 第6b層上面 SK2	検出遺構 第6b層上面 SK5	小計	検出遺構 第6c層上面 SK4	検出遺構 第6c層上面 SK6	検出遺構 第6c層上面 SK7	小計	上面検出遺構 第7a層 SK5	上面検出遺構 第7a層 SK7	上面検出遺構 第7a層 SK8	上面検出遺構 第7a層 SK10	上面検出遺構 第7a層 SK11	上面検出遺構 第7a層 SK12	上面検出遺構 第7a層 SK15	上面検出遺構 第7a層 SK16	上面検出遺構 第7a層 SK17	上面検出遺構 第7a層 SK19	上面検出遺構 第7a層 SK20	小計	SK2	SK3	SK4	SK5	SK6	SK7	小計	第8層上面検出遺構	総計
平底		1	1	6	3	3	10	4		28					1	1		2				1		1	2	2	1		1	9*			6	2	3	2	13	7	59
凹底					4	1	3	1	2	11			1	1	1			1	1	1		1	1	2	1					7		1					1	3	24
高台付底			1	5	7	6	4	5	3	31	1	1	2	3	1	1	1	3			1	1		2		1		1	1	7	1	2	3	2	3	2	13	1	59

第４表　縄文後期土器の出土層位・遺構

番　号	層位・遺構	番　号	層位・遺構	番　号	層位・遺構	番　号	層位・遺構
第21図 1	7b	第22図17	8	第23図 7	7b	第25図 4	7a
2	6c	18	7b	8	6a	5	6c
3	7a上SK20	19	5	9	7a上SK10	6	7b上SK1
4	7b上SK4	20	7b上SK5	10	7a上SK13	7	7b
5	8	21	7a上SK20	11	SB２	8	6c
6	7b	22	6a	12	7b上SK6	9	7b上SK5
7	6a	23	6b	13	7b	10	7b上SK1
8	6c	24	6b	14	6b	11	7b上SK7
9	6c	25	7b	15	3	12	6c上SK4
10	7b	26	6c上SK1	16	7b	13	7a
11	6a	27	6b	17	6a上SK11	第26図 1	6a
12	7a	28	7b	第24図 1	8	2	7a
13	6b	29	SB2	2	7a上SK15	3	8 上土坑
14	7b	30	7a	3	7a上SK1	4	5
15	7b上SK4	31	5	4	7b	5	7b
第22図 1	7a	32	5	5	7b上SK1	6	7a上SK19
2	6c	33	7a上SK1	6	7b上SK2	7	6b
3	6c	34	7b上SK7	7	7bSK1	8	8
4	7a上SK3	35	7a上SK17	8	6a	9	6b
5	7b	36	6b上SK2	9	7a	10	6a
6	7a上SK10	37	7a	10	7b上SK7	11	6b
7	6b	38	7a	11	7b上SK3	12	7b上SK6
8	6c	39	7b上SK3	12	7a上SK18	13	6b
9	7a上SK20	40	7a上SK15	13	7a	14	
10	7b	41	7b	14	7a上SK14	15	7b
11	7b上SK4	第23図 1	6b上SK4	15	7b	16	7b
12	7a上SK18	2	7b	16	7a上SK12	17	8 上土坑
13	7b	3	7a	17	7b上SK3	18	7b上SK17
14	7b上SK2	4	7b上SK1	第25図 1	7b上SK4	19	7b上SK7
15	7b	5	7a	2	7a上SK15	20	7b
16	5	6	7b上SK7	3	7b上SK4		

２．縄文時代晩期と弥生時代前期の土器

縄文時代晩期の中山Ｂ式（第27図１～11）と，それ以外の凸帯文土器（第27図12～19）と，弥生土器（第27図22～28）が第３～５層および第６層上面検出の遺構から出土している。弥生時代中期以降のものは数が少なく，小片に限られる。

中山Ｂ式は，口縁部個体数にして11点出土している。口縁端部を刻むものは存在しない。口縁部外面の凸帯を軽くＤ字形に刻むもの（第27図１～５）と刻まないもの（６・７）がある。頸部外面の沈線は２本ないし３本単位の工具によるもので，いずれも直線的なモチーフである。頸胴部の境界は刻まないもの（８）と隆帯上を刻むもの（９～11）がある。胴部はいずれもケズリによる調整。SB3からは，比較的大きな胴部片を多数含んで，口縁部４点が出土している。SB3からは，それ以外の凸帯文土器口縁部２点，弥生前期土器口縁部２点も出土するが，これは小片である。１・２・５・８はSB3，３・11はSB2，４・10は第３層，７・９は第４層，６は第５層からの出土。

以外の凸帯文土器はいずれも口縁部のみに凸帯を有する。口縁部個体数にして30点で，遺構からのまとまった出土は認められない。口縁端部を外側になでて調整するもの（第27図12・14・15）が多く，口縁端部を刻むものは１点しかない。端部からやや下がったところに突帯がつくもの（12～16・18）がほとんどだが，１点端部に接するものがある（17）。凸帯上の刻みにはＤ字形（12・13・18）とＯ字形（14・15・17）の他に鋭い刻み（16）がある。19は頸部の破片で頸胴部の境界が隆帯化している。20・21は晩期の浅鉢である可能性がある破片。21は，浅鉢とすれば，最も新しい様相を示す。12・21はSB2，15は第３層，13・14・16～20は第４層出土。

弥生時代前期の土器は第6a層検出のSB2とSK1からまとまって出土しているが，小片が多い。SB2からは口縁部個体数にして10点，SK1からは１点である。SB2からは，段をもち端部を刻まないもの（第27図22）が２点，逆Ｌ字形口縁１点があり，他に端部を刻むものが４点，刻まないものが３点ある。甕の頸部片は，段３点，１本沈線２点，２本沈線２点，円形刺突２点，無文１点で，計10点。壺の胴部片は綾杉文（25）３点，沈線文１点で，計４点。SB2からは他に中山Ｂ式３点と凸帯文土器１点が出土している。SK1からは，前期甕の口縁部片（24）の他，底部に木葉文のある土器（28）と，前期甕の頸部片２点（段１点，３本沈線１点）が出土している。

弥生前期の甕の口縁部個体数48点の内，端部を刻むものは15点，刻まないものは33点（この内逆Ｌ字形口縁８点）。頸部の文様のわかる破片58点の内，段29点，１本沈線10点，２本沈線５点，３本沈線１点，多条沈線３点，円形刺突を有する段２点，円形刺突を有する沈線６点，無文１点。前期壺の文様は，綾杉文８点，木葉文２点，沈線文２点。松本岩雄氏が紹介している土器［松本1992：487・488］の内，487頁の１番はA2区第４層出土で，他の２点は本報告第27図24・28と同一。なお，23は第４層，26は第５層，27は第３層出土。

第27図　縄文晩期と弥生前期の土器

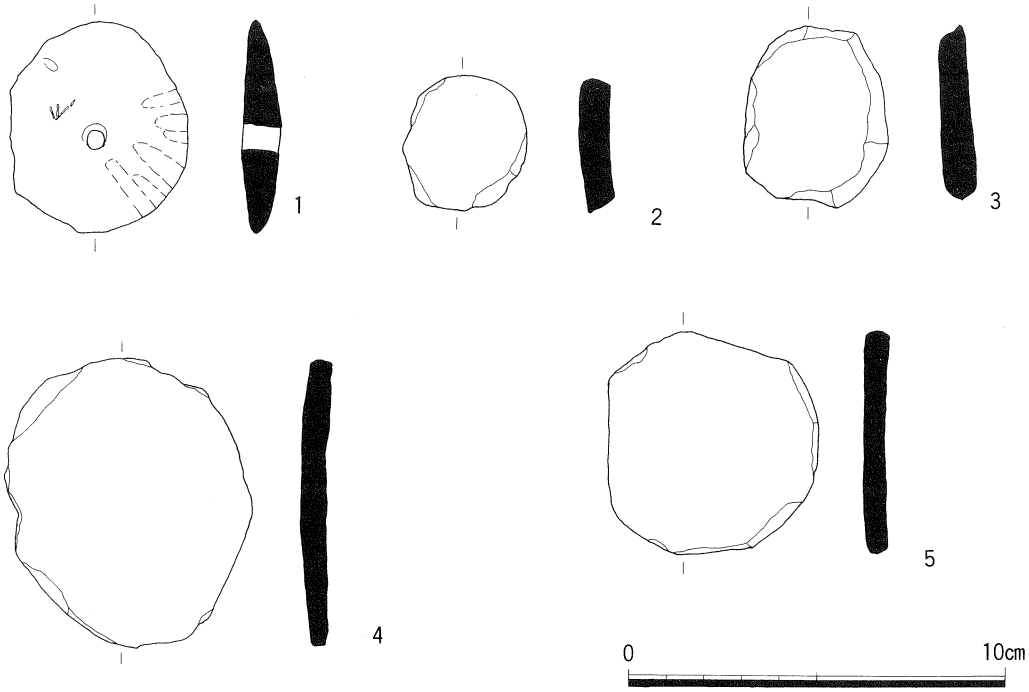
３．土　製　品

紡錘車（第28図１）　C2区第３層から１点出土している。長径5.6cm，短径4.8cm，最大厚1.1cmで，中心に径0.7cmの焼成前穿孔がある。中心から放射状に丁寧になでた痕跡が残る。籾痕と思われる痕跡の他，矢印状の文様があるが，意図的なものではないかもしれない。

土製円盤（第28図２～５）　C2区で13点出土。すべて第５層より上層から出土している。第29図４は第３層，２・３は第4a層，５は第4b層からの出土。３は内外に刷毛目の痕跡があり，弥生時代前期の甕の破片。２・４も胎土からみて弥生土器だが，５は縄文時代晩期の可能性がある。

ミニチュア土器（写真図版８(2)の９）　C2区第7a層上面検出土坑SK17から出土しており，縄文時代後期のもの。１㎜程度の器壁で，波頂部の突起を表現しているように見えるため，ミニチュア土器の破片とみなした。

粘土塊（写真図版８(2)の10・11）　C2区第６層から第８層にわたって，21点出土している。すべて縄文時代後期のもの。10はC2区第８層，11は第7b層上面検出土坑SK7から出土している。11が最大で，最大長8.5cm。５cm前後のものが多い。10は，一部に指で粘土を掻き取ったような凹線が残る。11にも指でこねた跡がある。11は黒斑があり，他もすべて火を受けている。縄文時代後期の土器に必ず含まれる１㎜以上の砂粒は，１点の例外を除いて認めることはできない。



第28図　紡錘車と土製円盤

4．石器・石製品

C2区から出土した石器は，石鏃35点，尖頭器１点，スクレイパー３点，楔形石器４点，細部調整のある剝片13点，石核１点，磨製石斧８点，敲打製石斧２点，打製石斧20点，切目石錘５点，敲・磨石類16点がある。細片の分析によって，この数はさらに増加すると思われる。また，石棒の破片が１点出土している。

石鏃（写真図版８(1)の１～13）には，有茎式１点，円基式１点，平基式３点，弱凹基式式11点，強凹基式16点，雁又鏃１点，不明２点がある。凹部の深さ／凹部の幅が0.2以上を強凹基式とした。姫島産黒曜石製が２点あり，他はサヌカイトである。弱凹基式は第５層以下からは出土していない。側縁を鋸歯状に加工したものは強凹基式に５点ある。雁又鏃は弥生時代前期の土器がまとまって出土した第6a層上面検出土坑SK1から出土している。

写真図版８(1)の16は石錐と判断した。打製石斧は，１点第6a層から出土しているが，他は上位層からの出土である。敲打製の石斧は縄文時代後期の土坑内から出土しているが，いずれも欠損品である。

第８層上面から出土した石棒片は泥岩製で，表面を敲打した後，磨いている。

第５表に図版に示した石器・石製品の出土層位と計測値をあげる。

（矢野健一）

第５表　石器・石製品の計測値と出土層位・遺構

写真図版8の番号	名称	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	層位・遺構	備考
１－１	石鏃	23.8	29.3	5.9	2.8	第6b層	平基式
１－２	〃	18.9	16.4	3.8	0.9	6b上SK7	〃
１－３	〃	18.6	17.9	1.8	0.4	第4b層	弱凹基式
１－４	〃	16.5	12.3	2.1	0.2	〃	〃
１－５	〃	22.6	15.5	3.0	0.8	第３層	〃
１－６	〃	18.3	13.5	3.2	0.8	〃	〃
１－７	〃	32.8	23.1	4.7	3.8	第4a層	〃
１－８	〃	15.5	13.4	3.8	0.7	第7a層	強凹基式
１－９	〃	21.7	11.1	2.2	0.2	第３層	〃　鋸歯状
１－10	〃	19.8	10.1	2.7	0.4	第7a層	〃　〃
１－11	〃	24.9	14.8	2.9	0.9	〃	〃　〃
１－12	〃	41.1	12.2	5.2	2.8	第５層	有茎式
１－13	〃	20.0	20.0	3.6	(0.8)	6a上SK1	雁又鏃
１－14	楔形石器	36.0	33.0	5.0		SB3	
１－15	〃	31.1	21.9	7.8		第4b層	
１－16	石錐	38.8	38.2	15.2	13.0	7b上SK6	
１－17	石核	61.6	40.8	26.2	78.0	第4a層	
２－１	磨製石斧	135	51	33	367	第３層	
２－２	敲打製石斧	(117)	(59)	38	(371)	6c上SK1	
２－３	磨製石斧	104	46	27	198	SB2	
２－４	〃	87	53	15	100	第6b層	一部のみ磨製
２－５	打製石斧	94	53	18	68	第4b層	
２－６	切目石錘	47	29	13	27	7b上SK6	
２－７	敲石	62	21	20	38	7a上SK15	両端に敲き痕
２－８	石棒	(50)	(21)	(6)		８上土坑	

第６章　ま　と　め

以上，C2区に限って調査成果の概要について報告した。他の調査区の整理が進めば，その関連からも改めて詳細な報告をする必要がある。ここでは，C2区の成果について簡単にまとめておく。

古墳時代のものと思われる住居址SB1については，A1・B1区の住居との関わりから把握する必要がある。筆田遺跡でもみられる住居址廃絶時における礫の詰め込みは特異なものである。

弥生時代前期の住居址SB2については，検出自体石見地方山間部では稀である。匹見町塚田遺跡では，前期の土器がまとまって出土しており，一帯に集落が存在していることが確実になった。SB3については，上面からの土坑の堀込みについて解釈の余地を残すものの，弥生時代前期ないし縄文時代晩期のものであることは確実である。

縄文時代後期の土坑群については，重層して出土したことに大きな意義があると考える。このような例は全国的にみても数が少ないと思われる。これらの多くは墓壙と考えており，今後，サンプリングしてある土壌の燐分析や骨粉の分析によって，この点を解明する必要がある。当該期の住居址は水田造成時に削平を受けている南の自然堤防上に存在した可能性がある。川に向かって傾斜する包含層の残るA5区でもこの時期の土器が出土している。

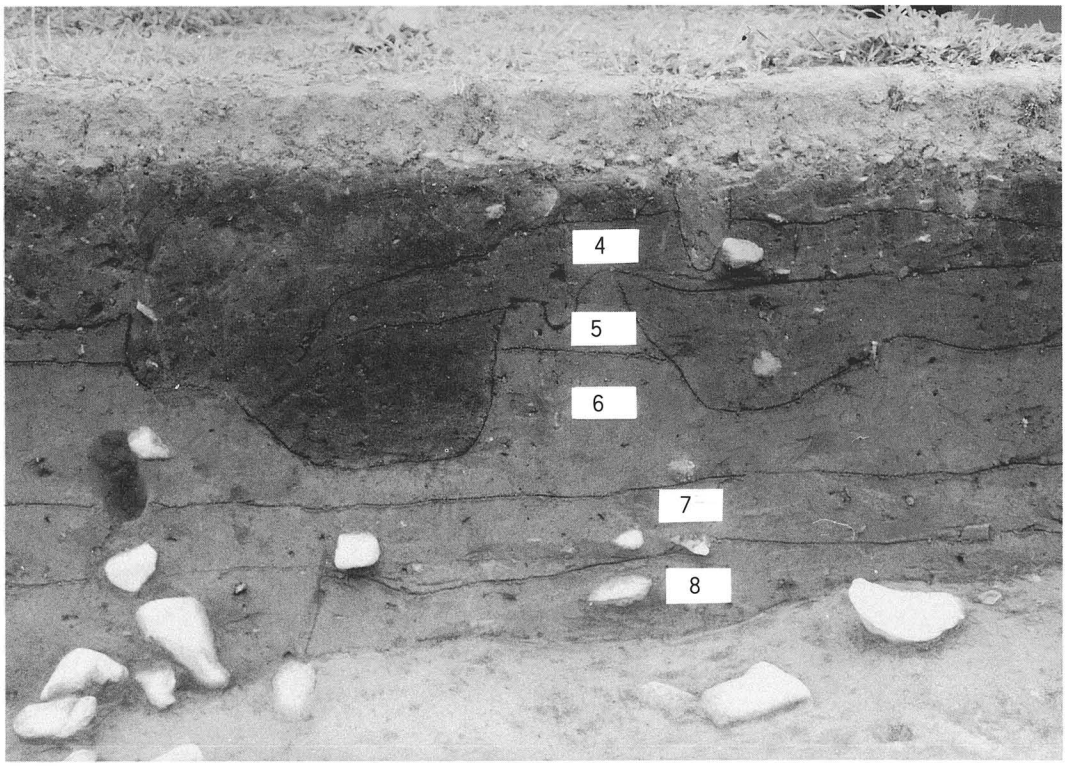
縄文時代後期の土器は，後期前葉の津雲Ａ式ないし平城Ⅱ式，すなわち北白川上層式１期に併行するものが多い。これらは２型式程度に細分される可能性を含むが，この前後の時期のものは少ない。したがって，土坑群は比較的短期間に継続的に形成された可能性がある。土坑は他の調査区でも検出されており，他の調査区との土器の相違を分析することで，この土坑群の広がりの変遷を明らかにしていく必要がある。ただし，当該期の土器編年については，現在議論が進行中であり，かつ中国地方西部における類例は限られている。この点，九州地方全体との関わりから議論を深める上でも，重要な資料になると考える。石器についても剝片多数が出土しており，全体の詳細な報告を別の形で行いたい。

（矢野健一）

引用文献

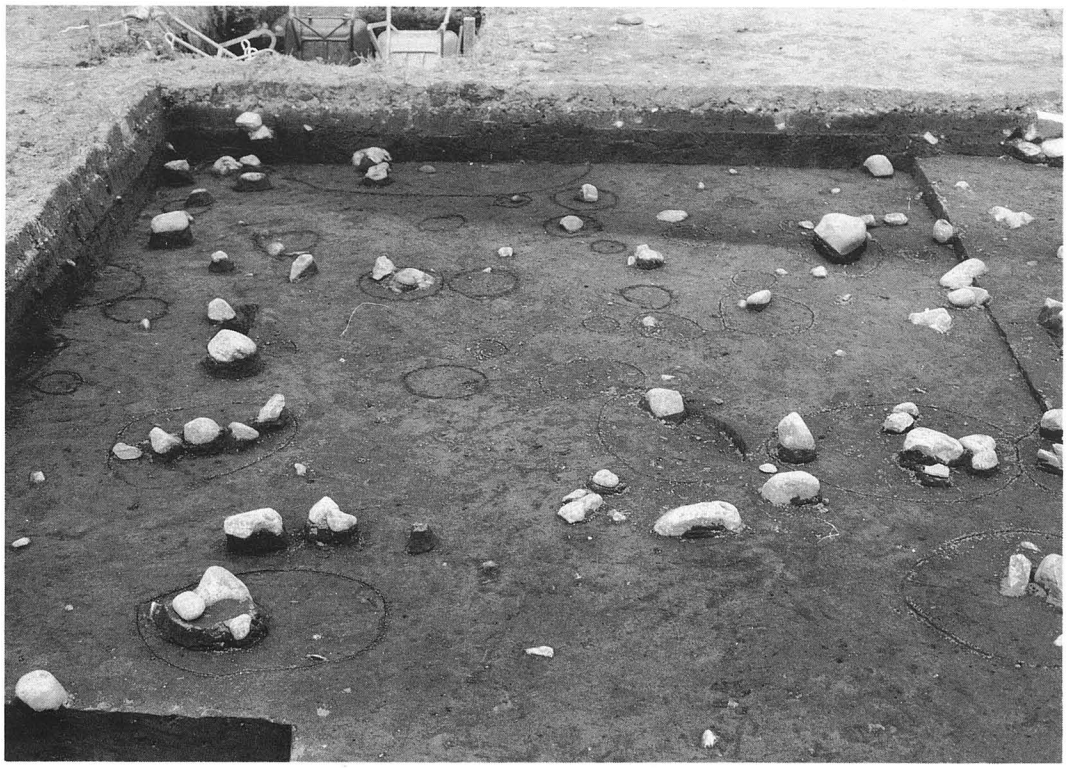
足立克巳　1987「山陰石見地方における縄文後期前～中葉の土器について」『東アジアの考古と歴史　中』
出原恵三　1992『松ノ木遺跡　Ⅰ』（『本山町埋蔵文化財調査報告書第３集』）
松本岩雄　1992「石見地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社
松本岩雄ほか　1987『新槇原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
渡辺友千代　1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代　1991『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書　Ⅳ』匹見町教育委員会

1．遺跡遠景（北西から）



2．C2区西壁の層位

図版 2



1．C2区西半第6a層上面遺構検出状況（南から）

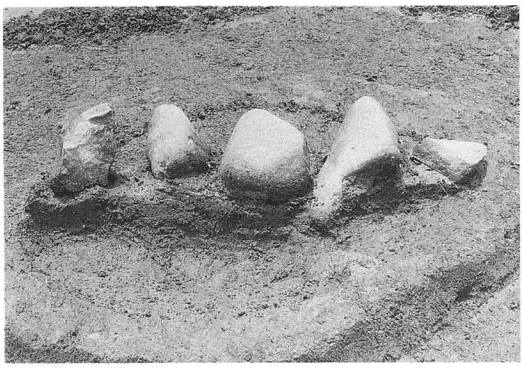
2．C2区第6c層上面SK 1 ～ 4 検出状況（南から）

1．C2区西半第7a層上面検出遺構群（北から）

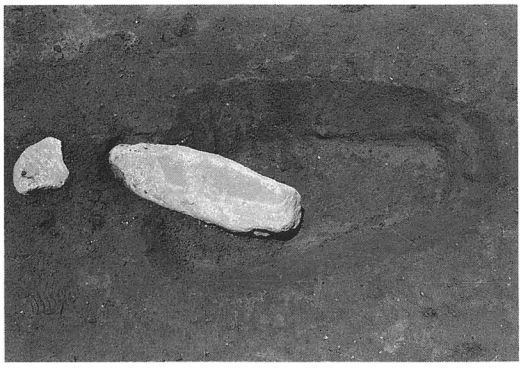
2．C2区第7b層上面遺構検出状況（西から）

3．C2区第6b層上面集石１（東から）

図版 4

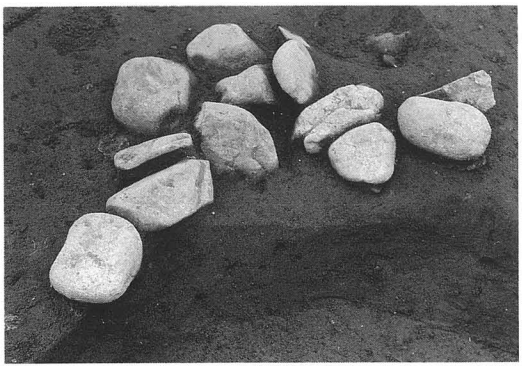


1．C2区第6a層上面SK 3



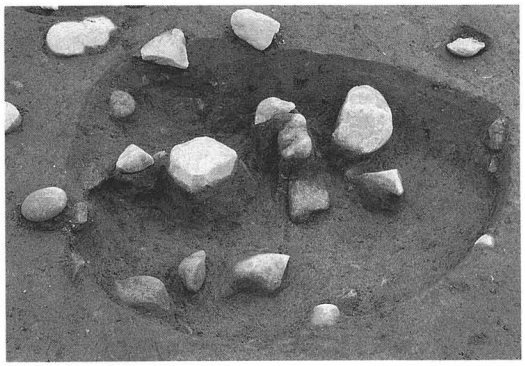
2．C2区第6c層上面SK 3

3．C2区第6c層上面SK 4

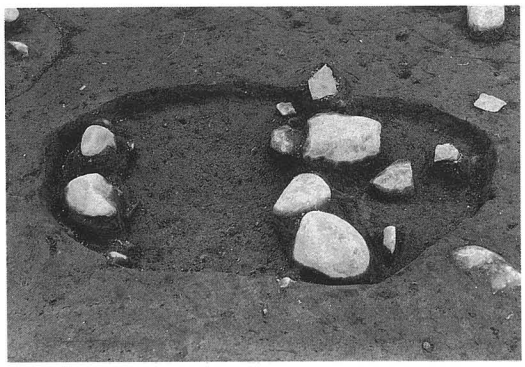


4．C2区第6c層上面集石 1

5．C2区第7a層上面SK 2



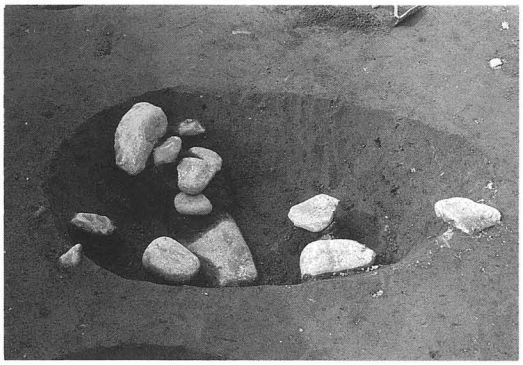
6．C2区第7a層上面SK 3



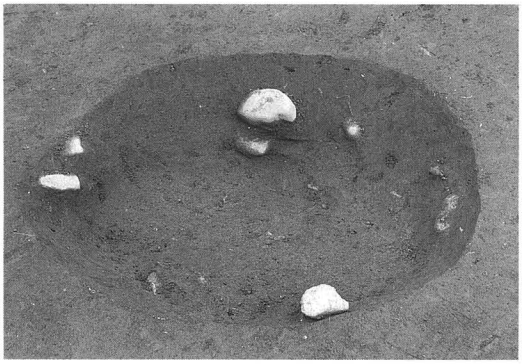
7．C2区第7a層上面SK 4

8．C2区第7a層上面SK 6

1．C2区第7a層上面SK 7



2．C2区第7a層上面SK 8



3．C2区第7a層上面SK 9

4．C2区第7a層上面SK10

5．C2区第7a層上面SK15

6．C2区第7a層上面SK16

7．C2区第7a層上面SK18

8．C2区第7a層上面SK19